

ラヴレツキはふたゝび眠られぬ夜を過した。彼は悲しくはなかつた、彼は焦立ちもしなかつた、内も外も彼は落着いてゐた、けれど彼は眠れなかつた。彼は過ぎ去つた昔を憶ひ出しもしなかつた。彼はたゞ自分の生涯を見凝めた、彼の心臓は強く平らかに搏つた、時は翔り過ぎた、そして彼は眠らうとは毫も思はなかつた。たゞ時折り、「これはみんなうそ事だ、馬鹿げた事だ」といふ考へが、心の表面に浮んで来た、それから彼は身體をしゃんとした、頭を俛れた、そしてまたもや彼自身の生涯を見凝めた。

## 二十九

マリイ・ドミトリエヴナは、ラヴレツキが翌朝彼女の家を訪ねたとき餘り温かく彼を迎へなかつた。「これが習慣になるのかしら？」と彼女は考へた。彼女は自分一個としては彼を餘り好まなかつた、そして今彼女をその影響のもとにおいてゐるパンシンは、昨夜極端な巧妙さと無頓着さをもつて、ラヴレツキのことを褒めたのであつた。彼女は彼をお客として見て居らず、そして親戚のために——殆んど家族の一人に——

態々かまつてゐる必要はないと考へてゐた。それで、半時間も経たぬうちに、彼はリーザと庭園の小徑を散歩してゐた。レナとシュロチュカとが彼等の傍で遊んでゐた。

・リーザは惱ましげな様子には見えなかつたが、いつもよりは顔色が蒼かつた。彼女は衣囊から小さく折つたあの新聞を取り出して、ラヴレツキに渡した。

『怖ろしいことですわね。』彼女は低い聲で言つた。

ラヴレツキは答へなかつた。

『けれども本當ではないかも知れませんわ。』と彼女は言ひ足した。

『それだから私には誰にも話して下さらないようにお願ひしたのです。』

リーザは二三歩黙つて歩いた。

『あなた』と彼女は始めた。『悲しい氣はなさいませんか？ 少しも？』

『私は自分で自分がどういふ風に感じてをるか解りません。』とラヴレツキは答へた。

『ですけれどあなたは一度あの方をお愛しになつたのでせう？』

『愛しました。』

『深く？』



「深く。」

1100

「それでもあの方の亡なれた事を悲しくお思ひになりませんか？」

「あれは私にとつて今亡なつた譯ではありません。」

「あなたの仰しやることは罪深いことですわ……私の申すことを御立腹遊ばさないで。あなたは私をあなたのお友達だと仰しやつて下さいませ——友達ならばどんな事でも言へますわ。私にとつてはそれは本當に怖ろしくさへ思はれますの。昨日あなたのお顔附は大層不深切でしたわ。あなたは、つい此のあひだ、あの方を非難なすつたことを憶えておらしつて？ あの方はおの時も多分この世に居られなかつたかも知れませんわ。それは怖ろしいことです。これは罰としてあなたに送られたものですわ。」

ラヴレツキは苦笑つた。

「あなたはそんな風にお考へですか？……私は少くとも今は自由の身です。」

リーザは軽く身慄ひした。

「澤山。そんな風に仰しやらないで。あなたの御自由はあなたにとつて何の役に立ちまして？ あなたのお考へにならなくてはならないことはそれではなかつて、赦し——」

「私はずつと以前にあれを赦しましたよ。」とラヴレツキは遮つた、そして手でちよつと身振をした。

「いゝえ、さうではありません。」リーザは激しく言つた、そして血がさつと彼女の顔に上つた。「あなたは、私の申すことがお解りになりませんでした。あなたはあなた御自身の爲めに赦しをお求めにならなくてはなりませんわ。」

「誰から？」

「誰からですつて？……神様のお赦しですわ！ 神様のほかに誰れが私達を赦すことが出来まして？」

ラヴレツキは彼女の手を掴んだ。

「あゝ、エリザベス・ミカエロヴナ、私を信じて下さい。」彼は叫んだ。「私はもう罰せられたのです、私はもう一切の償ひをしたのです、さうですよ。」

「それはあなた解りませんか。」リーザは低い聲で言つた。「あなたはお忘れになりましたのね——つい此の間、私にお話しなすつたとき、あなたはあの方をお赦しになりたくなかつたのでしたわ……」



二人は無言のまゝ小徑を歩いて行つた。

『それでお娘さんはどうなさいましたの？』とリーザは突然立ちどまつて訊ねた。ラヴレツキはハツとした。

『その事で氣を揉まないで下さい。私は方々へ手紙を出しておきました。私の娘の……あなたの言はれる……私の娘の未來は、安全です。氣を揉まないで下さい。』  
リーザは悲しげに微笑んだ。

『しかしあなたの言はれることは正しいです。』ラヴレツキは續けた。『私は私の自由をどうしませう？ それは私にとつて何の役に立ちませう？』

『いつあなたはその新聞をお受取りになりましたの？』リーザは彼の質問には答へないで言つた。

『あなた方がヴァンリエヴスキへ來られた翌日です。』

『あなたは一滴の涙も出なかつたと仰しやいますの？』

『え、私は非常に驚きました。しかし涙が何の役に立ちませう？ 過ぎ去つたことについて泣いてみたところで？——それに私の涙は乾上つてるではありませんか？ 彼女の

罪が私の幸福を破壊したといふ譯ではないのです。それは幸福といふものは私にとつて存在しなかつたといふことを私に見せてくれたに過ぎないのです。何等嘆くべき理由はなかつたのです。たゞし、これも確かなことは言へませんが——もしも私が二週間前にこの報知を受取つたらば、私もあるひはもつと深く悲しんだかも知れません。』

『二週間』リーザは繰返した。『で、その二週間のあひだに、どういふ出来事がありましたの？』

ラヴレツキは黙つてゐた、そしてリーザは突然前よりも一層紅くなつた。

『さうです、さうです、あなたはお當てになつた。』ラヴレツキはだしぬけに答へた。『この二週間のあひだに私は婦人の純潔なたましひといふのはどういふものであるかを知りました、そして私の過去は一層私から遠退のいてしまひました。』

リーザはひどく困つた、そして無言のまゝレナとシュロチュカの方へ行つた。小兒達は花壇の周圍で遊んでゐた。

『しかし私はこの新聞をあなたに見て頂いて満足です。』とラヴレツキは彼女の後を追ひながら言つた。『私はもうあなたから何も隠すことが出来なくなりました、そしてあなた



「からも同じやうに信頼して頂きたいと思ひます。」

「あなたさうお考へになりまして？」リーザは言つて、立停つた。「そんならばわたくし是非とも……ですけれど、いゝえ、駄目ですわ。」

「何ですか？ 言つて下さい、言つて下さい。」

「本當に、私なんだかそれをしてはならないやうに思ひます……ですけれど」リーザは言ひ足した、そして彼女は、微笑をもつて、ラヴレツキを振り返つた。「信頼すればすつかり信頼しなくては何にもなりませんわね。あなた御存知？ 私けさ手紙を貰ひましたのよ。」

「バンシンからですか？」

「えゝ、あの方からですの。……どうしてあなたお解りになりました？」

「あの人はあなたに結婚してくれろといふのですね？」

「えゝ」リーザは眞直ぐに、嚴かな顔附でラヴレツキの眼の中を見凝めながら言つた。ラヴレツキも同じやうにリーザを眺めた。

「それで、あなたはどういふ返事をあの人にしたのですか？」ラヴレツキは到頭言つた。

「私どう言つていゝか解りませんの。」リーザは組み合せた手を解いて、無意識に兩脇に垂らしながら答へた。

「ですが、あなたはあの人を愛してゐるのですね？」

「えゝ、私あの方は厭ではありません。あの方は善い人のやうに思はれますの。」

「三日前にあなたはそれと同じ事を、同じ言葉でもつて私に言はれましたよ。私の知りたいのは、あなたはあの人を、吾々が戀と呼ぶところの強い、熱い感情でもつて愛して居られるかどうかと言ふことです。」

「あなたがお解りの通りに——さうではありません。」

「あなたはあの人を戀しては居られない？」

「居りません。そしてそれが必要でせうか？」

「どういふ意味ですか？」

「あの方は母の氣に入つて居ります。」リーザは續けた。「あの方は深切な方です——私あの方に對して不服はありませんの。」

「それにも拘らずあなたは躊躇つて居られるのですね。」



『えゝ……そしてそれは……あなたが、あなたのお言葉が原因ですわ。あなたは一昨日あなたが仰しやつたことを覚えておらしたつて？』

『おゝ、リーザ』ラヴレツキは唐突に叫んだ、そして彼の聲は慄へてゐた。冷たい理窟でもつてあなた御自身を騙かしてはいけませんよ。愛なしには服従したくないといふあなたの心の叫びを、弱さだなどと言つてはいけません。あなたの愛しない人の前にそんな怖ろしい責任を持たうとしてはいけません。あなたはあの人を愛してゐられない、しかもあの人のもに——』

『私は従ひますの——私は何もしようとは致しませんわ。』とリーザは言はうとした。

『あなたの心にお従ひなさい、それだけがあなたに眞理を語ります。』ラヴレツキは遮つた。『経験とか打算とか——さういふ事は皆な虚榮であり死灰であります。地上の最も良きものを、唯一の幸福をあなた御自身に拒んではいけません。』

『あなたがさういふ事を仰しやるのですか、テオドル・イヴァニッチ？』あなたは戀の爲めに結婚なすつたのでせう——それでああなたはお仕合せでしたの？』

ラヴレツキは兩腕を投げ上げた。

『いゝえ、私のことを言つては下さるな。あなたは歪んだ教育を受けた、無経験な青年はどんな物を愛と取り違へるやうなことがあり得るか、お解りにならないのです。さうです、しかしそれにしても、どうして私は私自身を強ひて誹謗する必要があるませう？』

私はたつた今、私は決して幸福といふものを知らなかつたと言ひました……いゝえ、私は幸福でしたよ。』

『何ですか私には』リーザは聲を低めながら言つた。(彼女は、他人の言ふ事に不賛成な時には、焦立ちはしなかつたが、いつも聲を低めるのであつた)『テオドル・イヴァニッチ、この世の幸不幸は私共の所爲せゐではないやうに考へられますの。』

『いゝえ私共のせゐですよ、私の言ふ事を信じて下さい。』ラヴレツキはリーザの兩手を執りながら言つた。リーザは蒼ざめた、そしてほとんど怖ろしげにけれど落着いて彼を眺めた。『もしも私達自身私達の生涯を傷けさへしなければです。ある人達には、愛のための結婚は不幸を持ち來すでせう、けれどあなたにはさういふ事はありません、あなたの様にしつかりした性格やつきりしたたましひを持つて居られる方には。私はお願ひします、愛なしには誰とも結婚してはいけません——義務としてでも、諦念あきらめとしてで



も、その他の何のためであつても……それは冒瀆以外のものでありません、打算に過ぎません——それよりもつと悪いものです。私はそれを言ふ権利を持つてゐます。私はその権利のために實に高い價を拂ひました。そしてもしもあなたの神が——』

その時はじめてラヴレツキは、レナとシュロチュカとがリーザの傍に立つて、驚きのあまり啞のやうになつて彼を眺めてゐるのに氣がついた。彼はリーザの手を放した、そして急いで『どうか赦して下さい』と言ひながら、家の方へ行つた。

『たつた一言だけあなたに願ひしておきます。』彼は、リーザの傍へ歸つてきながら呟いた。『直ぐには決めないで下さい。暫く待つて下さい、そして私が言つたことを考へてみて下さい。たとへあなたが私を信用されないにしても、たとへ打算上の結婚をしようとして居られるにしても——その場合でもゴスポヂン・パンシンとの結婚はいけません。あの人は決してあなたの夫にはなり得ません。あなたは急がないことを私に約束して下さいますか?』

彼女は返事をしようとした、けれど、一言も出すことが出来なかつた——それは彼女が急ぐべく決心してゐたからではなかつた、それは彼女の心臓があまりにも激しく鼓動してをり、恐怖に似た感情が彼女の呼吸を止めたからであつた。

## 三十

歸らうとする間に、ラヴレツキはパンシンに出遭つた、そして兩人は冷たい挨拶を交した。ラヴレツキは宿に歸つて、部屋に錠を下して閉ぢ籠つた。彼はほとんど以前には経験したことの無い様な情緒を経験した。彼がさうした状態に彼自身を發見したのは随分久し振であつた。彼が彼の言ひ方によれば恰も河の底に居るやうな氣がしはじめて以來もう随分長い事ではなかつたか? 何がこんな風に事情を變へたのであつたらう? 何が彼をふたゝび表面に連れて出たのであつたらう? それは最もありふれた、もつとも避くべからざる事件——但しもつとも豫期せられざるものではあるが——死であつた! けれども彼は妻の死や自分の身の自由になつたことについては、リーザがパンシンに與へようとしてゐる返事についてほどに、考へてゐなかつた。彼は過ぐる三日の間に自分が彼女を違つた眼で見はじめてゐた事を感じた。彼は自分が、寂默の夜のなかを



リーザの事を考へながら家に歸る途中で、如何に自分に向つて『若しも……』と言つたかを想ひ出した。この『若しも』は過去について、不可能なことについて、言つたのであつたが、それは今成就されたのであつた、但し言ふ迄もなく、彼が想像した様にはないけれども。——彼が自由の身になつたといふ許りではほとんど何でもないのである。

『あの女は、母親の言ひなり通りになるだらう。』と彼は考へた。『彼女はパンシンと結婚するだらう。だが彼女がたとへあの男を拒んだところで、俺にとつてどれだけの相違があるか？』鏡の前を通りながら、彼は自分の顔をちらと眺めた、そして肩を揺つた。さうした考へに耽つてゐるうちにその日は見る見る過ぎ去つて、夜になつた。

ラヴレツキはカレエチナ夫人の家へ出掛けた。彼は急ぎ足で行つた、けれど家に近づくとき、彼は歩みを緩めた。入口の前にパンシンの馬車が停つてゐた。『よろしい。』ラヴレツキは考へた。『俺はイゴイストにはなるまい。』そしてさう考へ乍ら彼は入つて行つた。彼は誰にも會はなかつた、客間はしんとしてゐた。彼は扉を開けた、そしてマリイ・ドミトリエヴナがパンシンと骨牌をやつてゐるのを見た。パンシンは黙つて彼に頭をさげ、そしてマリイ・ドミトリエヴナは聊か顔を擧めながら、叫んだ。『まあ思ひ掛ない！』

ラヴレツキは彼女の傍に腰を下して、彼女の札を見はじめた。

『あなたも骨牌が解りました？』彼女は迷惑らしい氣持を隠した聲で言つた、そして自分の棄てた札を言つた。パンシンは九十を算してゐた、そして威嚴のある表情を顔に湛へて、丁寧に、落着いて札をめくり始めた。それが政事家といふものの骨牌のやり方であつた。そして彼はペテルブルグでも、彼が自分の深い常識や氣持のこなれてゐることについて好い印象を與へようと思ふ勢力のある大官を相手に、さういふ工合にやつたのであらう。『百と一つ、百と二つ、ハート、百と三つ。』彼の聲は調子よく響いた、そしてラヴレツキは彼の聲が、非難をもつてか自己満足をもつてか、どちらをもつて響くのか決し兼ねた。

『私はマルタ・チモファイエヴナにお目に懸かれませうか？』とラヴレツキは、パンシンが悠容とした態度——そこにはあの藝術家らしい痕跡は毫も見られなかつた——でもつてふたゝび札を切りはじめたのを見ながら、訊ねた。

『會へませうよ。あの方は二階のお部屋です。』マリイ・ドミトリエヴナは言つた。『訊ねて御覽なさい。』



ラヴレツキは二階へ行つた、そしてマルタ・チモフ・イエヴナが骨牌をしてゐるのを見出した。彼女はナスタシア・カルボヴナと「お婆さん」をやつてゐた。ロスキは彼を見て吠えた、けれど老婦人達は、殊にマルタ・チモフ・イエヴナは、彼を歓迎した。マルタ・チモフ・イエヴナはひどく気が昂つてゐるやうであつた。

『あゝ！ テオ、御免を蒙りますよ。』彼女は言つた。『さあお掛け、お前さん——もう直き濟みます。お前さんジャムをお上りかい？ シュロチュカ、この人に苺の壺を持つて来ておあげ。ほしくないかね？ さうかね、それならば、そこへお掛けなさい。たゞ煙草は喫はないようにね。私はお前さんの煙草は辛抱がならない——それに「水夫」が嚏をしますからね。』

ラヴレツキは急いで自分は煙草は喫ひたくないと言つた。

『お前さんは階下に居ましたかい？』老婦人は續けた。『誰れに會ひましたね？ パンシオンがまだ居ますかい？ お前さんリーザに會ひましたかい？ まだかね？ あの娘は先刻私のところへ來たいと言つてゐたのだよ。さうだ、そらあの娘が來ました。天使の噂をすれば……』

リーザが部屋に入つて來た、そしてラヴレツキを見ると彼女は顔を赧めた。

『私はほんのちよつとの間お邪魔にあがりましたの、マルタ・チモフ・イエヴナ。』と彼女は言ひはじめた。

『どういふ譯で、ちよつとの間だね？』老婦人は言つた。『お前さん達若い娘といふものは、一體どうしたもんだね？ 本當にちつともちつとして居ないんだねえ！ 御覽の通りお客様が見えてゐます。この人とお喋りして、お相手をしてゐておくれ。』

リーザは椅子の端に腰を下して、眼を擧げてラヴレツキを見た、そして自分とパンシオンとの會見の結果について話さないでゐることはとても不可能であることを感じた。彼女は顔を赧めてどうしてよいやらひどく當惑した。彼女がこの男と知り合ひになつたのはつい此の間のことではないか、減多に教會にも行かず、妻の死をそんなに輕々しく堪へ得るこの男と……しかも彼女はもう彼に自分の祕密をうちあけてゐる……彼が彼女に興味を持つてゐることは確かだ。彼女の方でも彼を信賴してゐる、そして彼に惹かれるやうな氣がする、けれどそれにも拘らず、彼女は、丁度見知らぬ人が自分の汚れを知らぬ處女の部屋へ入つて來たかのやうに、羞恥を感じはじめるのである。



マルタ・チモファイエヴナが彼等を助けに出た。『お前さんがこの人のお相手をしないうすれば』彼女は言つた。『誰がこの人をもてなしてあげるんだね？ 私は、この人には、年が寄り過ぎてゐる。この人は、私には、學問があり過ぎる。ナスタシア・カルボヅナには青春とかいふものが必要なだからね。』

『どういふ風にして私テオドル・イヴァニッチをおもてなしすればいいのでせう？』リーザは言つた。『もしもテオドル・イヴァニッチがお望みですなら、私何か弾いてあげた方がよくはないかと思ひますわ。』と彼女は躊躇ひながら言ひ足した。

『それは結構。お前さんは伶俐な娘だよ。』マルタ・チモファイエヴナは答へた。『階下へ行つといでなさい、そしてピアノが終つたら歸つておいでなさい。私は「婆さん」を掴まされて、腹が立つてならないから、もう一度やつて仕返しをしなくちや！』

リーザは立上つて部屋を出た、ラヴレツキも彼女の後に従つた。彼等が階段を降りる途中、リーザは立停つた。

『人の心は矛盾に充ちてゐるとよく人の言ふのは本當ですわ。』彼女は言ひ始めた。『あなたと奥さんの事を考へると私愛のための結婚が怖く、信じられなくなる筈です、け

れども私は——』

『あなたはあの人を斷られたのですか？』ラヴレツキは遮つた。

『いゝえ、ですけれど承諾もしませんでした。私あの方に何もかも話しました、私の感じてゐることを残らず……そして待つて頂くようにお願いしておきました。あなたそれで御満足でした？』彼女はちらと微笑を見せて言ひ足した、そして軽く欄干に觸れながら階段を駆け降りた。

『私何をお弾き致しませう？』彼女はピアノを開けながら訊ねた。

『何でもあなたのお望みのものを。』とラヴレツキは答へて、彼女の顔が見えるやうに席を取つた。

リーザは弾き始めた、そして長いあひだ指から眼を擧げなかつた。到頭彼女はラヴレツキを眺めた、そして止めた。彼の顔が彼女にはそれほどいつもと違つて不思議な様子に見えたのであつた。

『何でございますの？』と彼女は訊ねた。

『何でもありません。』彼は答へた。『私は幸福です、そして嬉しい氣持がしてゐます、



そしてあなたを見てみると嬉しくなります。続けて下さい。』

『私はかう思ひますの。』リーザは、一三分経つてから言つた。『もしも私を愛してゐられ、ばあの方はあの手紙をお書きにならなかつた筈だと。あの方は私が今お返事するところが出来ないことをお感じになつた筈だと……。』

『それは肝腎なことではありません。』ラヴレツキは呟くやうに言つた。『あなたがあの方を愛して居られないこと、それが肝要な點です。』

『止して頂戴！ 私達は何をお話してゐるのでせう？ あなたの<sup>なく</sup>お亡りになつた奥さんが私の眼の前にぼんやり見えますわ。私あなたのお言葉を聞いてると怖くなりますわ。』

『私のリーゼッタは随分巧く弾きますわね、さうぢやなくつて、ウラヂミル？』マリイ・ドミトリエヴナがこの時パンシンに言つてゐた。

『さうです。』パンシンは答へた。『非常に綺麗にお弾きです。』

マリイ・ドミトリエヴナは彼女の若い相手を優しく見詰めた。パンシンは、なほ一層眞面目な、物思はしげな顔附を装うた、そして『キング十四。』と宣した。

## 三十一

ラヴレツキは青年ではなかつた。彼はリーザが自分の心に吹き込んだ感情について長く自分を騙してゐることが出来なかつた、そしてこの日彼は自分が彼女を愛してゐることを確かめた、そしてこの確信は彼にあまり喜びを齎さなかつた。『三十三にもなつて』と彼は考へるのであつた。『俺は女の前に俺のたましひを平伏させるくらゐの事しかする事がないのか？ だがリーザと「あの女」とは比較にならない。リーザは俺から恥しい犠牲を要求するやうな事はあるまい。あれは俺を俺の仕事から離れさせるやうな事はあるまい。あれはあべこべに私を正直な、厳しい労働に對して力づけてくれるだらう。そして吾々は二人とも何か美しい目的に向つて進んで行くだらう。さうだ。』彼は結論を下した。『これは一切申し分が無い。だが彼女が俺と一緒に來ようとしなはれないのはよくないな。彼女が俺に俺の話を聞いてると怖くなると言つたのは、無意味なことではないんだ。だがリーザはパンシンを愛しては居ない——まあせめてもの慰めといふものさ！』



ラヴレツキはヴァシリエヴスキに行つた、しかし彼はそこに四日と居なかつた、その四日間が彼には堪へ難かつた。彼はまた期待のために心を悩まされた。ジュウル氏によつて傳へられた報知は一應確めてみる必要があつた、而も彼はどんな手紙も受取らなかつた。彼は町へ歸つて、カレエチン家で夕べを過した。彼はマリイ・ドミトリエヴナが彼に對してよく思つてゐないことを明かに見ることが出来た。けれども彼は彼女と骨牌をして十五ルーブル負けたので、いくらか彼女の御機嫌を取り返すことが出来た。さうして彼はほとんどリーザと二人きりで半時間ばかり過した。前の晩リーザは母親から、「あんな可笑しな」とあまり親しくしないように、と忠告されたのであつたけれど。彼はリーザのうちに變化を見出した。彼女は一層考へ深くなつたやうに、彼には思はれた。彼女は彼が四日も來なかつたことを咎めた、そして彼に明日彌撒にお出でになりませんかと言つた。(翌日は日曜であつた。)

『いらつしやい。』彼女は彼がまだ答へないうちに追つかけて言つた。『私達は御一緒に「あの方」のたましひの平和のために祈り致しませう。』そしてそれから、自分はどうしていゝか解らない——パンシンにそんなに長く返事を待たしておく権利が自分にあるか

どうか解らない、とさういふ事を言ひ足した。

『何故ですか?』ラヴレツキは答へた。

『それは』彼女は言つた。私の決心が何方になるか大概解つて來ましたからですの。』彼女は頭痛がすると言つた、そしていくらか躊躇ひながらラヴレツキに指先を與へて、それから自分の部屋へ上つて行つた。

翌日ラヴレツキは彌撒に行つた。リーザは彼が教會に行つた時、もう先に來てゐた。彼女は彼の來たことに氣がついた、彼の方を見はしなかつたけれども。彼女は熱心に祈つた、彼女の眼は軟かに輝いた、和やかに彼女は頭をさげそしてまた擧げた。彼は彼女が自分の爲めに祈つてくれる事を感じた、そして驚くべき温情しさが彼のたましひを充たした。彼は自分が罪人のやうな氣がした、けれどもそれは彼にとつて悪い氣持ではなかつた。きちやうめんに立つてゐる人々、單純な多くの顔、音色の豊かな歌唱、香の薫り、窓からさし込む長い斜の光線、さては壁や穹形をした天井の薄暗がりまでもが、皆な彼の心に向つて話しかけた。彼が教會に入つたのは、神の前に頭を垂れたのは、久し振であつた。今でも彼は一の祈禱も口にしなかつた、言葉なき祈りすらしなかつた——



しかし、ほんの刹那のこととは言へ、肉體は立つたまゝであつたとはいへ、彼のあらゆる思念は恭々しく平伏して、大地を抱いた。彼は自分が小兒の時分教會に来る毎にお祈りをしたことを、そして到頭あるとき、額に軽い、冷たい何者かの手を感じたことを思ひ出した。『矢張天使様が』と彼はそのとき考へたのであつた。『來て下すつたのだ、そして私の額に選ばれた者の烙印を捺して下すつたのだ。』彼はリーザをちらと見た。『お前が私を此處へ連れて來て呉れたのだ。』と彼は考へた。『私を癒してくれ、私のたましひの傷を癒してくれ。』彼女は、依然として無言で祈つてゐた。彼女の顔は彼には嬉しげに見えた、そして彼の心はふたゝび軟らかになつた。彼は或る一つのたましひのために平和を、そして彼自身の爲めに赦しを求めた。

彼等は教會の外で出遭つた。彼女は快活な、深切な、眞面目な様子で彼に挨拶した。教會の周圍に若草が燦然たる日光のなかに艶々と輝いて見えた。日光は婦人連の明るい衣服や頭巾などを鮮かに引き立たせた。壁の上には雀共が囀つてゐた、そしてそこから近邊の教會の鐘がそのメロヂアスな口吟みでもつて空を充すやうに思はれた。

ラヴレツキは帽を脱いで微笑んで立つてゐた。微風が彼の頭髮に、リーザの帽のリボ

ンの端に戯れた。彼はリーザを、そして彼女と一緒に來てゐたレナを、馬車に助け載せた、持ち合せの金を乞食共に頒けてやつた、そして平和な氣持を抱いて家に歸つた。

## 三十二

苦しい日々がテオドル・イヴァニッチのために始まりつゝあつた。彼は絶えず熱を病んでゐるやうであつた。毎朝彼は郵便局へ手紙や新聞を取りに行つた、そして熱心にそれ等を開けてみた、けれど何處にも彼はあの運命的な風説を確めるものも、打消すものも見出さなかつた。時々彼は彼自身にとつて悪漢になつた。『どうしたんだ、これは？』彼は考へるのであつた。『俺は、まるで烏が血を待つやうに、俺の妻が確實に死んだといふ報知を待つてゐるぢやないか！』

彼は毎日カレエチン家を訪ねた、そしてそこで彼は段々居心地が悪くなつた。女主人は公々然と彼に對して氣拙い顔を見せ、態とらしい卑下の態度で彼を迎へた。パンシンは誇張した懇懃さでもつて彼に對した。レムは一層ひどく人間嫌ひになつてゐて、彼を



見ても碌に挨拶もしなかつた。けれど、就中よくないことは、リーザが彼を避けるやうに思はれることであつた。偶々彼と二人きりになることがあると、彼女は以前の信頼の態度とは打つてかはつて、不安な様子を見せるのであつた。彼女は彼に何を言つていゝか解らなかつた、そして彼の方でも當惑を感じた。リーザは、二三日のうちに、以前彼が知つてゐた彼女とは、別人になつてゐた。彼女の身のこなしや聲に、彼女の笑ひのうちにすら、祕密な悩みが、そして前には決して見られなかつた不安定なところが認められた。

マリイ・ドミトリエヴナは、本當のイゴイストらしく、何事も察しなかつた。けれどマルタ・チモファイエヴナは厳しく彼女のお氣に入り、に眼を附け始めた。ラヴレツキは一度ならずリーザにあの新聞を見せた事について彼自身を非難しはじめた。彼は強ひて、自分のたましひのなかに純な感情にとつて不都合な動亂の一種の様なものがあつたのだと言つて、自分自身に言譯をしなくてはならなかつた。彼はまたリーザの様子の變つたのは彼女が彼女自身に對して、パンシンに與ふべき返答に關する彼女自身の不決定に對して、闘つてゐる結果だと想像した。或る日彼女は彼のところに一冊の書物を持つて來た。

それはウ・ルタア・スコットの小説で、彼女が彼に頼んで借りてあつたものであつた。

『お讀みになりましたか?』と彼は言つた。

『いゝえ、私たゞ今書物を讀んでゐる暇はありませんの。』と彼女は言つて、行つて了はうとした。

『ちよつとの間居つて下さい。もう随分長いあひだあなたと二人きりで居つたことはありませんよ。あなたは私を怖れて居られるのですか?』

『えゝ。』

『失禮ですが、どういふ譯ですか?』

『私存じませんの。』

『言つて下さい』彼は言ひ始めた。『あなたはまだお決めにならないんですね?』

『あなた何を仰しやりたいのですか?』彼女は眼を擧げないで、呟くやうに言つた。

『あなたは解つて居られます。』

リーザは突然嘆息をついた。

『私に何もお訊ねにならないで頂戴。』彼女は熱心な語調で言つた。『私何にも解りませ



んの。私自分で自分のことが解りませんの。』そして彼女は急いで行つて了つた。

翌日、ラヴレツキが午餐のあとでカレエチン家へ来たとき、彼はそこに宵の晩禱の用意が整つてゐるのを見出した。食堂の隅に、白い布で蔽つた四角な卓子の上に、もう金色の框を嵌め、小さな不透明な寶石の後光をうけた聖像が、壁に凭せかけて置かれてあつた。灰色のフロクコートを着てスリッパを嵌めた一人の老僕が、そろそろと無言で部屋を歩いて行つて、細い燭臺に載せた二本の蠟燭を聖像の前に立て、十字をきり、頭をさげ、そして黙つて部屋を去つた。灯のついてない客間は空虚であつた。ラヴレツキは食堂に近づいて、今日は誰かの命名日かと訊ねた。彼は低い聲で『いゝえ』と答へられた。そしてこの晩禱はエリザベス・ミカエロヴナとマルタ・チモファイエヴナとの希望で催されたので、あの不思議の偶像が迎へられる筈であつたけれども、折悪しくそれは三十ヴェルストもある田舎の或る病人のところへ行つてゐるので迎へられなかつた、といふことを聞かされた。僧侶が間もなく補祭達と一緒に來た。彼はもう大分年寄りで、頭の頂邊が禿げてゐた、そして彼は玄關で聲高に咳拂ひをした。婦人達が直き圖書室から一人一人出て來て、祝福を受けるために坊さんの傍に行つた。ラヴレツキは無言で彼等に頭を下

げた、そして彼等も無言で彼に會釋を返した。僧侶はちよつとの間待つた、もう一度咳拂ひして唾を吐いた、それから低い太い聲で、もう始めてようござるか?』と訊ねた。

『どうかお始め下さいまし、あなた』とマリイ・ドミトリエヴナは答へた。

彼は祭服を着はじめた。白い法衣の聖器守はひどく卑下した態度で少し炭を下されと頼んだ。香の薫りが湧いた。男女の召使ひ共が玄關から入つて來て、入口の近くにせせこましくかたまつて立停つた。決して階下の部屋に來ることのないロスキが突然食堂に現れた。人々は彼を追ひ出さうとした。彼は怕がつて、そこらちう駆け廻つた、そして蹲つて了つた。一人の従僕が彼を擱へて連れ出して了つた。

晩禱が始まつた。ラヴレツキは、慣れない、ほとんど悲しいやうな氣がしながら、隅つこにひつこんだ。彼は自分の感じてゐることを正しく決定しかねた。

マリイ・ドミトリエヴナは皆の前に、多くの椅子の前に立つてゐた。彼女は女らしく、大貴婦人らしく鷹揚に、十字をきつた——周圍を見廻すかと思へば不意に天井を仰いだりしながら、それは彼女にとつて退屈であつた。マルタ・チモファイエヴナは何か考へてゐることがある様子に見えた。ナスタシア・カルポヴナは床に跪いて頭をさげ、それから



リエヴナは、いつもの吹通しの風を怖がることも忘れて窓や入口をすつかり開け放させ、今夜は骨牌はしない事にしませう、かういふ晩に骨牌をするのは罪です、かういふ晩には自然を楽しまなくてはなりません、と言つた。お客はパンシン一人であつた、そして彼は、この夕景の美に感動し、藝術的な感情に充ち溢れながら、しかもラヴレツキの前では歌ひたかないので、手助けに詩を引つ張つて來た。彼はレルモンツフの詩を二つ三つ朗讀した(ブーシュキンはこの時分まだ流行になつてなかつた)、けれど彼の読み方は餘りに意識的で、不必要な解釋があつた。それから突然、自分の感動が恥しくなつたかのやうに、彼はあの有名な「瞑想」といふ詩を自分の理論の骨子として、當代の青年を非難しはじめた、そしてもしも自分の手に權力があつたらば、自分はどんな風にやつて行く積りだかといふ事を説明する機会を失はなかつた。「ロシアは」と彼は言つた。「ヨーロッパから分離しました。吾々はヨーロッパに追つ附かなくてはなりません。吾々は若年だといはれてゐる——それは馬鹿げた事です。さうです、そして吾々は若年であつて發明の能力を持たないと言はれて居る。X——自身も吾々は鼠落し一つ工夫することが出來ないと言つて居る。それ故に、吾々は是非とも他から借りなくてはならないのです。吾々

は病んでゐるとレルモンツフは言ふ。私は彼に賛成します。けれども吾々が病人であるのは、吾々が半分だけヨーロッパ人になりかゝつて居るからです。吾々はよつて以て吾々自身を傷けたその同じ道具でもつて、吾々自身を治療しなくてはなりません。(土地臺帳か、とラヴレツキは思つた。)吾々は(とパンシンは續けた)最善の頭腦——Les meilleurs têtes——を持つてゐます、それについて吾々は長い以前から自信がありました。あらゆる國民は事實において同等であります。たゞよき制度を導き入れさへすれば、目的は達せられます。恐らく一切を人民の現在の状態に適應させることが出来るかも知れない。それが吾々の仕事です、人民の(彼はすんでの事で皇帝のといふところであつた)僕である吾々の仕事です。けれども騒々しく騒ぐには當りません——必要な場合には制度が日常生活そのものを變更するでせう。」

マリイ・ドミトリエヴナはやさしく頷いて、パンシンに同意を示した。「何といふ聰明な人が」と彼女は考へた。「私の客間で話してゐるのだらう！」

リーザは、窓に凭つかゝつて、黙つてゐた。ラヴレツキも沈黙を守つた。マルタ・チモファイエヴナは、隅つこで彼女の友達と骨牌をしながら、何か呟々獨り言を言つてゐた。



どつか穩かな軟かな感じのする音を立て、立ち上つた。リーザはちつと、どんな身振りもしないで、立つてゐた。彼女の顔の強い表情から、彼女は熱心に、熱烈に祈禱をしてゐるのだといふ事が解つた。晩禱が終つたとき、彼女は十字架に唇を押し付けそして僧侶の大きな赤い手にも接吻した。

マリイ・ドミトリエヴナは僧侶を茶に招待した。彼は祭服を脱いで、いくらか世間的な様子になつた、そして婦人達と一緒に客間に入つて行つた。あまり賑かでない談話が始まつた。僧侶は茶を四杯飲んだ、絶えず頭の禿げたところを拭いた、そして色んな話のうち、アヴォシユンコフといふ商人が教會のドームを鍍金するために七百ルーブル費したことを話した。そして彼はまた或る枯草熱の治療法を打ち明けた。

ラヴレツキはリーザの傍に座をしめた、しかし彼女は黙つて、ほとんど峻嚴な容子をしてゐた、そして一度も彼を眺めなかつた。彼女は故意に彼のことを考へないでゐるかの様に見えた。彼女は彼女のなかの或る冷たい、刹那的の恍惚から生れたやうな表情をしてゐた。ラヴレツキは、自分でも譯わからずに、微笑しようと、何か面白い事を言はうとした。けれど彼の心の中には擾亂があつた、そして到頭彼はひそかに當惑を感じな

がら辭し去つた。彼はリーザのなかに何か彼の達し得ない物のあることを意識した。

また別の場合に、ラヴレツキはギデオノヴスキの執拗い、しつこ退屈な話に耳を貸しながら、客間に坐つてゐた。突然、自分でも何故だか知らずに、彼は振り向いて、リーザの眼のなかに深い、注意深い、訊ねるやうな眼附をとらへた、そしてその訊ねるやうな眼附は先刻から彼に注がれてゐたのであつた。その夜一夜ラヴレツキはそれを彼の心から追ひ退けることが出来なかつた。彼は青年が戀をするやうには戀をしなかつた、溜息ついたり鬱々と思ひ惱んだりすることは彼に適しなかつた、そしてリーザもさうした種類の感情を吹きこむ女ではなかつた。けれども戀はどんな年齢としごろにおいてもその苦惱を持つてゐる——さうしてラヴレツキの盃は滿ちた。

## 三十三

ある時、ラヴレツキは、いつもの習慣通りに、カレニチナ夫人の客間に坐つてゐた。押つかぶさるやうな蒸暑い日中に引き續いて、美しい夕暮が來た、そしてマリイ・ドミト



リエヴナは、いつもの吹通しの風を怖がることも忘れて窓や入口をすつかり開け放させ、今夜は骨牌はしない事にしませう、かういふ晩に骨牌をするのは罪です、かういふ晩には自然を楽しまなくてはなりません、と言つた。お客はパンシン一人であつた、そして彼は、この夕景の美に感動し、藝術的な感情に充ち溢れながら、しかもラヴレツキの前では歌ひたくないので、手助けに詩を引つ張つて來た。彼はレルモンツフの詩を二つ三つ朗讀した(ブーシュキンはこの時分まだ流行になつてなかつた)、けれど彼の読み方は餘りに意識的で、不必要な解釋があつた。それから突然、自分の感動が恥しくなつたかのやうに、彼はあの有名な「瞑想」といふ詩を自分の理論の骨子として、當代の青年を非難しはじめた、そしてもしも自分の手に權力があつたらば、自分はどんな風にやつて行く積りだかといふ事を説明する機会を失はなかつた。「ロシアは」と彼は言つた。「ヨーロッパから分離しました。吾々はヨーロッパに追つ附かなくてはなりません。吾々は若年だといはれてゐる——それは馬鹿げた事です。さうです、そして吾々は若年であつて發明の能力を持たないと言はれて居る。X——自身も吾々は鼠落し一つ工夫することが出來ないと言つて居る。それ故に、吾々は是非とも他から借りなくてはならないのです。吾々

は病んでゐるとレルモンツフは言ふ。私は彼に賛成します。けれども吾々が病人であるのは、吾々が半分だけヨーロッパ人になりかゝつて居るからです。吾々はよつて以て吾々自身を傷けたその同じ道具でもつて、吾々自身を治療しなくてはなりません。(土地臺帳か、とラヴレツキは思つた。)吾々は(とパンシンは續けた)最善の頭腦——Les meilleurs têtes——を持つてゐます、それについて吾々は長い以前から自信がありました。あらゆる國民は事實において同等であります。たゞよき制度を導き入れさへすれば、目的は達せられます。恐らく一切を人民の現在の状態に適應させることが出来るかも知れない。それが吾々の仕事です、人民の(彼はすんでの事で皇帝のといふところであつた)僕である吾々の仕事です。けれども騒々しく騒ぐには當りません——必要な場合には制度が日常生活そのものを變更するでせう。」

マリイ・ドミトリエヴナはやさしく頷いて、パンシンに同意を示した。「何といふ聰明な人が」と彼女は考へた。「私の客間で話してゐるのだらう！」

リーザは、窓に凭つかゝつて、黙つてゐた。ラヴレツキも沈黙を守つた。マルタ・チモファイエヴナは、隅つこで彼女の友達と骨牌をしながら、何か呟々獨り言を言つてゐた。



パンシンは部屋をあちこち歩きながら上品に、けれど祕密の悪意をもつて語つた。彼が當代の青年全體を非難してゐるのでなく、自分の知つてゐる二三の人を非難してゐるのであることは明かであつた。

庭園の大きな紫丁香花の繁みに一羽のナイチンゲールが住んでゐた、そして彼の最初の夜の調べがパンシンの雄辯な説話の合間々に鳴り響いた。宵星が薔薇色の空に、しなな樹の静かな梢の上に彼等の灯を點じつゝあつた。

ラヴレツキは立上つてパンシんに答へはじめた。論争が続いた。ラヴレツキは當代の青年とロシアの獨立とを辯護した、彼は彼自身と彼の時代の青年とを甘んじて一つの犠牲とした、けれども新時代の人々、彼等の確信および彼等の希望を辯護した。

パンシンは鋭いそして腹立ちつばい調子で答へ、聰明な人間はあらゆる物を變へなくてはならないと言つた、そして遂には自分の侍従としての地位や外交官といふ職業さへも打忘れて、ラヴレツキを愚圖な保守主義者と呼び、剩へ極めて漠然とではあつたが、彼のあやふやな社會上の地位について諷刺するやうな事までした。

ラヴレツキは立腹しなかつた。聲を高めもしなかつた（彼はミカエライヴィッチも自分

を愚圖と——しかしヴォルテールの弟子と——呼んだことを想ひ出した。）そしてあらゆる方面から穩かにパンシンを撃破した。彼はパンシんに故國に關する知識や、たとへ消極的な理想であるにしてもとに角一個の理想に對する眞の信仰や、さうした物に支持されない傲岸なとんぼがへりの變化の不可能なことを示した。彼は實例として彼自身の教育を提出し、何を差し措いても第一に人民の權利を認めることを、その前に謙遜であることを要求し、それなくしては虚偽に對する勇氣すら不可能であることを説いた。そして最後に彼は輕々しく時と力とを浪費してゐるといふ彼自身に對する非難を承認した。

『一々立派なお説ですな。』論陣を亂されたパンシンは叫んだ。『でロシアに歸つて來られた今、あなたは何をされるお積りですか？』

『土地を耕します。』と、ラヴレツキは答へた。『それ以上よく出來ないほどに耕作に努めます。』

『それは、無論、大層結構です。』パンシンは返答した。『そして私が承知して居るところでは、あなたはその方面で既に多大の成功を收めて居られるさうです。しかしあなたも萬人がさういふ種類の仕事に適して居る譯でないことを承認されるでせうね。』



『詩的な生れの方は』マリイ・ドミトリエヴナがパンシンの助勢に出て、言った。『確かに土地を耕すといふ風な事は出来ません——それに、ヴラヂミル・ニコライアヴィッチ、あなたは何でも盛んな事を爲さるやうに生れてゐらつしやるのですよ。』

これはパンシンにとつてすらあんまりであつた。彼は面喰つた、そして談話は熄んでしまつた。彼は話題を明るい星空や、シューベルトの音楽に持つて行かうと企てた。けれど何を言つてもそれつきりになつて了つた、で、彼は到頭マリイ・ドミトリエヴナに骨牌をしようと申し出した。

『何ですつて！　こんな晩に！』彼女は弱々しく答へた。そしてそれにも拘らず骨牌札を持つてくるやうに呟附けた。

パンシンは新しい札の包み紙を音立て、破いた、そしてリーザとラヴレツキは、言ひ合せたやうに、立上つてマルタ・チモファイエヴナの傍に席を取つた。突然兩人とも一切が自分達にとつて非常に幸福なやうな氣がして、二人きりで居ることが恐ろしいくらいであつた、そしてそれと同時に彼等は兩人とも自分達がこの數日のあひだ経験したいぶせき氣持は消え失せて、ふたゝび歸つて來ないやうな氣がした。

老婦人はそつと、軽くラヴレツキの頬に觸つて、狡さうに瞬いてみせ、そして幾度か頷きながら、『お前さん、あの知つたかぶりの男をやつゝけてくれましたね』と囁いた。部屋ぢうがひつそりと押し黙つた。たゞ蠟燭の燃える弱々しい音が聞えるばかりであつた、そして時たま手の卓子を打つ音や軽い叫びや、あるひは札の値を言ふ聲が聞えた。一方では開け放した窓を通して、重く露を含んだ空氣と共に、廣い波になつて、ナイチンゲールの歌の力強い、挑戦的にさへ聞える調べが流れ込むのであつた。

### 三十四

リーザはラヴレツキとパンシンとの論争のあひだ、一言も發しないで、二人の言ふことを注意深く聽いてゐた、そして自分が全然ラヴレツキの側がはにあることを感じた。彼女はほとんど政治の事は考へなかつた、けれどもこの世間的なお役人の高慢な調子（彼は今まで一度もこんなにつけつけと話したことはなかつた）は彼女の反感を惹起した、そして彼のロシアに對する侮蔑は彼女を傷けた。自分は愛國者だといふ考へはリーザの心



に入らなかつた。けれども彼女のたましひにおいて彼女はロシア人民の側にあり、ロシア的な心の形式が彼女を悦ばした。母親の領地の執事が町に來ると、彼女は強ひて遜るやうな様子はなく、彼等の相手をして眞面目に幾時間も話し込むのであつた。

ラヴレツキはこれ等のことを感じてゐた、そして彼はパンシン一人ならば敢て返答する勞を取らなかつたであらう——彼はたゞリーザ一人のために話したのであつた。彼等は一言も交さなかつた、眼も滅多に出遭さなかつた、しかし兩人とも自分達はその夜非常に近づき合つたことを了解した、彼等は自分達は同じ物を同じ工合に愛し、また愛さないことを、了解した。たゞ一つの事で彼等は別れ別れになつてゐた、けれどもリーザは祕かに彼を上帝の方へ導いてゆかうと思つてゐた。

彼はマルタ・チモフ・アイエヴナの傍に座を占めて、勝負の様子を見てゐるやうであつた。そして彼等は事實勝負を見てゐた、けれどもそれと同時に彼等の心はどちらも彼等の胸の内で膨らんで、何物をも——逃さなかつた。彼等の爲にナイチンゲールは歌ひ、星は輝いた。彼等のために樹々は、その睡りのうちにうまいの歌を、穩かな温みを持つたそよ／＼した夏の歌を、口吟んだ。

ラヴレツキは自分を押し流して行く波に抵抗しようとしなかつた——そして悦んだ。けれども若い少女の純潔なたましひの胸に現はれた思想はとても言葉では釋明することは出来ない。それは彼女自身にとつて神祕であつた——それはあらゆるものにとつて神祕であらせておかうではないか。如何に穀物の種子が、生きそして實るやうに命ぜられて、母なる大地の胸から液汁を吸取りそして成熟するかは、誰れも知らず、誰れも見ることなく、また未來永劫見ることはないであらう。

十時が來た。マルタ・チモフ・アイエヴナはナススタシア・カルボヅナを連れて二階に退いた。ラヴレツキとリーザとは部屋を横切つて歩き、庭園に續くところの開け放した入口の前に立つた。彼等は臙ろなる無限に眺め入り、それからお互を眺め合つて、そして微笑んだ。さうして彼等は、あだかも自分達は互ひに手を握り合せて、話さなければならぬ事柄はすつかり話して了つたかのやうな氣がした。兩人は踵を返してマリイ・ドミトリエヴナとパンシンの方へ歩いた。彼等の勝負はまだ續いてゐたのである。最後の「王」が到頭終つた、そして女主人は立ち上つた。パンシンはマリイ・ドミトリエヴナの手に接吻して、もう誰れも他の幸福な人達が休息を求めぬのを、あるひは夏の夜を楽しむのを障



げる者は無い、しかし自分は朝まで馬鹿げた書類と首つ引きしなくてはならない、とさういふことを言つた。彼は冷やかにリーザに別れを告げて立ち去つた。(彼は、リーザから自分の申し込みに對する返事を待たされようとは豫期してゐなかつた、でそれ故彼女に對して不機嫌であつた。) ラヴレツキは、彼の後から家を出た。彼等は門のところを別れた。パンシンは眠つてゐる馭者を、杖の先で首の邊を突つついて起し、そして驅け去つた。ラヴレツキは家へ歸りたくなかつた、で彼は町を出て押つ開いた田舎の方へ歩いて行つた。夜は静かで明るかつた、月は無かつたけれども。ラヴレツキは重く露をおいた草の上を長いあひだ彷徨つた、そして最後に一條の狭い小運に出たので、それに従つて行つた。それは彼を長い垣根のあひだの一つの耳門(くみど)に導いた。彼は、自分でも譯解らずに、それを押し開けようとした。それは、あだかも彼の手を待つてゐたかのやうに、微かに軋んで開いた。ラヴレツキは庭園のなかに入つた、楡の樹立に挟まれた邊を二三歩進んだ、そして突然愕然として立停つた。彼はカレエチナ夫人の庭園を認めたのである。彼は直ぐ様よく茂つた樹立の蔭になつた暗い場所に歩み寄つた、そして長いあひだ訝りながら、肩を揺りながら立つてゐた。

『こりや偶然ぢやない。』と彼は考へた。

周圍はひつそりと押し黙つてゐた、どんな物音も家から聞えて來なかつた。彼は注意深く進んで行つた、すると並樹道の曲り角から家の暗い正面が見えた。多くの窓のうち二つから微かな明りが見えた。リーザの部屋の白い窓帳の背後に蠟燭が一つ燃えてゐた、そしてマルタ・チモフ、イエヅナの寢室に、偶像の前に、小さなランプの赤い焰がしつかりと燃えて、金色の窓縁に照り映えてゐた。階下の、露臺への出口は大きく開いてゐた。

ラヴレツキは木のベンチに腰を下して、片手をついて露臺への出口とリーザの部屋の窓とを見凝めた。町の時計が眞夜中を報じた、それから家のなかで小さな時計が微かに十二度うつた、そして夜警の男が夜警の板を打ち鳴した。ラヴレツキは何も考へなかつた、何事をも豫期しなかつた。自分をリーザの近くに感じることが、彼女の庭園のなかに、そして彼女が實に屢々坐つた腰掛に坐つてゐることが、彼にとつて懐しかつた。リーザの部屋にあつた灯が消えた。

『おやすみ、私の可愛い人。』とラヴレツキは囁いた、そしてやはり彼女の窓から眼も放



さずに、身動きもしないで坐つてゐた。突然灯りが階下の窓の一つから輝いた、別の窓に移つた、第三の窓に移つた——誰かが灯りを持つて階下の部屋々々を通つてゐるのであつた。『リーザかしら？ そんな事はあり得まい！』……ラヴレツキは立ち上つた——彼は見慣れた顔をちらと認めた、そしてリーザが應接間に現れた。彼女は白い服装をしてゐた、そしてゆるく束ねた彼女の髪は両肩に降りかゝつてゐた。彼女は音もなく卓子に近づいて、その上に屈み込み、蠟燭立を置いて、何物かを探した。それから、庭園の方を振り向いて、彼女は開け放した入口に近寄つた。そしてすつかり眞白な、穩おとなし、しとやかな姿が、闖際に立つた。

戦慄がラヴレツキの四肢を通り過ぎた。

『リーザ！』ほとんど聞えない程の言葉が彼の肩から裂きとられた。

彼女はぶるつと慄へた、そして暗黒のなかを視き込んだ。

『リーザ！』ラヴレツキはもつと聲高に繰返した、そして並樹道の暗黒のなかから歩み出た。

リーザは怖ろしげに彼の方を眺めて、ハツと後退りした。彼女は彼を認めたのであつ

た。彼は三たび彼女を呼んだ、そして彼女の方へ手を差し出した。彼女は戸口を離れて庭園に進み出た。

『あなたですか？』彼女は低い聲で言つた。『あなたが、此處へ！』

『私は——私は……聞いて下さい。』ラヴレツキは囁いた、そして彼女の手を掴んで、彼女をベンチのところへ導いた。

彼女は躊躇ためらひもせず彼と一緒に رفت。彼女の蒼い顔や見凝めた眼や、また彼女のあらゆる動作が、無言の驚愕を言ひ現はしてゐた。ラヴレツキは、彼女をベンチのところに連れて行くと、その儘彼女の前に立つた。

『私は此處へ来る考へはなかつたのです。』と彼ははじめた。『私は、こゝへ連れて來られたのです。……私は——私は——私はあなたを戀して居ります。』そして彼の聲は彼が感じてゐた恐怖を思はず言ひ現はした。

リーザは徐々に眼を彼の方へ向けた。その時はじめて彼女は自分が何處に居つてそして何事が起つてゐるのか解つたやうに見えた。彼女は立ち上らうとした、けれどそれが出来なかつた、そして両手で顔を蔽うた。



『リーザ。』ラヴレツキは言つた——『リーザ！』彼は繰返した、そして彼女の足下に跪いた。

彼女の肩は震へはじめた、そして彼女の蒼白い手の指は一層ひじと顔に押しつけられた。

『どうしたのですか？』ラヴレツキは呟いた。そして彼は穩かな獻歎の音によつて答へられた。彼の心臓は鼓動を止めた——彼はこの涙の意味を了解した。

『あなたが萬一私を愛して下さることがありませうか？』と彼は囁いた、そして彼女の膝に觸つた。

『お立ちなすつて。』と彼女の唇から聞えた。『お立ちなすつて、テオドル・イヴァニッチ。私は此處で何をしてゐるのでせう——あなたと私とは？』

彼は立ち上つて、彼女の傍に坐つた。彼女は泣き止んでゐた、そして涙に充ちた眼で彼を注意深く眺めた。

『私達にして居ることは私怖ろしく思ひますわ。』と彼女は繰返した。

『私はあなたを愛します。』彼は再び言つた。『私はいつ何時なんどきでも、私の生涯の全部をあ

なたに捧げます。』

彼女は何物かが彼女を刺したかのやうにふたゝびぶるつと身を慄はした、そして空の方を眺め入つた。

『何事も神様の御心の儘に。』と彼女は呟いた。

『ですがあなたは私を愛してくれますか、リーザ？ 私達は幸福に暮りませう。』

彼女は眼を伏せた。彼は穩かに彼女を自分の方に引き寄せた、そして彼女の頭は彼の肩に落ちた。彼は軽く顔を廻して彼女の蒼ざめた唇に觸れた。

\*

\*

\*

\*

\*

半時間経つてラヴレツキはふたゝび庭園の門の前に立つた。それは錠が下りてゐた、で彼は垣根を跳び越さなくてはならなかつた。彼は町へ歸つた、そして眠つてゐる街々を歩いて行つた。思ひ掛けない深い歡喜の感情が彼の心を充した。あらゆる彼の疑惑は眠つてゐた。『消え去れ、過去よ！ 暗黒なる幻よ！』と彼は考へた。『あれは私を愛してゐる。あれは私のものになるだらう。』

突然彼は、自分の頭の上の空中に、駭くべき、勝ち誇つた物の音が聞えるやうに思つ



た。彼は立ち停つた。物の音は一層壯麗に響いてきた。それは強いメロヂアスな流となつて降りて来た、そしてその中であらゆる彼の幸福が語られ、唱はれてゐるやうに彼は思はれた。彼はあたりを見廻した。物の音は一軒の小さな家の二つの窓から續々と降りてくるのであつた。

『レム！』とラヴレツキは叫んだ、そして、その小さな家に駆け寄つた。『レム、レム！』彼は聲高に繰返した。

物の音は止んだ、そして室内着を着た、胸をはだけた、そして頭髮をもちやもちやにした老人の姿が、窓に現はれた。

『あゝ』彼は嚴な調子で言つた。『あなたか！』

『クリストフェル・テオドリッチ、何といふ驚くべき音楽でせう！　どうか私を入れて下さい！』

老人は、一言も言はないで、腕を嚴かに大きく廻して、表の入口の鍵を窓から投げた。ラヴレツキは矢のやうに階段を駆け上つて、部屋に入つた、そしてレムの首に兩腕を投げかけようとした。けれどもレムは一脚の椅子を指しながら、打切ら棒に言つた。

『そこに坐つてお聴きなさい。』彼はピアノに向つて坐つた、峻しい、誇りかな様子であたりを見廻した、それから弾きはじめた。

ラヴレツキはさういふものを聞いたのは久し振であつた。最初の調べでもつて甘美な熱情的なメロヂイが彼の心を包んだ。それはインスピレーションをもつて、歡喜をもつて、そして美をもつて輝き渡つてゐた。それは當るべからざる力があつた。それは育ち行いてそして融け去つた。それは地上の親しい、祕密な、聖なるあらゆる物の感觸をもつてゐた。それは不滅なる悲哀を息づき、そして天上に消えさるべく流れ去つた。感動のために冷たくなり蒼ざめてゐたラヴレツキは、立ち上つて、身體を真直ぐにした。この音楽は、つい今し方戀の幸福のために興奮させられた彼のたましひを、ひどく引つ摺らんだのであつた。それは愛の炎をもつて燃えてゐた。

『今一度弾いて下さい。』最後の調べの音が消え去つたとき、彼は囁いた。

老人は驚のやうな眼<sup>まなざし</sup>眸を彼に向つて投げ、片手でもつて胸を叩いた、そして故國の言葉でゆつくりと言つた。『私は偉大な音楽家であるからこれを作つたのだ。』そして彼はいま一度彼の驚くべき曲を弾いた。



部屋には一本の蠟燭も燃えてゐなかつた、けれど昇つてきた月の光が斜に開け放した窓を通して落ちた。豊かな響でもつてデリケートな空気が鼓動した。小さな蒼ざめた部屋は聖所のやうに見えた、そして老人の頭は神興をもつて充たされたかのやうに銀色の薄明の中に昂然と擧げられてゐた。ラヴレツキは彼に近づいて彼を抱擁した。最初彼はラヴレツキの抱擁に答へなかつた——肱でもつて彼を突き放しさへした。長いあひだ、彼は手足さへ動かさないで、峻しく、ほとんど野蠻な顔附で一處を見詰めてゐた、そして二度「あゝ！」と唸つた。到頭その調子の變つた容貌は少し落着いてきた、そしてラヴレツキの温かな祝詞に答へて、彼は最初「こりし、そしてそれから小兒のやうに弱々しく獻敬しながら、泣き出した。

『不思議ですわい。』彼は言つた。『君が丁度今夜こゝへ來られたのは。しかし私は知つてをる——私は残らず知つてをる。』

『あなたは残らず知つて居られる？』ラヴレツキは昂奮して言つた。

『さうさ。』レムは言ひ返した。『私が残らず知つてをるといふ事が君に解らんかつた筈がありますか？』

ラヴレツキは朝まで眠ることが出来なかつた。徹宵<sup>よっげ</sup>彼は寢床の上に坐つてゐた。さうしてリーザも眠らなかつた。彼女は祈つた。

### 三十五

讀者諸君はラヴレツキがどんな風に育てられて成人したかを知つて居られる、で吾々はリーザの生立ちについて少し許り言つておかうと思ふ。

彼女は父親<sup>なつか</sup>が亡つたとき十歳であつた、しかし父親は、自分の仕事に没頭して、絶えず財産の成長のことを氣にかけてゐたので、彼女のことには殆んどかまはなかつた。彼は、機嫌がわるく、短氣で、怒りつぽかつたけれども、小兒達の教師や嫁姆や衣服やその他のものについては物吝みしなかつた。けれども彼は、彼の言ひ方で言へば、『哮<sup>う</sup>えたる小兒達の世話』は辛抱出来なかつた、そののみならず、彼にはその時間もなかつた。彼は働いた、様々の仕事に押し流された。僅かしか眠らず、偶にしか骨牌もせず、そしてまた仕事に返つた。彼は彼自身を頸木を附けられて穀打器械に縛がれた馬に譬へるの



であつた。「俺の一生は、なんて早く駈けて了つたもんだらう！」彼は臨終の床についたとき、乾いた唇の邊に苦い微笑を浮べて、さう言つた。

マリイ・ドミトリエヴナは、自分一人で小兒達を育てたやうにラヴレツキに向つて自慢したけれども、實際は、夫ほどもリーザのことをかまつてやらなかつた。彼女はリーザに人形の様ななりをさせ、客人の來てゐる時には彼女の頭を撫でて、「可愛い娘」とか「伶俐な兒」とか言つて彼女を呼んだ——そしてそれだけであつた。細々した不斷の務めは、この怠惰な貴族を退屈させた。

父親の生きてゐた間、リーザはパリから來たモロオ嬢といふ家庭教師の世話に委せられてゐた。そして父親の死後はマルタ・チモファイエヴナの世話になることになつた。

モロオ嬢といふのは、鳥のやうな動作と鳥の様な頭腦とをもつた小さな、皺の寄つた女であつた。若い時分彼女はひどく亂雑な生活を送つた。老年に近づいた頃には二つの慾情しか残つてゐなかつた——一つはデリケートなちつと許りの食物で、今一つは骨牌であつた。滿腹すると、彼女は骨牌もしなければ、お喋りもしなかつた。彼女の顔は直き屍骸に近い表情になつた。彼女は坐り、眺め、呼吸した、けれどもどんな種類の思想

も彼女の心の中を通つてゐないことは明かであつた。

彼女を深切な女と呼ぶことは不可能であつた——深切な鳥といふものは存在しない。彼女の頭に通常 *‘Jours ou c'est des betises’* (そんなことは皆な詰らない事さ) といふ言葉でもつて言ひ現はされる一般的な、お安い懷疑主義の一種を宿らせたのは、彼女が若い頃に送つた軽々しい生活のためであつたらうか、それとも、小兒の時分にパリの空氣を吸つた結果だらうか。彼女はフランス語は不正確だつたが、しかし、純粹のパリ言葉を話した。彼女は無駄話はせず、氣難かしくもなかつた。嫁婦に向つてそれ以上の何事が望めようか？ 彼女はほとんど全くリーザに影響を與へなかつた。リーザはお附女のアガフ・ヴラセヴナの確い信仰によつてもつと力強く影響されてゐた。

このお附女の生涯は特筆に値した。彼女は百姓の家に生れた、そして十六の歳にある百姓に嫁いだ、けれども彼女は同じ百姓女のなかで特に際立つてゐた。二十年のあひだ村の世話方をつとめた彼女の父親は、金を蓄へてゐてそして彼女を甘やかした。彼女は人並すぐれて美しく、界隈の誰れよりもいゝ身装をしてゐた、そして聰慧で雄辯で大膽であつた。



彼女の領主のドミトリ・ベストヴ、すなはちマリイ・ドミトリエヴナの父は、穏かな平和な人であつたが、一度殺打ち場で働いてゐる彼女を見て、彼女に話しかけた、そして、激しく彼女に戀着して了つた。彼女は間もなく寡婦になつた。そしてベストヴは、妻があつたにも拘らず、家族の一人のやうな身装みなりをさせて、家へ引き入れた。アガフアは、一度も他の暮し方をしたことが無かつたかのやうに、この新しい境遇に自分を慣らして了つた。彼女はより蒼く、より丈夫になつた。モスリンの袖の下の彼女の腕は、商人の妻の腕のやうに『粉のやうに白く』なつた。サモワールが、一日ちう卓子の上に載つてゐた。彼女は絹や天鵝絨の服ばかり着たが、そして羽蒲團の臥床に眠つた。

五年のあひだ此の光榮ある生活は續いた、けれどもドミトリ・ベストヴは亡つくなつた。彼の寡婦は、深切な女で、亡なつた人の記憶を尊敬し、自分の競争者に對してみつともない振舞をしたくなかつた、そしてアガフアが彼女の前では決して自分を忘れなかつたから、猶更であつた。さういふ譯でアガフアはある羊牧者にめあはされて、見えない處へ送られた。三年経つてから、ある暑い夏の日、未亡人は彼女の羊牧者を訪れた。アガフアは彼女に實に冷たい、美味うまいしいクリームを御馳走し、實にしとやかに立ち振舞ひ、實に身綺麗に、

快活に、そして満足してゐたので、未亡人は彼女を容赦し、もう一度家へ入ることを許すことにした。六ヶ月のうちに彼女は大層アガフアに愛着してきて、彼女を女執事の地位に昇進させ、自分の仕事を残らず彼女の管理に委ねて了つた。アガフアは再び權力ある身體になつた、そしてふたゝび彼女の生活は榮え、彼女の肌膚は白くなつた。未亡人は彼女を信用しきつてゐた。さういふ風で、五年の月日が過ぎた。不幸が二度目にアガフアの頭上に落ちた。彼女が従僕として家の中へ引き入れた彼女の夫が飲酒をはじめた。家中の物品がなくなり始めた、そして最後に彼は銀の匙を六つ盗んで、女房の手筈のなかに、必要の時までの積りで、隠しておいた。事件が明るみに持ち出された。彼はもう一度羊牧者に貶おとされた、そしてアガフアは面目を失した。彼女は、家から追ひ出されはしなかつたけれど、女執事の地位は奪はれて、お針女になつた、そして帽子の代りに頭巾を被るやうに呟附けられた。

みんなが不思議がつたほどに、アガフアは恭うや々しい謙讓の態度をもつて、この怖るべき打撃に堪へた。彼女はその時もう三十歳になつてゐた、彼女の小兒は皆な死んでゐた、そして夫もその後長くは生きなかつた。彼女にとつて眞面目に考へはじめべき時が來てゐ



た、そして彼女は彼女自身をそのありしが儘に見た。彼女はひどく無口になり、絶えず祈るやうになつた、そして決して朝禱や彌撒への出席を怠らず、立派な衣服はみんな人にくれて遣つた。かういふ風で彼女は謙遜に、平和に、嚴肅に十五年以上過した。彼女は誰とも喧嘩せず、誰に對しても遜つた。もしも誰か彼女に對して激しい口を利く人があれば、彼女は頭をさげて、自分の教師としてその人に感謝した。未亡人はずつと以前から彼女を赦して彼女から恥辱を取り去り、自分の頭から帽子を取つて彼女に與へた。けれどもアガフは自分の被つてゐる頭巾を脱がうとはせず、いつも暗い服を着てゐた。

未亡人が死んでからは、彼女は一層靜かになり、謙遜になつた。ロシア人は容易に他人を恐怖しまた愛着するけれども、彼に尊敬を強ふることは困難である。彼はそれを徐徐に、そしてたゞ僅かの人間にしか與へないのである。ところが家ぢうの總てがアガフを尊敬した。誰一人彼女の以前の罪のことを考へる者はなかつた——あだかもそれはかの老貴族と一緒に地の中へ残らず埋められて了つたかの様であつた。

カレエチンがマリイ・ドミトリエヅナの夫になつたとき、彼は家ぢうの取締りを彼女に委托しようとした。けれども彼女は、『誘惑が怖ろしいから』と言つて斷つた。彼は立腹

した、彼女は低く頭をさげてそして部屋を出た。惻巧なカレエチンは人間といふものを知つてゐた。彼はアガフを了解した、そして彼女を忘れなかつた。家族が町に来て住むやうになると、彼は、彼女の承諾を得て、彼女をリーザのお附女とした。リーザはその時五つであつた。

新しいお附女の眞面目な峻しい顔は、最初リーザを怖がらした、けれど間もなく彼女はアガフに慣れて、彼女を深く愛した。リーザ自身も眞面目な小兒であつた。彼女の顔立はカレエチンの鋭い、規則立つた顔立を思ひ出させた、けれども眼だけは父親の様ではなかつた——それは深切氣と小兒には珍らしい落ち着いた注意力とをもつて輝いてゐた。彼女は人形をもつて遊ぼうとはしなかつた。彼女は始終身のこなしに氣を附け、高聲にも長くも笑ふことがなかつた。彼女は滅多に考へ込むやうなことはなかつたが、稀にさういふことがあれば、それは大抵いつも積極的な譯があるのであつた。暫く黙つてゐたかと思ふと、彼女は誰か年上の人の方を向いて、何か質問を發してその沈黙を破るのであつた。つまり黙つてゐた間に彼女の心は何か新しい印象の下にはたらい、てゐたのである。彼女が片言を言はなくなつたのは随分早く、四つの時にはもう明瞭な口を利いた。



彼女は父親を怖がつた、そして母親に對する彼女の感情は不定であつた。彼女は母親を怖れはしなかつたが、さりとて彼女から愛撫を求めようとしなかつた。たゞし彼女はアガファからさへ愛撫は求めなかつた、アガファが彼女の愛した唯一の人であつたけれども。アガファは決して彼女が自分の眼の届かないところに行くことを許さなかつた。そして彼等と一緒に居るのは、それは奇妙な光景であつた。かういふ事がよくあつた。アガファが黒づくめの服装で、暗い頭巾を頭に巻いて、瘠せた、蠟のやうな、しかし矢張り綺麗な、表情の強い顔をして、軀を真直ぐにして靴下を編んでゐる。すると、彼女の足の小さな椅子にリーザは坐つて、これもやはり何か仕事をするか、でなければ眼を輝かして、アガファが話してゐる事柄に眞面目に聴き入つてゐるのである。さうしてお附女が話してゐるのは普通の小咄ではなかつた。調子のいゝ、穩かな聲で、彼女は貴き處女の一生について、隱者や聖者や聖なる殉道者やの生涯について話してゐたのである。彼女はリーザに向つてどんなに信心深い人達が荒野に逃れて住み、饑餓や缺乏と戦つたか、そして王を恐れずに基督に對する信仰を告白したか、どんなに天の鳥共が彼等に食物を持つて來、野獸共が彼等の吩咐けに従つたか、また彼等の血の流されたところにどんな

に美しい花が咲き出でたか、さういふ事を話した。——『あらせいとう、が咲いたの？』と大層花が好きだつたりリーザは訊ねたことがあつた。……アガファはリーザを相手に眞面目に謙遜に話した。あだかも彼女自身が、さういふ高い、聖なる言葉を話してゐるのは彼女自身ではないやうに感じてゐるかのやうであつた。リーザは彼女の話に耳を澄ました——そして全知にして在らざる處なき上帝の御姿が、一種の抗すべからざる穩かさをもつて彼女のたましひのうちに入り込み、それを健全な、敬虔な恐怖をもつて充した、そして基督は彼女にとつて親しい知人の一種に、ほとんど親戚の一人になつた。そして彼女に祈禱を教へたのも彼女であつた。時として彼女はリーザを朝早く、夜明け頃に揺り起して、急いで彼女に着物を着せて、こつそり朝禱に連れて行くことがあつた。リーザは爪先立ちで、ほとんど息もせず彼女について行つた。朝の冷たさや薄明り、教會の新鮮さや空虚さ、かうして思ひ掛けなく家を抜け出るといふ祕密そのもの、注意深く家へ歸つて、臥床へ潜り込むこと、かうした禁斷されたること、不思議なること、聖なることの混合が少女の心を昂奮させ、彼女の存在の基礎にまで透み通つた。アガファは決して他人を裁かなかつた、またリーザを輕はずみの故に叱ることもなかつた。不満を感ずる



やうなことがあると、彼女は黙つてゐた、その上何もしなかつた。そしてリーザはこの沈黙を了解した。そして小兒の眼敏さをもつて彼女はまた、アガファが、マリイ・ドミトリエヴナであれカレエチン自身であれ、他の人達に對して不満を感じてゐる時も、よくそれを了解した。

三年と少しのあひだ、アガファはリーザの世話を見てゐた。それからモロオ嬢が彼女の代りになつた、けれども様子に生氣のない、『そんなことは皆馬鹿げた事です』といふのを口癖にしてゐる輕佻なフランス婦人は、リーザの心から彼女の愛するお附女を追ひ拂ふことは出来なかつた。播かれた種子はあまりに深く根を張つて了つた、そしてアガファはリーザの世話をすることは罷めたけれども、やはり家に留つてゐて、屢々彼女のお弟子に會うた、そして、お弟子は以前と同じやうに彼女に信頼した。

不思議なことには、アガファは、マルタ・チモファイエヴナがカレエチン夫人の家に來て住むやうになつたとき、長く彼女と一緒に居られなかつた。以前の『お妾』のかうした嚴格な眞面目さは、短氣な、意志の強い老婦人の氣に入らなかつた。アガファは巡禮に出る許可を得た、そして二度と歸つて來なかつた。彼女が非國教徒の組合に入つてしまつた

といふ暗い噂が流布された、けれども彼女がリーザの心の上に残した印象は決して消されなかつた。彼女は以前と變らず、お祭りにでも行くやうに彌撒に行き、悦びをもつて、一種の羞ははかんだ、抑制した法悦の氣持でもつて祈禱した。これにはマリイ・ドミトリエヴナも祕かに、少なからず驚いた。そしてマルタ・チモファイエヴナさへも、決してリーザを當惑させる様なことはしなかつたとはいへ、努めて彼女の熱心さを緩和しようとした、そして必要もないのに地面に頭をつけることは彼女に許さなかつた——かういふ習慣は『貴族的でなかつた』。

リーザはよく、といふのは辛抱強く、學んだ。上帝は彼女に偉いなる聰明さとか特に華やかな才能とかは與へてなかつた。努力なしには彼女は何事にも成功しなかつた。彼女は好くピアノを弾いた、けれどもレムだけが彼女がその爲にどれほどの苦勞を忍んだかを知つてゐた。彼女は多く讀まなかつた、彼女は『彼女自身の言葉』を持たなかつた、しかし彼女は彼女自身の思想を持つてゐた、そして彼女自身の道を行いた。彼女は理由なしには父親の眞似はしなかつた。彼もまた他人にどういふ風にしろといふ事は言はない人であつた。かやうにして彼女は、平和にそして急がずに、成長した。かやうにして



彼女は彼女の十九といふ歳に達した。彼女は、自分では知らずに、非常にチャーミングであつた。彼女の動作にはことごとく無意識な、すこし堅苦しい高雅な趣があつた、彼女の聲は擾されざる青春の銀色の調子をもつてゐた。極めて微かな歡びの感情も、彼女の唇に魅力ある微笑を齎し、彼女のぱつと明るくなつた眼に、深い、穩かな輝きと祕かな愛撫の表情のやうなものを附け足した。義務の感情でもつて、誰であらうと他人の感情を害ふことをひどく恐れる深切なやさしい心でもつて、いつばいになつてゐるので、彼女は特に誰れを愛するといふ事はなく、みんなを愛した。上帝のみを彼女は法悦の氣持で、おぼおぼと、やさしく愛した。ラヴレツキが彼女の平和な内面生活に押し入つた最初の人であつた。かういふのがリーザであつた。

## 三十六

翌る日、十二時にラヴレツキはカレエチナ夫人の家をさして出掛けた。途中で彼はパンシンに遭つた。パンシンは馬上で帽子を肩の上まで引き下して、彼の傍を駆け去つた。

カレエチナ夫人の家で、ラヴレツキはその家の人達と知合になつて以來はじめて、入ることを斷られた。召使ひの男が彼にマリイ・ドミトリエヴナがお臥やみになつてゐることを言つた。『奥様は頭痛がなさるので』あつた。マルタ・チモファイエヴナとエリザベス・ミカエロヴナとは家に居なかつた。ラヴレツキはリーザに會ひはせぬかと思ひ亂れた希望を抱いて庭園の傍を歩いてみたが、誰れも見えなかつた。彼は二時間後にもう一度カレエチナ家へ歸つてみたが、同じ答へを得た、そして召使ひの男は何だか横眼をつかつて彼を見た。ラヴレツキは同じ日のうちに三度も訪問するのは面白くないと考へたので、彼はヴァシリエヴスキへ行かうと決心した、そこに彼は仕事があつたのである。途中彼は様々な計畫を立てた、そして段々と素晴らしい考へが出て來た、ところが彼の叔母の村で悲哀が彼の上に落ちた。彼はアントンを相手に話しはじめた。老人の心は、わざとそ積りであつたかのやうに、悲しい想ひに充ちてゐた。彼はラヴレツキに、グラフェラ・ペトロヴナが臨終の直ぐ間際に吾れと吾が手を咬んだ様子を話した、そして彼は暫く黙つてゐた後で、溜息と一緒に、『旦那様、人間といふものは誰れでも自分を喰ふやうに出來てるんですなあ！』



ラヴレツキが歸途についたのはもう大分おそかつた。前夜の記憶が彼を有頂天にしてゐた、リーザの穩かな、はつきりした姿が、完全に彼の心の中に浮び上つた、そして彼女は彼女が自分を愛してゐるといふ考へによつて深く動かされた。さういふ工合で、平和な幸福な氣持で、彼は町の自分の小さな宿に乗りつけた。彼が玄關に入つたとき最初に彼を驚かしたものは、彼にとつてもつとも厭な香であるパクーリの香であつた。また幾つかの丈の高いトランクや箱類がそこに立つてゐた。急いで彼を出迎へた侍僕の表情が彼には變に思はれた。けれど自分の得た印象について何の説明も自分自身に與へないで、彼は客間の闕を横切つた。……裾褶のついた黒絹の衣服を着て、パチスト麻の手巾を蒼白い顔に當てた婦人が、彼を迎へる爲に長椅子から立ち上つて、二三步進んで來た、そして念入りに結びあげて香水を振りかけた頭を下げて、彼の足元に倒れた。やつとこの時になつて彼は彼女を認めた。この婦人は彼の妻であつた。

何物かが彼の呼吸をぐいつと止めた——彼は壁に寄りかゝつた。

『テオドオル、私を追ひ拂はないで下さい。』と彼女はフランス語で言つた、そして彼女の聲は彼の心臓に小刀のやうに切り込んだ。彼は無意識に彼女を眺めた、けれど直ぐと

器械的に、彼女が以前よりも蒼くそして丈夫さうになつてゐるのに氣が附いた。

『テオドオル、』彼女は時々チラと上の方を見乍ら、そして薔薇色の、よく磨いた爪を持つてゐる目立つ程に美しい指を注意深く揺り乍ら續けた。——『テオドオル、私はあなたの前に罪人でございます、重い罪を犯したものでございます——いえ、それ許りでなく、私は法律上の罪人です、けれどもどうか私の申す事を一通りお聞き下さいませ。私は悔恨の爲に悩んでをります。私は私自身にとつて重荷になつてをります、そして私はもう私の現在の境遇を堪へる事が出来ません。幾度か私はあなたに手紙を差しあげようと思ひました、けれども私はあなたのお怒りを怖れました。私は過去との凡ゆる繫縛を斷ちきらうと決心しました。それから私は大病に罹りました。『*l'ai été si malade*』彼女は片手で額と頬とを撫で乍ら言ひ足した。『私は私が死んだといふ噂を利用しました、さういふ噂が擴まつて居りましたのです、私は一切を棄てました、そして何處にも寄りませんで、日に夜をついで此處へ急ぎました。私は私の裁判官でゐらつしやるあなたの前に現はれるまでに長い間躊躇致しました。けれども到頭私は、あなたのいつも良い方でゐらした事を思ひ出して、決心致しました擧句、モスクワに行つてあなたのおを發見致し



ました。私の申す事を信じて下さいまし。」彼女は床から音も立てず立ち上つて、椅子の端に僅かに腰を下し乍ら、續けた。「私は幾度も死ぬ事を臆想致しました、そして私は私のうちに自分の生命を取るだけの勇氣は十分にある事を發見致しました。——あゝ！生きて居ることはいま私にとりまして本當に堪へ難いことでございます。——ですけれど私の娘のことを、私の小さいアダのことを考へましたとき、私はどうすることも出来ませんでした。娘はこゝに居ります——あの不幸な娘は次の部屋に眠つて居ります！あの娘は疲れましたのです——あなたは今にあの娘を御覽になるのでございませう。あの娘は少くともあなたの前に罪はございません。ですけれど私は本當に、本當に不幸でございませう。」ラヴレツキ夫人はかう叫んで、そしてわつと泣きくづれた。

ラヴレツキは漸く吾れに復つた、壁から離れて立つた、そして入口の方に振り向いた。「あなたは行つてお了ひになるのでございますか！」と彼の妻は、胸を裂くやうな聲で言つた。「あなた、それは餘りに惨いなされ方でございます、一言も、たゞ一言非難の言葉さへもかけて下さらずに行つてお了ひになりますのは……あなたのこのお侮蔑は私を打ち碎いて了ひます、本當に怖ろしい……」

ラヴレツキは立留つた。「お前は、私から何を聞かうと言ふのか？」彼は無意味な聲で言つた。

「何も、何も望みは致しません。」彼女は急いで答へた。「私は何事を要求する権利も持つては居りません。私を信じて下さいませ、私は理性のない女ではございません。私はあなたから赦して頂かうとは思ひません、それをするだけの勇氣は私にはございません。私はたゞあらん限りの勇氣を奮ひ起して、何をしろ何處に住めといふお吩咐をあなたから聞かして頂く事をお願いするばかりでございます。私は一個の奴隸に過ぎません。私はあなたのお吩咐通りに致しませう、假令それがどういふお吩咐でございませうとも。」

「私はお前にさういふ事を吩咐けるやうな立場には居ない。」とラヴレツキは同じ聲で答へた。「お前は知つてをる筈だ——お前と私との間では一切が終つたのだ……殊に今となつては。お前はお前の好きな處に住んでよろしい。仕送りの金が少なければ——」

「あなた、どうかさういふ怖ろしい事を仰しやらないで下さいまし。」とバルバラ・パウロヴナは口を挟んだ。「私を可哀さうだと思つて下さいまし、私は……よしんばあの娘のたゞばかりと致しましても。」そしてバルバラ・パウロヴナは遽だしく隣室に駆け込んで、



直ぐに極めて洒落た身装みなりをさせた小さな娘を抱いて歸つて來た。大きな美しい捲髪が彼女の可愛い暗い顔や、眠さうな大きな黒い眼の上に落ちかゝつてゐた。彼女は明りのかでにつこりしてそして顔を擧めた、そして母親の頸に小さな凹みのある手を突いて軀を支へてゐた。

『アダ、御覽なさい！ お前のお父様だよ。』バルバラ・パウロヴナはかう言ひながら、少女の眼から捲髪を拂ひ退けて、音高く彼女に接吻した。『私と一緒にお父様にお願ひしておくれ。』

『お父様なの？』小さな兒は片言で呟いた。

『あゝ、お父様だよ、お前。お前はお父様を愛してゐるね——さうぢやないかい？』

ラヴレツキは、もう堪らなくなつてゐた。『そりやあ一體何といふメロドラマのなかの場シーン景なのだ？』と彼は呟いた、そして部屋を出た。

バルバラ・パウロヴナは二三分間同じ處に立つてゐた、軽く肩を揺つた、少女を別室に連れて行つた、そして着物を脱がせて臥床ふしどに臥かした。それから彼女は一冊の讀物を取出して、ラムプの傍に座を占め、一時間ばかり待つてゐた、それから自分も臥床に入つ

た。

『都合よく行きました、奥様？』彼女がコルセットを解いたとき、彼女がパリから連れて來たフランス女の侍女が、言つた。

『あの人は、』彼女は答へた。『大層老けたけれど、やつぱり昔の通り良い人らしいよ、ジュスチーヌ。夜間ナイトグロウ手套をとつておくれ。それからあしたはあの灰色づくめの衣裳を用意しておくれ。さう、それから忘れないでアダに羊のカツレッツを注文してやつておくれ。この邊では六ヶ敷いかも知れないけれど、とに角注文してみて……』

『*Et la guerre comme à la guerre.* (戦争には戦争の用意)』とジュスチーヌは答へた、そして蠟燭を消した。

### 三十七

ラヴレツキは二時間以上も街々を彷徨うろつき廻つた。パリの郊外で過した夜が彼の心に歸つて來た。心臓は苦しく鼓動した、そして彼の空虚な、あだかも麻痺したやうな頭のな



かには、いつも同じ暗い、腹立たしい、邪悪な思想が渦巻いた。「あれは生きてゐる……あれは此處に居る！」と彼は、絶えず生き返ってくる驚愕をもつて囁いた。彼は自分がリーザを失つて了つたことを感じた。苦い想ひが彼の咽喉を詰らせた。この打撃はあまりに突然に彼を襲うた。どうして彼は、馬鹿げた、無責任な新聞の噂話などをあんなに容易く信じる事が出来たのであらう？ 『だが俺があゝの新聞を信じなかつたとすれば』と彼は考へた。「どれだけ物事が違つて來たらう？ 俺はリーザが俺を愛してゐることを知らないで終つたらう——あれ自身もそれを知らなかつたらう。」彼は妻の幻像を、彼女の聲を、彼女の眼眸を、自分の心から追ひ拂ふことが出来なかつた……そして彼は彼自身を呪つた、地上のあらゆる物を呪つた。

疲れ果てた擧句、彼は曉方ごろレムの家に來た。長いあひだ誰も彼の聲を聞きつける者はなかつた。到頭夜帽を被つた老人の頭が窓から酸つばい顰め面で現はれた。それはもう二十四時間前に、貴族的な光輝の高みから、皇帝の様にラヴレツキを眺め下したところのあの神々しい峻嚴な頭とは、似ても似つかぬものであつた。

『何の用ですか？』レムは訊ねた。「私は毎夜、君のために弾いて聞かせる譯には行きま

せん。私は煎薬を飲んで寝たのです……』けれどもラヴレツキの顔附はひどく異常に見えたのに相違ない、老人は兩手を眼の上に翳して、夜の訪問者を眺めた、そして入ることを許した。

ラヴレツキは部屋に入つて椅子にドツカと腰を下した。老人は彼の明るい、着古した室内着にくるまつて唇を結んで突き出しながら、彼の前に立停つた。

『妻が來ました。』とラヴレツキは言つた、そして彼は頭をあげて、唐突に無意識な笑聲を立てた。

レムの顔は愕きの表情を表はした、しかし彼は微笑まずに、たゞ彼の室内着のうちに一層しつかり身體を引き締めた。

『あなたは御存知なかつたですね。』とラヴレツキは續けた。「私は想像しました……私は新聞で私の妻がもうこの世に居ないことを讀みました。』

『ほお、あなたは近頃それを讀まれたですね？』レムは訊ねた。

『近頃です。』

『ほお。』老人は繰返して、眉を高く上げた。「で、奥さんが來られたですね？」



『あれはやつて来ました。あれは今私の家に居ります、そして私は……私は不幸な人間です。』

さうしてふたゝび彼は笑つた。

『クリストフェル・テオドリッチ、あなたに手紙を一つ届けて頂けませうか？』

『ふむ、一體誰にでせうかね？』

『エリザ——』

『あゝ、よろしい、よろしい。解りました——承知しました。で、何時その手紙を渡さなければなりませんか？』

『明日出来るだけ早く。』

『ふむ、料理番のカテリナを遣つてはいけませんか？ いや、私が自分で行きませう。』

『で返事を貰つて来て頂けませうか？』

『返事を貰つて來ませう。』

レムは溜息を吐いた。

『さうです、私のお若い友人、君は確かに不幸な青年です。』

ラヴレツキはリーザに二三行書いた。彼は彼女に自分の妻が來たことを話した、そして一度時刻をきめて會つてくれるように頼んだ、それから壁の方に顔を向けて、狭い長椅子の上に身を投げた。老人は寢床に横になつて、長いあひだ咳をしたり煎薬を啜つたりして轉々反側してゐた。

朝が來た。兩人とも立ち上つた。訊ねるやうな眼附で、彼等はお互ひにちつと視合つた。ラヴレツキはその時自殺したい氣がした。

料理人のカテリナが彼等のところにまづい珈琲を持つて來た。八時が鳴つた。レムは自分は十時にレナ・カレエチナに課業を授けに行く筈だが、何とか口實を見つけて今朝は早く行くことにしようと言ひながら、帽子を被つて出て行つた。

ラヴレツキはふたゝび小さな長椅子に身を投げた、そしてふたゝび心のどん底までも苦痛な笑ひを以てかき擾されはじめた。彼はいかに自分の妻が自分から追ひ出したかを考へてゐた、それから彼はリーザの位置を自分に向つて描いてみせ、眼を閉ぢて兩手を頭の背後に組み合せた。

到頭レムが歸つて來た、そして彼のために折り疊んだ紙片を齎した。それには鉛筆で



もつて次の言葉が書き付けてあつた。

『私共は今日はお會ひする譯には参りません。明日の晩ならばお會ひできるかも知れませんが。——さやうなら。』

ラヴレツキはレムに手短かに、氣の無い禮を言つた、そして自分の家へ歸つて行つた。彼の妻は朝飯を喫めてゐた。捲毛を房々させ、青いリボンのついた白のフロックを着たアダは、羊肉のカツレツを食べてゐた。

バルバラ・パウロヴナは、ラヴレツキが部屋に入るやいなや、直ぐ様立ち上つた、そして遜つた表情をしながら、彼に近づいた。彼は自分と一緒に圖書室へ来てくれるようにと彼女に言つた、彼女が入ると扉を閉めきつて、あちこち歩きはじめた。彼女は慎ましやかに両手を重ねて坐つた、そして眼でもつて彼の後を追うた。彼女の眼は下瞼に微かな皺がありはしたけれども、依然として美しかつた。

長いあひだラヴレツキは口を利きはじめることが出来なかつた。彼は自分を抑へることが出来さうもない氣がした。彼ははつきりバルバラ・パウロヴナは自分を怖れてゐないことを見た、しかも彼女は今にも卒倒でもしさうな様子をしてゐた。

『お聴きなさい。』彼は苦しげな呼吸をしてそして時々齒をぐつと噛みしめながら、判頭言ひ出した。『私達はお互ひに、面をかぶり合ふ理由はない。お前が悔悛したといふことは私は信じない。そしてたとへそれが眞實であつたとしても、今一度手を携へて最初から出發する、お前と一緒に暮す、といふことは私には出来ない。』

バルバラ・パウロヴナは唇をつまへて顔を擧げた。『この人は私を嫌つてゐるのだ。』と彼女は考へた。『確かにこの人にとつては私は女でさへもないのだ。』

『私には出来ない。』ラヴレツキは繰返した、そして上着の釦を襟元までかけた。私はお前がどうして此處まで來たのだから知らない。おそらくお前はもう金が無くなつたのだらう。』

『まあ、あなたは私を侮辱なさいますの。』バルバラ・パウロヴナは囁くやうに言つた。

『それは兎に角として、お前は矢張り、遺憾ながら、私の妻だ。私はお前を追ひ拂ふわけにはゆかない……で私がお前に申し出すことはこれだ。お前は、もしもさうしようと思へば、今日ラヴレックに向つて出立して、あすこで暮してもよい。あすこには、お前の知つてる通り、いい家がある。お前はあらゆる必需品や年金を受けることが出来る。』



お前は承諾するかね？」

バルバラ・パウロヴナは刺繍した手巾を顔に擧げた。

『昨晚も申しあげました通り』と彼女は神経的に唇を擧げながら言つた。『私はあなたがなさらうとお考への事には、何事にも同意致します。これを決定致すにつきましては、私はたゞあなたに、「私は少くともあなたの寛大ななされ方を感謝致して宜敷うございませうか？」とお訊ねするばかりでございます。』

『感謝なぞいふことはよして、私からお前に頼む。さうしてくれた方がいゝのだ。』とラヴレツキは急いで答へた。そして戸口に近寄りながら彼は言ひ足した。『さうすれば、私は今後……』

『明日私はラヴレックに参ります。』と、バルバラ・パウロヴナは恭々しく椅子から立ち上りながら言つた。『ですけどテオドオル・イヴァニッチ——』

『何の用だね？』

『私は私はまだ何もあなたのお赦しに値するやうなことをして居らない事を知つて居ります。私は少くともそのうち——』

『バルバラ・パウロヴナ、あなたは伶俐な人だ、そして私とても馬鹿ではない。私は私がお前を赦す赦さないといふ事はほとんどお前を煩はすに足りないことを知つて居る。私はとつくからお前を赦してゐる。だが私達のあひだにはいつも深い淵があつた。』

『私もそのうちにどうすれば宜敷いか解るでございます。』と彼女は答へて、頭を下げた。『私は私自身の罪を忘れては居りません——私はたとへあなたが私が亡つたといふ報知を見てお喜びになつたことを聞かされました所で、決して驚きは致しません。』と存じます。』彼女は遜つた調子で言ひ足して、卓子に載つてゐる新聞を軽く指した。ラヴレツキはそこにそれを忘れておいたのである。テオドル・イヴァニッチは身慄ひした。あの報知のところには鉛筆で印がついてゐるのである。バルバラ・パウロヴナは、やはり非常な謙遜な様子で彼を見成つてゐた、そして彼女はその時實に美しく見えた。灰色のパリ風の服装は彼女のほつそりした、ほとんど娘のやうな姿に申分なく似合つてゐた。白いカラアのなかの細いデリケートな頸、規則正しく揺れてゐる胸、指環も腕環も嵌めてゐない手——彼女の身體の全體は、強い光澤のある髪からほとんど眼に見えない靴の先にいたるまで、實に優雅な様子であつた。ラヴレツキは野蠻な眼眸を彼女に投げた、あはや『ブ



ラヴオ』と叫んで、拳を固めて彼女を殴りつける所であつた——そして部屋を出た。

一時間後には、彼はもうヴァシリエヴスキに向つて出立してゐた。さうして二時間後には、バルバラ・パウロヴナが町ぢうで一番善い馬車を借りさせ、黒いヴェールの着いた質素な麥稈帽をかぶり、單純な外套を着て、アダをジュスチーナに預けておいて、カレエチナ夫人を訪問に出掛けた。召使共に色々訊ねた結果、彼女は夫が毎日カレエチナ夫人の家を訊ねたことを知つたのである。

### 三十八

ラヴレツキの妻が〇町に着いた日はラヴレツキにとつて悦びの消えた日であつた、そしてそれはまたリーザにとつて苦痛に充ちた日であつた。彼女がまだ階下に降りて母親に朝の挨拶をしない先に、もう窓下に馬の蹄の音が鳴り響いた、そして祕やかな恐怖をもつて彼女はパンシンが前庭に馬を騎り入れるのを見た。『あの人は、こんなに早くから最後の答へを求めに來たのだ。』と彼女は考へた——そして彼女の推察は間違つてゐなかつ

た。應接間を歩き廻つたあとで、彼は自分と一緒に庭園に來るようにならなかつた。そしてそこで彼は彼の運命の決定を求めた。リーザは氣を取り直した、そして彼の妻になれないことを言つた。彼は彼女の傍に立つて、帽を額までぐつと引き下して、最後まで彼女の言ふことを聽いてゐた。丁寧に、けれど聲を變へて、彼は彼女にそれが彼女の最後の言葉であるかどうか、また自分は何か彼女の感情にさうした變化を齎すやうな原因を與へたかどうか訊ねた、それから片手で眼を抑へて、短い苦しい溜息をついた、そして顔から手を落した。

『私はあり來りの遣り方をしたくなかつたのです。』と彼は、暗い調子で言つた。『私は私の心の傾向に従つて一人の友人を見つけないと思つたのです、しかしそれはよくなくなつた様です。それでは永のお別れだ、美しい夢よ。』彼はリーザに向つて深く頭を下げた、そして家のなかへ歸つた。

リーザは、彼が直ぐに歸つてくれ、ばよいがと望んだ、けれども彼はマリイ・ドミトリエヴナの私室に行つた、そして一時間ばかりそこに居た。

歸り際に彼はリーザに言つた。『お母さんがあなたを呼んで居られますよ。それでは永



久にお別れです！』それから馬に跨つて、門を出ると直ぐ出来るだけの速力で駆け去つた。

リーザは母親の部屋に入つた、そして彼女が泣いてゐるのを見た。パンシンは彼女に自分の不幸を訴へたのである。

『どういふ譯でお前さんは私を殺しておくれだえ？ 何處からそんな考へが起きたのだえ？』かう苦しめる未亡人は愚痴をこぼし始めた。『どういふ人を、お前さんは欲しいのだえ？ お前さんの夫としてあの人の何處が氣に入らないのだえ？ 立派な侍従さんを何とも思はないなんて！ あの方はペテルブルグで誰でも好きな宮女と結婚することが出来るのだよ、で、私は——私は望みをかけてゐました！ 一體お前さんはあの人に對して以前からそんな風だつたのかえ？ この暗い雲は何處から出て來たのかえ？ それは自然に出て來たのぢやないね。あの馬鹿が原因もとなのかえ？ あの男をお前さんは相談相手にしたんだね。』

『お前、私の娘や、』マリイ・ドミトリエヴナは續けた。『あの方はあれ程悲んでゐらつしやりながら、まあどんなに禮儀正しく、きちんとして居られたらう？ あの方は私を見

棄てないと約束して下すつたよ、けれど私はこんな目に遭つてはとても生きては居られません。あゝ、頭が！ 私は死ぬほど苦しい！ パラシヤを私の處へ寄越しておくれ。お前さんが考へを變へておくれでないと、私は本當に死んで了ふよ。解りましたか？』そして二度もリーザのことを恩知らずと罵つてから、マリイ・ドミトリエヴナは彼女を追ひ遣つた。

リーザは自分の部屋に歸つた、ところが彼女がパンシンとのまた母親との會見から自分を恢復することが出来ないうちに、またもや一つの嵐が、しかも彼女が毫も豫期しなかつた方面から、彼女を襲つて來た。マルタ・チモファイエヴナが部屋に入つて來て、直ぐ様ボタンと音を立て、扉を閉めた。老婦人の顔は蒼ざめてゐた、彼女の帽子はまがつてゐた、彼女の眼は濕んで光つてゐた、彼女の手と脰とは慄へてゐた。

『お立派な事だよ、お嬢さん！』マルタ・チモファイエヴナは慄へ勝た、亂れた低聲で言ひはじめた。『お立派なお嬢さんだよ！ 誰から全體かういふ事を教はつたのかえ、お前さんは？……水を少しおくんさい。私は口が利けません……』

『氣を落ち着けて頂戴、叔母さん。どうなさいましたの？』リーザは彼女に水のコップを



差し出しながら言つた。『あなたもゴスポチン・パンシンに好意を持つてゐらつしやらかなつたやうでしたのに。』

マルタ・チモファイエヴナはコップを置いた。

『私は飲みませんわい——折角残つてゐる齒まで缺けて了ひさうだ。これがパンシンに何の關係がありますか？ パンシンがどうしたのですかい？ お前さんはね、それよりか、夜夜中に庭で男に會ふやうなことを誰から教はつたか言ふ方がよろしいだらうよ。話して御覽なさい、お前さん！』

リーザは蒼ざめた。

『で、お前さんは言ひ譯なんぞしない方がよからうよ。』マルタ・チモファイエヴナは續けた。『シュロチュカが自分ですつかり見て、私に話しましたよ。あの兒は嘘は吐きません、そして私は誰にも喋らないように言つておきました。』

『私は言ひ譯はいたしませんわ、叔母さん。』とリーザは、ほとんど聞えないくらゐに呟いた。

『ほ、お、そんならさうなんだね、お前さん？ お前さんはあの男と手筈をきめて逢曳

きをしたんだね、あの男は穩となし癖せきに女つ食ひなんだね。』

『いゝえ、さうではありません。』

『どうしてだね？』

『私書物を取りに客間へ降りて行きますと、あの方が庭に居られました——そして私にお呼びかけになりました。』

『で、お前さんは行きなすつた？ お立派なことだよ！ で、お前さんはあの男を愛してゐなさるんだね？ さうなのかえ？』

『私あの方を愛して居ります。』とリーザは穩かな聲で答へた。

『おやまあ、お前さん！ お前さんはあの男を愛してゐる！』マルタ・チモファイエヴナは頭から帽を裂きとつた。『お前さんは細君のある男を愛してゐなさるんだね！ さうなんだね？』

『あの方は私に——』リーザははじめた。

『あんな禿鷹がお前さんに何を言ひましたえ？』

『あの方はあの方の奥さんおくさながお亡なくりになつたと言はれました。』



マルタ・チモファイエヴナは十字を切つた。

二七八

『天國が彼女の爲にありますがように！』彼女は低聲で言つた。『馬鹿な、空つぽな女さ——あれのことを私に話させておくれでない。……さうなのかい？ で、あれは寡夫になつたのだね、で両手が自由になつたので早速始めた譯なんだね。あれは一人細君を殺して、今度は二番目のを殺さうとしてゐるんだね。無口な男といふものはねえ！ だがね、お前さんに言つておくがね、私の若かつた時分には、さうした輕はずみからひどい目に遭つた娘が澤山あつたものだよ。私に對して腹を立てゝはいけないよ。眞理に對して腹を立てるのは馬鹿のほかに居りません。私は今日あれが來たらば留守だと言ふように呟付けておきました。私はあれを愛して居ります、しかしこの事については私は決してあれを赦しはしません。いま／＼しい男やもめの奴だよ！ どうか私に少し水をおくんなさい……お前さんがパンシんに眩鐵砲を食はせたのは、本當にえらい娘だと私は思ひます。だがね、夜中牡山羊達と一緒に坐るのは止めなくてはいけない。そしてこのお婆さんに心配をかけないようにしておくれ、でないとは私は可愛がつてばかりは居ませんからね——私でも囓むことが出来るのだよ……あの男やもめの奴！』

マルタ・チモファイエヴナは部屋を出て行つた、そしてリーザは隅つこに坐つて泣いた。苦い様々の想ひが、彼女の心に湧き上つた。彼女はさうした屈辱を受けるに値しなかつた。戀は彼女には明るい快活さをもつては現はれなかつた。昨夜から二度彼女はもう泣くのであつた。新しい、思ひ掛けない感情が彼女の心の中にやつと存在を始めたばかりであつた、しかも、もうどんな高價な値を彼女はそれに對して拂つたことであらう、どんなにがさつな縁もゆかりも無い手が彼女の神聖な祕密を探つたことであらう。苦く、痛々しく、恥しく彼女はそれを感じた。けれども彼女のなかには疑ひも怖れもなかつた、そしてラヴレツキは一層彼女にとつて親愛なものとなつてゐた。

彼女は彼女自身を了解するまでは躊躇した、けれどもあの出會ひの後では、あの接吻のあとでは、彼女はもはや躊躇することが出来なかつた、彼女は自分が愛してゐることを、そして軽い氣持ではなく、眞摯に愛してゐることを知つた。彼女は自分が一生涯自分を或る者に結び附けたことを知つた。そして彼女は何の威嚇をも恐れなかつた、彼女は、暴力は決してこの繫縛を斷ちきり得ないことを感じた。



マリイ・ドミトリエヴナは、バルバラ・パウロヴナが來た事を知らされた時、非常に愕いた。彼女はバルバラ・パウロヴナを迎へ入れようかと迷つた。彼女はテオドル・イヴァニッチを立腹させることを怖れた。到頭好奇心が彼女を壓倒した。「いけない譯があるか？」と彼女は考へ直した。「あの女だつてやはり親戚ぢやないか？」そして、肱掛椅子に座をしめながら、侍僕に『よろしい。』と言つた。

二三分経つた、扉が開かれた、そしてバルバラ・パウロヴナが足早やに、ほとんど足音も聞えないくらゐに、マリイ・ドミトリエヴナの傍に近づいて、彼女が椅子から立ち上るひまもあらせず、ほとんど彼女の膝の邊までも頭をさげた。

『有難うございます、あなた様、』彼女は低い、昂奮した聲でロシア語で言ひ始めた。『有難うございます。あなた様が甘んじてこんな容易く私に會つて下さらうとは私にとつて思ひも寄りませんこととございました。あなた様は深切な方でゐらつしやいます——まるで天使のやうな方でゐらつしやいます。』

かういふ事を言ひながら、思ひ掛けなくもバルバラ・パウロヴナはマリイ・ドミトリエヴナの片方の手を取つて、自分の青味がかつたライラック色の手套の間に軽く挟んだ、そしていとも謙遜な様子でそれをむつくりした薔薇色の唇にもちあげた。マリイ・ドミトリエヴナはさうした美しい、チャーミングな服装をした婦人が殆んど自分の足下に跪いてゐるのを見て、まつたく吾を忘れて了つた。彼女はどういふ風に振舞つてよいか解らなかつた、彼女は手を引つ込ませて、彼女に腰を掛けて貰つて、何かやさしい事を言ひたいと思つた。で到頭彼女は立ち上つて、バルバラ・パウロヴナの滑つこい、香ひのする顔に接吻した。その接吻の下では、バルバラ・パウロヴナでさへも一刹那氣が遠くなるやうに感じた。

『御機嫌は如何？ Bon jour! (今日)』マリイ・ドミトリエヴナは言つた。『本當に思ひ掛けませんことと——でも、私本當にあなたにお目にかゝれて嬉しうございますわ。お解りでございますせう、あなた——夫と妻との間を裁くなどといふことは私の仕事ではございません……』

『良人が正當でございました。』バルバラ・パウロヴナが口を挟んだ。『私だけが悪いので』



「ございます。」

『大層殊勝なお心掛でございますわね。』マリイ・ドミトリエヴナは答へた——『本當にねえ。あなたあの人にお會ひになりました？ ええ、どうかお掛けなすつて。』

『私は昨日到着致しましたの。』バルバラ・パウロヴナは遜つた態で腰を下しながら、答へた。『私はテオドル・イヴァニッチに會つて、話を致しました。』

『おや、さやうで。で、あの方は何と申しまして？』

『私、わたくしの突然の到着が良人の腹立ちを一層かきたてるかも知れないと存じて案じて居りました。』バルバラ・パウロヴナは續けた。『ですけど良人は別段面會を拒むやうなことは致しませんでした。』

『と申すのは、つまり、あの方は……さう——さやうで……解りました。』マリイ・ドミトリエヴナは口籠つた。『あの方はたゞ見掛けは少し剛いやうですけど、心の中は柔かでございます。』

『テオドル・イヴァニッチは私を赦してくれませんでした。あの方は私に耳を貸してくれませんでした。ですけどあの方は大層寛大な處置をとつて、ラヴレークを私の住居に

するやうに定めてくれました。』

『美しい御領地ですわね。』

『明日私はあすこへ參ることに致してをります、良人の希望を果しますために。けれどもその前にお宅をお訪ね致しますことが私の義務だと存じたので。』

『有難うございます、本當に有難うございますわ、あなた。人といふものは自分の身内を忘れてはなりません。ねえあなた、私あなたがそんなにロシア語を上手にお話しになりますので、本當に吃驚致してをるのでございますよ。C'est étonnant (驚くべき)』

バルバラ・パウロヴナは溜息をついた。

『私あまりに長く外國に居り過ぎましたのでございます、マリイ・ドミトリエヴナ、それは私存じて居ります。ですけど私の心はいつもロシア人でございました、そして私は私の祖國を忘れたことはございませんでした。』

『さやうでございますとも、それが一番良い事でございますわ。テオドル・イヴァニッチは、それにも拘らず、少しもあなたのお出でを豫期して居りませんでした。……ええええ、私の経験を御信用下さいまし、*la patrie avant tout* (何よりも祖國) おやまあ、ちよつと拜



見、あなたの召してゐらつしやるそのチャーミングな外套は何でございますの？」  
 『お氣に召しまして？』バルバラ・パウロヴナは手早くそれを肩から外した。『至極何でもない物でございますよ——ヴァオドラン夫人の店の品で……』

『ヴァオドラン夫人の——それは一目見れば解りますわね。まあ本當にさつぱりした、良い御趣味ですこと！ あなたは屹度色々澤山素晴らしい物を持つてお出でになつたのでございますわね。私たつた一目でも拜見致したいものでございますわ。』

『私の衣裳櫃のなかのものはどれでも御隨意にお役にお立てなすつて下さいまし。もしもお許しを得ますれば、私お宅のお女中に何か變つた型をお見せすることが出来ますかも知れません。私パリから女中を連れて参りましたが、それは珍らしいほどお針の上手な女でございますわね。』

『本當に御深切に有難うございます。ですけれど、私何だか心にやましい氣が致しますわ。』

『疾しい氣がなさるですつて？』バルバラ・パウロヴナは非難するやうに繰返した。『もしも私を仕合せな者にして下さるお積りがおありですならば、私をあなたの御所有品のやうに思召して下さいまし。』

マリイ・ドミトリエヴナはすつかりとろとろとなつて了つた。

『Vons et s charmante. (あなたはチャミングな方)』彼女は言つた。『で、あなたどうして帽や手套をお取りになりませんか？』

『何でございますか、それを許して頂けるのでございますか？』バルバラ・パウロヴナは言つた、そして自分の感情に壓倒されたかのやうに、兩手を軽く握り合せた。

『どうかそんな事をお訊ねにならないで！ 私御一緒にお食事をして頂く積りで居るのでございますよ。私……娘にお引き合せ致しますわ。』——マリイ・ドミトリエヴナは少し狼狽へた。『とんでもない事をした！』と彼女は考へた。そして言ひ足した。『あの娘は今日は氣分がすぐれないと申して居りましたけれど。』

侍僕がギデオノヴスキの來たことを報じた。饒舌家の老人は微笑を湛へながら、深く頭を下げながら入つて來た、そして、マリイ・ドミトリエヴナは彼を自分の客人に紹介した。彼は最初當惑した、がバルバラ・パウロヴナはひどく愛嬌を振り舞いて恭々しく彼を待遇したので、彼の耳は直きと燃えだし、色々の造り話や町の噂や冗談が甘つたるい言



葉になつて彼の口から流れ出した。バルバラ・パウロヴナは、慎み深く微笑みながら、彼の話を聞いてゐた、そして次第に自分も話しはじめた。彼女は慎み深く、パリのことや、旅行のことや、バーデンの事などを話した。彼女はマリイ・ドミトリエヴナを二度までも笑はした、そしてその都度こんな面白可笑しい話などしてゐる時ではないのだがと、心中自分を非難するかのやうに、軽く嘆息した。彼女はアダを連れてくる許しを願つた。そして滑つこい手で（それはいつもマシマロ石輪で洗はれた）手套を脱いで、どんな風にもまた何處に、それは褶縁やレエスや刺繍の飾りがしてあるかを見せた。彼女はヴィクトリア・エッセンスといふ新しいイギリスの香水を一握持つてくるように約束した、そしてマリイ・ドミトリエヴナがそれを一つの贈物として喜んで頂戴しようと言つたとき、小兒のやうに歡んだ。彼女は自分が再びロシアの鐘の音を聞いた時に経験した感情を思ひ出して、涙を流した。『それ程深くその音楽は私の心に浸み透りましたわ。』と彼女は呟いた。その時リーザが入つて來た。

朝から——ハツとして身體ぢう冷たくなりながら、ラヴレツキの手紙を読んだその時から、リーザは彼の細君との出會ひに對して自分の心を準備してゐた。彼女は自分がき

つと彼の細君と顔を合せることになりさうな氣がしたのであつた。彼女は、彼女自身の言ふところによれば彼女の罪深き希望に對する罰として、ラヴレツキの細君に會ふ事を避けまいと決心した。彼女の運命の唐突な變遷は、彼女をどん底まで搖がしてゐた。二時間ばかりの間に彼女の顔は瘠せた、けれども彼女は涙を流さなかつた。『どんな眼に遭つても仕方がない。』さう彼女は、彼女のたましひを擾き亂してゐる何かかう苦い、腹立たしい憤怒を、苦痛と一種の愕きともつて、押へ附けながら、自分自身に向つて言つたのであつた。『私は會はなくてはならない。』と彼女は、ラヴレツキ夫人の訪問を知らされるや否や考へた、そして彼女は應接間に入つた——彼女は長いあひだ扉の前に立つてゐた擧句、やつとの思ひでそれを開けることが出來た。

『この人の前に私は罪があるのだ。』といふ考へをもつて、彼女は鬨を横ぎつた、そして無理強ひに彼女と顔を見合せ、彼女に向つて微笑ひかけた。

バルバラ・パウロヴナは、リーザを見るやいなや、椅子から立ち上つて彼女の方へ行つた、そして軽くではあるが、やはり恭々しく頭をさげた。『御免蒙つてわたくし自分で御紹介致します。』彼女は相手に取り入るやうな聲で言つた。『お母様は御自分の身を落し



て大層私に深切にして下さいました、どうかあなたも……御深切に。』

彼女がこの最後の言葉を言つた時の彼女の顔の表情は、狡猾さうな微笑や、冷たい、それと同時に穏しやかな眼眸や、手や肩の作や、衣服の動き工合までもが、リーザのうちに激しい厭惡の感じをかき立てた、で彼女は一言も返事が出来ずに、たゞ辛うじて手を差し出した許りであつた。

『この若い女は私を侮蔑してゐる。』とバルバラ・パウロヴナはリーザの冷たい指を衝動的につと握りながら考へた、そしてマリイ・ドミトリエヴナの方を向いて、低聲で言つた。  
 『Mais elle est délicate.』(しかしこの人はお)

リーザは少し顔を赧めた。嘲笑と嘲罵とが此の言葉のうちに讀まれた、けれどリーザは自分の印象を信じないことに決心して、窓の傍に座を占め、刺繡を取り出した。バルバラ・パウロヴナは、そこでも彼女を平和にしておかなかつた。彼女はリーザの傍に近づいて、彼女の趣味や美術上の知識を褒めはじめた……一方リーザの心臓は實に強く、苦しく鼓動して、彼女はほとんど自分を抑へることが出来ないくらゐ、ほとんど座にもえ堪へぬくらゐであつた。彼女はバルバラ・パウロヴナは一切を知つてゐて、心竊かに凱歌を

あげながら、自分を嘲弄してゐるやうに思つた。彼女にとつて仕合せな事に、ギデオノヴスキがバルバラ・パウロヴナに話しかけて、彼女の注意を惹き附けた。彼女は自分の刺繡の上に俯き込んで、氣が附かれぬやうに彼女を見成つた。『あの方はこの女を愛したのだ。』と彼女は考へた、けれど彼女は、直きラヴレツキについての考へを心から追ひ拂つた。彼女は自分で自分の制御がつかなくなることを怖れた、彼女は頭が少しふらくして來たのであつた。とその時マリイ・ドミトリエヴナが音楽の事を話しはじめた。

『あなたは太層、』と、彼女ははじめた。『ピアノがお上手でゐらつしやるさうでございませわね。』

『私長いことピアノに觸つた事がございせんよ。』バルバラ・パウロヴナは答へて、身輕にピアノの前に坐つて、鍵の上に力強く指を走らせた。『何をお弾きすればよろしうございませう?』

『あなたのお好きな物を弾いてお聞かせ下さいまし。』

非常な力と熟練とを持つてゐるバルバラ・パウロヴナは、樂匠の手腕をもつて、ヘルツの華かな困難な練習曲を弾いた。



『空中に美女が舞つとるやうですなあ！』ギデオノヴスキが叫んだ。

『並一通りのお上手ではありませんわ。』マリイ・ドミトリエヴナは断言した。

『バルバラ・パウロヴナ、私嘘は申しませんですよ。』マリイ・ドミトリエヴナは初めて彼女の名を呼んで、かう言つた。『私吃驚致しましたわ。あなた獨演會をお催しになつては如何でございませうねえ！』この町に一人老人の音楽家が居ります、獨逸人で、偏屈で、大層學問のある人でございます、その人はリーザに音楽を教へて居りますのですが、あなたの御演奏を聞けばきつと呆氣に取られてしまふこととでございませうよ。』

『エリザベス・ミカエロヴナも音楽をなさいますの？』バルバラ・パウロヴナは、軽く彼女の方へ顔を向けながら訊ねた。

『え、あの娘も拙くはないやうですし、大體音楽は好きでございます。ですけれどあなたのお傍ではまるで何でもありませんわ！』今一人この町に若い人が居ります。その人ともあなたお近附きになりますよ。その人は徹頭徹尾藝術家でして、大層上手に作曲をなさいます。あなたのお技倆うごうが十分に解るのはきつとその人一人くらゐでございませうよ。』

『若い人ですつて？』バルバラ・パウロヴナは言つた。『どういふ人ですか？』貧乏な人ですか？』

『貧乏！』いゝえ、私共の第一番の騎士でございますよ、私共のばかりでなくベテルブルグでも有名な方で、一番上流の社會に出入りして居られる宮内官ですよ。あなたも屹度お聞きになつたことがおありでせう——パンシン・ヴラヂミル・ニコライアヴィッチといふ方です。政府の御用でこの邊へ出張して居られるので、まづ未來の大臣といつてよい方ですよ。』

『それで藝術家でゐらつしやる？』

『たましひまでも藝術家で、それに大層愛嬌のある方でございます。あなたもその方にお會ひになりますよ。その方は絶えず私共を訪ねて見えられます。私今夜も御招待しておきましたから、お出でになるだらうと思つとります。』マリイ・ドミトリエヴナは、小さな嘆息と苦い歪ゆがんだ微笑とをもつて、言ひ足した。

リーザはこの微笑の意味を了解した、けれども今は彼女にとつてそれを考へてゐる時ではなかつた。



『そしてお若い方ですの？』バルバラ・パウロヴナは聲の調子を軽く變化させながら繰返した。

『今年二十八におなりで、至極く愛嬌のある御様子の、たしなみの深い方でございます。』とマリイ・ドミトリエヴナは答へた。

『稀に見る青年と言つて宜敷いすな。』とギデオノヴスキは言つた。

バルバラ・パウロヴナは突然ギデオノヴスキが思はず身體を震はしたほど力強い、急速な顛音<sup>トリル</sup>でもつて始めて、シュトラウスの騒々しいワルツを弾き始めた。ガワルツの最中彼女は唐突に悲しいモチーフに移つて、『ルチア』のなかの『Fra poco……』といふ抒情調でもつて打ち切りにした。彼女は陽氣な音楽は自分の境遇に適當でないと考へたのであつた。感傷的な條に強調をおいてゐる『ラムメルムーアのルチア』からの抒情調はマリイ・ドミトリエヴナをひどく動かした。

『實にたましひに充ちて居りますわねえ！』彼女は低聲でギデオノヴスキに言つた。

『空中の精靈ですな！』ギデオノヴスキは繰返した、そして眼を天井の方にあげた。

ヂンナアの時刻が來た。マルタ・チモフ・イエヴナはスーブがもう卓子に並んだ時分に

二階から降りて來た。彼女はバルバラ・パウロヴナをひどく冷淡に取扱ひ、彼女の愉しげな話に半分しか答へなかつた、そして彼女を見もしなかつた。バルバラ・パウロヴナの方でも直き自分はこの老婦人から何もひき出すことは出來ないと見て取つた。そしてマリイ・ドミトリエヴナは、叔母の無禮な態度に腹を立て、一層客人に對して深切になつた。老婦人が眼をくれなかつたのはバルバラ・パウロヴナ一人だけではなかつた——彼女はリーザにも眼をくれなかつた。そして彼女の眼は實によく輝いてゐたが、彼女は黄色く、蒼ざめて、唇をしつかり引き結んで、石の様に坐つてゐた、そして何も食べなかつた。

リーザは落着いてゐるやうに見えた、そして彼女の心は實際以前よりは靜かになつてゐた。不思議な痲痺状態が、罪を宣告された者の痲痺状態が、彼女を襲つて來てゐた。ヂンナアのおひだバルバラ・パウロヴナは餘り話さなかつた。彼女は今一度おづくした氣持になつてゐるやうで、彼女の顔には彼女特有の愼み深い悵鬱の表情が擴がつてゐた。ギデオノヴスキ一人が例の小咄でもつて談話を賑はせた、たゞし（そしてこれが邪魔物であつたのだが）彼はそおつとマルタ・チモフ・イエヴナの様子を窺つて、そして咳が出なくなるやうな氣がした——彼は彼女の前で嘘を吐かうとする度毎に咳が出なくなるの



であつた。けれど彼女は容喙しはしなかつた、彼の饒舌おしゃべりを遮りはしなかつた。食事が済んでから、バルバラ・パウロヴナがひどく『選り札』が好きだといふことが發見された、そしてこれはひどくマリイ・ドミトリエヴナの氣に入つて、彼女は『なんて素晴らしい人だらう！ かういふ女ひとを了解することが出来ないなんて、テオドル・イヴァニッチはよつぽど馬鹿なんだよ。』と心のなかで考へて、腹を立てたくらゐであつた。彼女は、バルバラ・パウロヴナとギデオノヴスキと三人で骨牌をはじめた。がマルタ・チモファイエヴナは、リーザは頭痛でもして居りさうな顔附だと言つて、彼女を連れて二階の自分の部屋へ上つて了つた。

『さうなんですよ、あの女おんなはひどく頭が痛みますので。』マリイ・ドミトリエヴナはバルバラ・パウロヴナの方を向いて、頭を頷かせながら言つた。『丁度同じやうな偏頭痛が私にも起りますの。』

『そんな事がございますかねえ！』とバルバラ・パウロヴナは答へた。

リーザは叔母の部屋に入つた、そして力無く椅子に腰を下した。長いあひだ無言でマルタ・チモファイエヴナは彼女を眺めてゐた、それからつと彼女の前に跪いて、やはり無

言のまゝ、彼女の両手に交る代る接吻しはじめた。リーザは前方に屈み込んで、顔を紅めそして泣いた、けれども叔母を立ち上らせようともせず、自分の手をひつ込めようともしなかつた、彼女は自分には手をひつ込める權利さへないやうに、老婦人が彼女が昨日勤めた役割に對して自分の赦しを請ひ、後悔の心を表白することを止める權利さへないやうな氣がした。さうしてマルタ・チモファイエヴナはほとんどその白い、力なき手を接吻することを止めることが出来なかつた、そして無言の涙が彼女の眼から、そしてリーザの眼から流れた。

靴下を積み重ねた傍に、廣い脇掛椅子のなかに、猫の『水夫』がごろ／＼咽喉を鳴してゐた、小さなラムプの細い炎が偶像の前で微かに揺れ動いてゐた。さうして次の部屋では、扉の背後に、ナスタシア・カルボヴナが立つてゐた、そして球のやうに丸めた木綿の手中でもつて、こつそり涙を拭いてゐた。

## 四十



同じ時刻に、階下では骨牌をやつてゐた。マリイ・ドミトリエヴナが大分勝つて元氣がよかつた、とその時侍僕が入つて来てパンシンの來着を告げた。

マリイ・ドミトリエヴナは骨牌札を落して、椅子のなかで身悶えし始めた。バルバラ・パウロヴナは興味をもつて彼女を眺め、それから戸口の方に眸を返した。どそこにパンシンが高いイギリス風の襟のついた釦付きの黒のフロックコートを着て現はれた。

『お言葉に従ひますのは私にとつて苦しい事でした、しかし私はこの通り參上致しました。』——これが彼の微笑のない、剃りたての顔に表はれた言葉であつた。

『どうしなすつたの、ヴラヂミール!』マリイ・ドミトリエヴナは叫んだ。『あなたは以前は黙つて入つて來られましたのに!』

パンシンはたゞ眸でもつてマリイ・ドミトリエヴナに答へて、丁寧に頭をさげた、けれど彼女の手に接吻はしなかつた。彼女は彼をバルバラ・パウロヴナに紹介した。彼は一足後へ退つて、同じ慇懃さをもつて、しかしそれに優雅さと尊敬との様子をおまけに添へて辭儀をした、それから骨牌卓のところに坐つた。

勝負は間もなく了つた。パンシンはエリザベス・ミカエロヴナの健康について訊ねた、

そして彼女が氣分がすぐれないことを聞いて、自分の悲しみを表白した。それから彼はバルバラ・パウロヴナと談話をはじめた。彼は外交官らしく一話一語に重みを附けて形を調へながら、尊敬をもつて相手の返事を終ひまで聞いた。しかし彼の重々しい外交家的な調子は、バルバラ・パウロヴナに對しては煙の様に消えて了つて、何の効果も齎さなかつた。あべこべに、彼女は彼の顔を面白げに繁々と覗きこんで、平氣の平左で話した、そして彼女の薄い鼻孔は笑ひを抑へてゐるかのやうに軽く顫へた。

マリイ・ドミトリエヴナは、バルバラ・パウロヴナの才能を褒め揚げはじめた。パンシンは彼のカラアが許すかぎり鄭重に頭をさげた、そして自分は夙くからそれに氣がついてゐると言つて、一くさりメッテルニヒをこのけの雄辯を操つた。

バルバラ・パウロヴナの天鵞絨のやうな眼は瞬いた、そして『私もあなたが藝術家であらつしやるやうにお見受け致しますわ、私達はお仲間ね。』と低聲で言つてから、彼女は一層低い聲で、『いらつしやい。』と言ひ足して、ピアノの方をさして頷いてみせた。この『いらつしやい!』と無造作に落した一言がパンシンの様子をすつかり變へて了つた。刹那のうちに、まるで魔術の様に、彼のいとも慎重な態度が消えて了つた。彼は微笑んだ、



て大層私に深切にして下さいました、どうかあなたも……御深切に。』

彼女がこの最後の言葉を言つた時の彼女の顔の表情は、狡猾さうな微笑や、冷たい、それと同時に穩しやかな眼眸や、手や肩の作や、衣服の動き工合までもが、リーザのうちに激しい厭惡の感じをかき立てた、で彼女は一言も返事が出來ずに、たゞ辛うじて手を差し出した許りであつた。

『この若い女は私を侮蔑してゐる。』とバルバラ・パウロヴナはリーザの冷たい指を衝動的につと握りながら考へた、そしてマリイ・ドミトリエヴナの方を向いて、低聲で言つた。  
 『Mais elle est délicate.』(しかし、この人はお)

リーザは少し顔を赧めた。嘲笑と嘲罵とが此の言葉のうちに讀まれた、けれどリーザは自分の印象を信じないことに決心して、窓の傍に座を占め、刺繡を取り出した。バルバラ・パウロヴナは、そこでも彼女を平和にしておかなかつた。彼女はリーザの傍に近づいて、彼女の趣味や美術上の知識を褒めはじめた……一方リーザの心臓は實に強く、苦しく鼓動して、彼女はほとんど自分を抑へることが出來ないくらゐ、ほとんど座にもえ堪へぬくらゐであつた。彼女はバルバラ・パウロヴナは一切を知つてゐて、心竊かに凱歌を

あげながら、自分を嘲弄してゐるやうに思つた。彼女にとつて仕合せな事に、ギデイノヴスキがバルバラ・パウロヴナに話しかけて、彼女の注意を惹き附けた。彼女は自分の刺繡の上に俯き込んで、氣が附かれぬやうに彼女を見成つた。『あの方はこの女を愛したのだ。』と彼女は考へた、けれど彼女は、直きラヴレツキについての考へを心から追ひ拂つた。彼女は自分で自分の制御がつかなくなることを怖れた、彼女は頭が少しふらくして來たのであつた。とその時マリイ・ドミトリエヴナが音樂の事を話しはじめた。

『あなたは大層、』と、彼女ははじめた。『ピアノがお上手でゐらつしやるさうでございませわね。』

『私長いことピアノに觸つた事がございませぬのよ。』バルバラ・パウロヴナは答へて、身輕にピアノの前に坐つて、鍵の上に力強く指を走らせた。『何をお弾きすればよろしうございませう?』

『あなたのお好きな物を弾いてお聞かせ下さいまし。』

非常な力と熟練とを持つてゐるバルバラ・パウロヴナは、樂匠の手腕をもつて、ヘルツの華かな困難な練習曲を弾いた。



『空中に美女が舞つとるやうですなあ！』ギデオノヴスキが叫んだ。

『並一通りのお上手ではありませんわ。』マリイ・ドミトリエヴナは断言した。

『バルバラ・パウロヴナ、私嘘は申しませんですよ。』マリイ・ドミトリエヴナは初めて彼女の名を呼んで、かう言つた。『私吃驚致しましたわ。あなた獨演會をお催しになつては如何でございませうねえ！ この町に一人老人の音楽家が居ります、獨逸人で、偏屈で、大層學問のある人でございます、その人はリーザに音楽を教へて居りますのですが、あなたの御演奏を聞けばきつと呆氣に取られてしまふこととでございませうよ。』

『エリザベス・ミカエロヴナも音楽をなさいますの？』バルバラ・パウロヴナは、軽く彼女の方へ顔を向けながら訊ねた。

『え、あの娘も拙くはないやうですし、大體音楽は好きでございます。ですけれどあなたのお傍ではまるで何でもありませんわ！ 今一人この町に若い人が居ります。その人ともあなたお近付きになられますよ。その人は徹頭徹尾藝術家でして、大層上手に作曲をなさいます。あなたのお技倆が十分に解るのはきつとその人一人くらゐでございませうよ。』

『若い人ですつて？』バルバラ・パウロヴナは言つた。『どういふ人ですか？ 貧乏な人ですか？』

『貧乏！ いゝえ、私共の第一番の騎士でございますよ、私共のばかりでなくベテルブルグでも有名な方で、一番上流の社會に出入りして居られる宮内官ですよ。あなたも屹度お聞きになつたことがおありでせう——パンシン・ヴラヂミル・ニコライアヴィッチといふ方です。政府の御用でこの邊へ出張して居られるので、まづ未來の大臣といつてよい方ですよ。』

『それで藝術家でゐらつしやる？』

『たましひまでも藝術家で、それに大層愛嬌のある方でございます。あなたもその方にお會ひになりますよ。その方は絶えず私共を訪ねて見られます。私今夜も御招待しておきましたから、お出でになるだらうと思つとります。』マリイ・ドミトリエヴナは、小さな嘆息と苦い歪んだ微笑とをもつて、言ひ足した。

リーザはこの微笑の意味を了解した、けれども今は彼女にとつてそれを考へてゐる時ではなかつた。



『そしてお若い方ですの？』バルバラ・パウロヴナは聲の調子を軽く變化させながら繰返した。

『今年二十八におなりで、至極く愛嬌のある御様子の、たしなみの深い方でございます。』とマリイ・ドミトリエヴナは答へた。

『稀に見る青年と言つて宜敷いですな。』とギデオノヴスキは言つた。

バルバラ・パウロヴナは突然ギデオノヴスキが思はず身體を震はしたほど力強い、急速な顫音でもつて始めて、シュトラウスの騒々しいワルツを弾き始めた。がワルツの最中彼女は唐突に悲しいモチーフに移つて、『ルチア』のなかの『Era Poco……』といふ抒情調でもつて打ち切りにした。彼女は陽氣な音楽は自分の境遇に適當でないと考へたのであつた。感傷的な條に強調をおいてゐる『ラムメルムーアのルチア』からの抒情調はマリイ・ドミトリエヴナをひどく動かした。

『實にたましひに充ちて居りますわねえ！』彼女は低聲でギデオノヴスキに言つた。

『空中の精靈ですな！』ギデオノヴスキは繰返した、そして眼を天井の方にあげた。

ヂンナアの時刻が來た。マルタ・チモファイエヴナはスーブがもう卓子に並んだ時分に

二階から降りて來た。彼女はバルバラ・パウロヴナをひどく冷淡に取扱ひ、彼女の愉しげな話に半分しか答へなかつた、そして彼女を見もしなかつた。バルバラ・パウロヴナの方でも直き自分はこの老婦人から何もひき出すことは出來ないと見て取つた。そしてマリイ・ドミトリエヴナは、叔母の無禮な態度に腹を立て、一層客人に對して深切になつた。老婦人が眼をくれなかつたのはバルバラ・パウロヴナ一人だけではなかつた——彼女はリーザにも眼をくれなかつた。そして彼女の眼は實によく輝いてゐたが、彼女は黄色く、蒼ざめて、唇をしつかり引き結んで、石の様に坐つてゐた、そして何も食べなかつた。

リーザは落着いてゐるやうに見えた、そして彼女の心は實際以前よりは靜かになつてゐた。不思議な痲痺状態が、罪を宣告された者の痲痺状態が、彼女を襲つて來てゐた。ヂンナアのおひだバルバラ・パウロヴナは餘り話さなかつた。彼女は今一度おづくした氣持になつてゐるやうで、彼女の顔には彼女特有の愼み深い悒鬱の表情が擴がつてゐた。ギデオノヴスキ一人が例の小咄でもつて談話を賑はせた、たゞし（そしてこれが邪魔物であつたのだが）彼はそおつとマルタ・チモファイエヴナの様子を窺つて、そして咳が出なくなるやうな氣がした——彼は彼女の前で嘘を吐かうとする度毎に咳が出なくなるの



であつた。けれど彼女は容喙しはしなかつた、彼の饒舌おしゃべりを遮りはしなかつた。食事が済んでから、バルバラ・パウロヴナがひどく『選り札』が好きだといふことが發見された、そしてこれはひどくマリイ・ドミトリエヴナの氣に入つて、彼女は『なんて素晴らしい人だらう！ かういふ女ひとを了解することが出来ないなんて、テオドル・イヴァニッチはよつぽど馬鹿なんだよ。』と心のなかで考へて、腹を立てたくらゐであつた。彼女は、バルバラ・パウロヴナとギデオノヴスキと三人で骨牌をはじめた。がマルタ・チモファイエヴナは、リーザは頭痛でもして居りさうな顔附だと言つて、彼女を連れて二階の自分の部屋へ上つて了つた。

『さうなんですよ、あの女おんなはひどく頭が痛みますので。』マリイ・ドミトリエヴナはバルバラ・パウロヴナの方を向いて、頭を頷かせながら言つた。『丁度同じやうな偏頭痛が私にも起りますの。』

『そんな事がございますかねえ！』とバルバラ・パウロヴナは答へた。

リーザは叔母の部屋に入つた、そして力無く椅子に腰を下した。長いあひだ無言でマルタ・チモファイエヴナは彼女を眺めてゐた、それからつと彼女の前に跪いて、やはり無

言のまゝ、彼女の両手に交る代る接吻しはじめた。リーザは前方に屈み込んで、顔を紅めそして泣いた、けれども叔母を立ち上らせようともせず、自分の手をひつ込めようともしなかつた、彼女は自分には手をひつ込める權利さへないやうに、老婦人が彼女が昨日勤めた役割に對して自分の赦しを請ひ、後悔の心を表白することを止める權利さへないやうな氣がした。さうしてマルタ・チモファイエヴナはほとんどその白い、力なき手を接吻することを止めることが出来なかつた、そして無言の涙が彼女の眼から、そしてリーザの眼から流れた。

靴下を積み重ねた傍に、廣い肱掛椅子のなかに、猫の『水夫』がごろ／＼咽喉を鳴してゐた、小さなランプの細い炎が偶像の前で微かに揺れ動いてゐた。さうして次の部屋では、扉の背後に、ナスタシア・カルボヴナが立つてゐた、そして球のやうに丸めた木綿の手巾でもつて、こつそり涙を拭いてゐた。

## 四十



同じ時刻に、階下では骨牌をやつてゐた。マリイ・ドミトリエヴナが大分勝つて元氣がよかつた、とその時侍僕が入つて来てパンシンの來着を告げた。

マリイ・ドミトリエヴナは骨牌札を落して、椅子のなかで身悶えし始めた。バルバラ・パウロヴナは興味をもつて彼女を眺め、それから戸口の方に眸を返した。とそこにパンシンが高いイギリス風の襟のついた卸附きの黒のフロックコートを着て現はれた。

『お言葉に従ひますのは私にとつて苦しい事でした、しかし私はこの通り參上致しました。』——これが彼の微笑のない、剃りたての顔に表はれた言葉であつた。

『どうしなすつたの、ヴラヂミール！』マリイ・ドミトリエヴナは叫んだ。『あなたは以前は黙つて入つて來られましたのに！』

パンシンはたゞ眸でもつてマリイ・ドミトリエヴナに答へて、丁寧に頭をさげた、けれど彼女の手に接吻はしなかつた。彼女は彼をバルバラ・パウロヴナに紹介した。彼は一足後へ退つて、同じ慇懃さをもつて、しかしそれに優雅さと尊敬との様子をおまけに添へて辭儀をした、それから骨牌卓のところに坐つた。

勝負は間もなく了つた。パンシンはエリザベス・ミカエロヴナの健康について訊ねた、

そして彼女が氣分がすぐれないことを聞いて、自分の悲しみを表白した。それから彼はバルバラ・パウロヴナと談話をはじめた。彼は外交官らしく一話一語に重みを附けて形を調へながら、尊敬をもつて相手の返事を終ひまで聞いた。しかし彼の重々しい外交家的な調子は、バルバラ・パウロヴナに對しては煙の様に消えて了つて、何の効果も齎さなかつた。あべこべに、彼女は彼の顔を面白げに繁々と覗きこんで、平氣の平左で話した、そして彼女の薄い鼻孔は笑ひを抑へてゐるかのやうに軽く顫へた。

マリイ・ドミトリエヴナは、バルバラ・パウロヴナの才能を褒め揚げはじめた。パンシンは彼のカラアが許すかぎり鄭重に頭をさげた、そして自分は夙くからそれに氣がついてゐると言つて、一くさりメッテルニヒをこのけの雄辯を操つた。

バルバラ・パウロヴナの天鵝絨のやうな眼は瞬いた、そして『私もあなたが藝術家であらつしやるやうにお見受け致しますわ、私達はお仲間ね。』と低聲で言つてから、彼女は一層低い聲で、『いらつしやい。』と言ひ足して、ピアノの方をさして頷いてみせた。この『いらつしやい！』と無造作に落した一言がパンシンの様子をすつかり變へて了つた。刹那のうちに、まるで魔術の様に、彼のいとも慎重な態度が消えて了つた。彼は微笑んだ、



潑刺としてきた、上衣の釦を外した、そして『私がどんな藝術家ですつて？——厭ですね！——ですがあなたこそ本當の藝術家であらうしやるさうぢやありませんか。』と言ひながら、バルバラ・パウロヴナの後について、ピアノの處に行つた。

『その人に「月は浮ぶ」の歌を歌はせて御覽遊ばせ！』マリイ・ドミトリエヴナは叫んだ。『あなたはお歌ひになりますの？』バルバラ・パウロヴナは朗かな、迅い一瞥でもつて彼を元氣づけながら、訊ねた。『お掛け遊ばせ。』

パンシンは辭退しはじめた。

『お掛け遊ばせ。』と彼女は繰返して、椅子の背を命令するやうに叩いた。

彼は掛けた、咳をした、カラアを直した、そして彼のロオマンズを歌つた。

『チャーミングですわ。』バルバラ・パウロヴナは言つた。『美しいお歌ひ振りですわね。御自分のスタイルがありますわ。今一度歌つて頂戴。』

彼女はピアノの向う側に行つて、パンシンに向ひ合つて立つた。彼は聲にメロドラマ的な韻律をおまけとして添へながら、彼の歌を繰返した。バルバラ・パウロヴナは眩をピアノに寄せかけ、彼女の白い手を肩と同じくらの高さに置いて、注意深く彼を見詰め

てゐた。パンシンは歌ひ終つた。

『チャーミング、チャーミングな思想ですわね。』彼女はよく物を知つてゐる人の靜かな確信をもつて言つた。『あなたは女の聲に適したものを何かお書きになりました？ 次高音に？』

『私はほとんど何も書きません。』パンシンは答へた。『私は仕事の合間々々に書いてみるに過ぎませんから。ですがあなたお歌ひになるのですか？』

『歌ひますわ。』

『おやまあ、私共に何か歌つて聞かせて下さいました。』とマリイ・ドミトリエヴナは言つた。

バルバラ・パウロヴナは上氣してきた頬から髪を後ろに押しやつて頭を掉つた。

『私共の聲はよく合ふでせうよ。』彼女はパンシンの方を向いて言つた。『二重唱をやつてみませう。あなた「La ci darem」かそれとも「Son geloso」か「Mira la bianca luna」を知つてらしつて？』

『私は「Mira la bianca luna」をよく歌つたものでした。』パンシンは答へた。『しかしずつ



と以前に忘れちゃいました。』

『大丈夫ですよ、ために低い聲でやつてみようぢやございませんか。御免遊ばせ。』

バルバラ・パウロヴナはピアノに向つて坐つた。パンシンは彼女の傍に立つた。兩人は低聲で二重唱を唱つた、そしてそのあひだにバルバラ・パウロヴナは幾度か彼の間違ひを直した。それから彼等は高聲に唱つた、そしてそれを二度繰返した。——『Mira la bianca  
in—na.』

バルバラ・パウロヴナの聲は新鮮な感じをなくしてゐた、けれど彼女はそれを至極伶俐に繰つた。パンシンは最初のうちおづ／＼して聊か調子が外れた。それから彼は段々熱心になつて来た、そして歌ひ振りに缺點はあつたにせよ、盛に肩を動かし、身體を揺り、時々専門家のやうに手を振り上げたりした。

バルバラ・パウロヴナは二つ三つタルベルグの小曲を弾いた、そしてちよつとしたフランスのものを媚かしい調子で歌つた。マリイ・ドミトリエヴナはどうして自分の歡びを言ひ表はしていゝか解らなかつた。彼女は幾度もリィザを呼びに遣りたいと思つた。ギデオノヴスキも彼の感情を表白すべき言葉を見出し得なかつた、そしてたゞ頭を頷かせた、

が突然、思ひ掛けなく欠伸が出て来た、そして辛うじて手でもつて口を押へることが出来たのであつた。この欠伸はバルバラ・パウロヴナの眼を逃れなかつた。彼女は唐突にピアノに背を向けて言つた。『こんな音楽は澤山ですわね——それより饒舌を致しませう。』そして腕を組んだ。『さうです、音楽は澤山だ。』パンシンも陽気に繰返した、そして軽い生き生きした調子で、フランス語でもつて彼女と談話をはじめた。まつたくパリで一流の客間へ行つたやうだ。』とマリイ・ドミトリエヴナは兩人の柔靱かな、香りの高い文句に聞き入りながら考へた。

パンシンは歡びのほか何事をも感じなかつた。彼の眼は輝きそして彼は微笑んだ。はじめのうちは、偶々マリイ・ドミトリエヴナの眼に打つと、彼は手で顔を撫でて、眉根を寄せて、途切れ途切れに嘆息した。が終にはまつたく彼女のことを忘れて了つて、半ば藝術的な、半ば社交的な饒舌の音楽にまつたく自分を打ち込んで了つた。

バルバラ・パウロヴナは自分が偉いなる哲學者であることを示した。彼女はどんな事にも即答を與へた。彼女はどんな題目に關しても、疑ひといふものを持たず、躊躇といふことをしなかつた。彼女が様々な方面の聰明な人達と始終談話してゐたことは明か



あつた。彼女の思想や感情はことごとくパリを中心にしてゐた。

三〇二

パンシンは文學に關する論議をひき出した。彼女も、彼と同じく、フランスの書物以外は何も讀んでゐないらしかつた。ジョルジュ・サンドは彼女の憤慨を惹き起した。バルザックを彼女は尊敬した、たゞし彼は彼女を退屈させたけれども、シュウとスクリーブとが彼女には偉大な人情の探索者のやうに思はれた。心の底では彼女はポオルド・コックを是等のうちの誰れよりも好んだ。けれども、容易に想像されるやうに、彼女は彼の名を口にすることさへしなかつた。一層適當に言へば、文學は大して彼女の興味を惹かなかつたのである。バルバラ・パウロヴナは自分の境遇を少しでも想ひ出させるやうな話題は極めて巧妙にこれを避けた、そして彼女の談話のなかでは戀愛について何事も言はれなかつた。あべこべに、それは寧ろ情熱の誘惑に對する峻嚴な氣持を、現實暴露の悲哀を、諦念を、暗示してゐた。パンシンは反對した。彼女は彼に同意しなかつた……ところが、不思議なことには、呪咀の言葉が、しばしば峻嚴な言葉が、彼女の口から出てゐるその時に、その言葉の響きは愛撫するやうなやさしい調子であつた、そして彼女の眼はかう言つてゐた……いや、そのチャーミングな眼が適確に何を語つてゐたかを言ふのは困難

である。が、それは嚴格なものではなかつた。はつきりしたものではなかつたが、しかし確かに甘いものではあつた。パンシンはその秘密な意味を了解しようと努めた。自分も眼でもつて話をしようと努めた、が、彼はこの企ての無効果に終ることを感じないわけにはゆかなかつた。彼は甘んじてバルバラ・パウロヴナが、紛れもないパリのサロンの花形として、自分よりも重大な人物であることを認め、でそれ故に全く自分を失つて了つた。バルバラ・パウロヴナは、自分が話してゐる相手の人間の袖にちよいと觸つてみる癖があつた、そしてこの接觸の都度パンシンはひどく昂奮した。彼女はまた誰れとも直き親しくなる天賦を持つてゐた、で、二時間経たないうちに、パンシンはもう生れた時から彼女を知つてゐたやうな氣になつて了つた、そしてリーザは——彼が今でも矢張り愛してゐるリーザ、彼が昨日その手を求めたばかりのリーザ——は霧でもかゝつたやうに消えて了つた。

茶が出て、談話は一層寛いで來た。マリイ・ド・ミトリエヴナは呼鈴を鳴して侍僕を呼び、リーザに頭痛が少しよくなつたら階下に降りて來てくれるやうに言へと呟附けた。パンシンは、リーザの名を聞くと、自己犠牲について、男と女とどちらに自己犠牲の能力が



あるかといふ事について、話しはじめた。マリイ・ドミトリエヴナは、直ぐに昂奮してきて、女の方により多くその能力があると断言し、自分はほんの二三言ことでもつてそれを證明してみせると言つた、ところが直き話の筋がこんがらがつて、結局彼女の説明は不成功に了つた。

バルバラ・パウロヴナは一枚の楽譜をとつて、そのうしろに半分額を匿した、そしてピケットを食べながら、パンシンの方へ軀を屈けて、唇と眼の邊に落着いた微笑を洗へ乍ら、低聲でかう言つた。『*Elle n'a pas inventé la poudre, la bonne dame.* (この善い奥さんの)』パンシンはバルバラ・パウロヴナの圖々しさに聊か驚き呆れた。しかし彼は彼自身に對するどれだけの侮蔑がこの思ひ掛けない打明け話のうちに隠されてゐるかを了解しなかつた。そしてマリイ・ドミトリエヴナの自分に對する深切と傾倒とを打忘れ、彼女がよつてもつて自分を肥やしてくれた幾度ものデナアを、彼女が自分に用立てゝくれた金子を、打ち忘れて、彼は(不幸な者よ)同じ種類の微笑、同じ種類の聲でもつて答へた。『*Je crois bien (私もさう) 思ひます)!*』と。——しかも『*Je crois hier.*』と言はずに『*Je crois ben.*』と言つた。

バルバラ・パウロヴナは彼に親しげな眼まなこ眸を投げて立ち上つた。リーザが入つて來たのであつた。

マルタ・チモフ・アイエヴナが彼女を引きとめようとしたが、無駄であつた。リーザは最後まで試練に堪へようと覺悟を決めてゐたのである。

バルバラ・パウロヴナとパンシンとは一緒に彼女を出迎へた、そしてパンシンの顔にはふたゝび以前の外交官風の表情があらはれた。

『御氣分は如何ですか?』と彼はリーザに訊ねた。

『私大分よくなりました、ありがたうございます。』と彼女は答へた。

『私達はこゝでちよつと音楽をやつてゐました、あなたがバルバラ・パウロヴナの歌を聞かれなかつたのは残念です。この方は實に愉快な歌ひ方をされますよ。』

『こちらへいらつしやい、あなた。』とマリイ・ドミトリエヴナの聲が聞えた。

バルバラ・パウロヴナは直ぐ様、小兒のやうに従順にマリイ・ドミトリエヴナの傍に近づいて、彼女の足下の小さな腰掛に腰を掛けた。マリイ・ドミトリエヴナは、パンシンをたとへちよつとの間でもリーザと二人きりでおくために、彼女を呼んだのであつた。彼女はやはりリーザが考へ直すかもしれないと秘かに希望してゐたのであつた。そしてそれ



ばかりでなく、ある考へが彼女の頭に浮んだので、彼女は直ぐそれを話さうと思つた。

『ねえ、あなた。』彼女はバルバラ・パウロヴナに囁いた。『私あなたと旦那さんの仲を取り持つてみたいと思ひますのよ。果して成功しますかどうかですか、受合ひ兼ねますけれど、私兎に角やつてみませう。あの人は大層私を尊敬して居りますのよ。』

バルバラ・パウロヴナはそろ／＼眼をマリイ・ドミトリエヴナに擧げた、そして両手を美しく組み合せた。

『あなたは私の救主であらうしやいます、叔母さま。』と彼女は悲しげな聲で言つた。『私あなたのあらゆる御深切に對してどうお禮を申しあげてよいか存じませんですわ。私テオドル・イヴァニッチの眼にあまりに罪が深いのですもの——良人は私を赦すことが出来ないでございます。』

『そんな事がありますの？ あなたが？……本當に？……』マリイ・ドミトリエヴナは好奇心をもつて言ひはじめた。

『私にそれをお訊ねにならないで下さいまし。』バルバラ・パウロヴナは遮つた。『私は若くて輕はずみでございました……私自分の罪を辯護する積りはございませんけれど。』

『それにしても、やつてみてならない筈はありませんよ。失望しないであらうしやい。』とマリイ・ドミトリエヴナは答へた、そしてバルバラ・パウロヴナの頬に軽く觸つてみようとしたが、彼女の顔を見ると勇氣が挫けた。『こんなに慎み深い人で居ながら、もう随分評判になつてゐるのだね。』と彼女は思つた。

一方ではパンシンがリーザに言つてゐた。『氣分がおわるいさうですね。』

『え、どうもすぐれませんでして。』

『私は了解して居ります。』と彼はやゝ長い沈黙の後で言つた。『さうです、私はあなたの事を了解して居ります。』

『どうしてでございます？』

『私はあなたを了解してをります。』とパンシンは意味ありげに繰返した。彼は何と言つていゝか知らなかつたのである。

リーザは間誤ついた、けれどそれから考へた。『そんならそれでいゝわ！』パンシンは神祕的な顔附を装つた、そして無言で峻しく傍の方を見た。



客人達は了解した、そして暇を告げはじめた。メルバラ・パウロヴナは翌日アダを連れてデナンアに来るように約束させられた。

ギデオノヴスキは、隅つこの方で今にも眠りこけようとしてゐたが、彼女を家までお送りしようと申し出た。

パンシンは嚴かな様子で皆に別れを告げた。そして、戸口で、メルバラ・パウロヴナを馬車に乗せる時、彼女の手を強く握つた、そして彼女の馬車が駆け出す時、『*Au revoir!* (またお目に掛りませう)』と叫んだ。

ギデオノヴスキは彼女の傍に座を占めてゐた、そして彼女は家へ着くまで自分の靴の先を、何かのはずみでのやうに、彼の足に乗せて、面白がつた。彼は間諜ついた、彼女にお世辭を言つた。彼女は笑つた、そして、街のラムプの灯が馬車のなかへ落ちたとき、彼にちよいと色眼を使つてみせた。彼女自身が弾いたワルツが彼女の頭のなかに鳴り響いて、彼女を昂奮させた。自分が何處に居らうと、舞踏室や華かな燈火や樂の音に合せて舞ひ狂ふ氣持やを自分の心に描いてみせることが、彼女にとつて必要であつた。さうすると彼女のたましひは炎のやうに燃え上り、彼女の眼は變な風に引つこみ、微笑が彼

女の口邊をあちこち彷徨ひ、そして何か優美な、ミーナド(バックカス神の女祭司)のやうな物が、彼女の肉體のあらゆる部分に擴がるのであつた。

家に着くと彼女は身輕に馬車から跳び降りた——社交界の立役者でなければさうした跳び降り方を知らないのである——そしてギデオノヴスキの方を向いて、彼の顔に向つておほくと笑つた。

『愛想のいゝ人だ!』と樞密顧問官は、自分の住居の方に向つて歩きながら考へた。そこには、石鹼擦劑の曇を持つて侍僕が彼の歸りを待つてゐるのである。『私が眞面目な人間で仕合せだ……だがあの人は何を笑つたんだらうかな?』

その夜一夜マルタ・チモフ・イエヴナはリーザの寢床の傍に附きつきりであつた。

## 四十一

ラヴレツキは一日半をヴァシリエヴスキで過した、そしてその間ちう殆んどその邊の田



舎を彷徨<sup>うろた</sup>いて歩いた。彼は長く一ヶ處に居ることが出来なかつた。苦惱が彼を嚙んだ。彼は絶えざる、猛烈な、しかも力無き逆上状態のあらゆる苛責を経験した。彼は嘗て自分がこの田舎に着いた翌日自分のたましひを貰いたあの感情を思ひ出した。彼は自分がその時抱いてゐた意圖を思ひ出した、そして自分自身に對して大いなる侮蔑を感じた。何物が彼を彼が自分の義務だと認めたものから、彼の未來を蔽へる問題から裂き離すことが出来たのであつたか？ 幸福に對する渴望であつた……ふたゝびかの幸福に對する渴望であつた。——『確かにミカエライヴィチの言つたことは正しかつた。』と彼は考へた。『お前は、またもや二度目に地上の幸福のどん底を味はうとした。』と彼は彼自身に言つた。『お前はそれがたとへ一度でも人間を訪れることがあれば、それは餘計な贅澤、思ひ掛けない恵みである事を忘れた。お前の幸福は十分でなく、また不純であつた。だからと言つて、お前はお前の眞の幸福を得る權利を證據立てようといふのか！ 周圍を眺めて見ろ！ お前のまはりの誰が幸福か？ 草を刈りに出掛けて行くあの農夫は、彼は自分の運命に満足してをるかも知れぬ？ 何！ お前はあの農夫と境遇を取り代へることを願ふといふか？ お前自身の母親の事を考へて見ろ！ 彼女のこの世に對する要求は實

に、言ふに足りないほど小さなものであつた、しかも彼女の宿命はどんなものであつたか！ お前がパンシンに向つて自分は土地を耕さんがためにロシアに歸つて來たと言つたのは、たしかにお前の駄法螺であつた。お前はお前の齡になつて若い娘の手を握るために歸つて來たのだ。お前の身が自由になつたといふ報知<sup>しきち</sup>が着くや否や、お前は萬事を投げ棄て、萬事を忘れて、一羽の蝶のあとを小兒が追つ掛けるやうに追つかけたではないか！』リーザの姿が彼の瞑想の最中に絶えず彼の前に現れた。骨を折つて、彼はそれを追ひ出した、——今一つの有難くない幻、今一つの落着き拂つた、狡猾な、美しい、そして憎むべき顔と共に。

アントン老人は主人の様子がいつもと變つてゐるのに氣がついた、そして扉のうしろで五六度、闕の上で二三度も溜息をついた後に、やつと決心をして主人のところに行き、何か温かな飲料を召上つてはと忠告した。

ラヴレツキは彼を怒鳴りつけた、そして行つて了ふように呟附けた、それから後になつて老人に詫を言つた、そしてこれがアントンを一層悲しがらせた。

ラヴレツキは客間に坐つてゐることが出来なかつた。彼は曾祖父のアンドルウが額縁



のなかから自分の意氣地のない子孫を蔑むやうに見下してゐるやうな氣がした。曾祖父がひん曲げた唇の隅から、『貴様は相變らず淺瀬でぼちやぼちやつとるな!』と言つてゐるやうに思はれた。『こんな事があつてよいものか。』と彼は考へた。『俺が俺自身の生活のこりを解きほぐすことが出来ないで、かういふ馬鹿げた目に遭つてゐるといふことが?』(戰場では、深手を負つた兵士はいつも自分の傷を『馬鹿げた目』と呼ぶ。人間は自分を欺かなければこの世に生きてゐることは出来ないものなのだ。『俺は本當に小兒なかな、それとも何かしら? 俺は俺の一生の幸福の可能をほとんど手に取つて、熟々と見た、そして突然それは消えて了つた。富籤の場合が丁度さうなんだ——輪がもうほんのちよつと廻る、するとおそらく貧乏人が富豪になるのだ。さうでなければ、さういふ事は起らないのだ、そしてそれつきりお終ひなんだ。俺は俺の荷物を背負ふことにしよう、齒を喰ひしばつて沈黙を守らう、俺が俺自身のうちに引つ込むことはこれが初めてではないのだ。で、何故俺は駈けたのだ、そして何故俺は此處にかうして、駝鳥のやうに草叢のなかに頭をもぐらせてゐるんだ? 「不幸」といふものの眼を見入るのはそんなに怖ろしい事なのか?——馬鹿な!』『アントニー!』彼は聲高に叫んだ。『直ぐ馬車の用

意をさせてくれ。』『さうだ。』と彼はまた考へた。『自分に向つて沈黙を命ずるのが必要だ、自分を抑へつけることが!』

さうした覺悟でもつてラヴレツキは自分の悲嘆を軽くしようと努めた、がそれは偉きくて峻烈であつた。そして頭腦と共にあらゆる感情をほとんど無くして了つてゐるアラクシアさへも、頻りと頭を掉つて、彼が町へ出掛けるために馬車に乗り込んだ時、悲しげに彼のあとを見送つた。

馬共は駈け出した、そして彼は身動きもせず、眞直ぐに坐つてゐた、そして寂然として彼は自分の前の道路を見詰めてゐた。

## 四十二

前夜リーザがラヴレツキに寄越した手紙にはこの夜訪ねてくれるやうにと書いてあつた、けれど彼は先づ自分の宿に行つた。

妻も娘も家に居なかつた、そして、召使共に質して、たゞ彼は彼等がカレエチナ夫人



を訪ねに出掛けたことを知つた。この新事實は彼を驚かせ、かつ憤らせた。「確かにバルバラ・パウロヅナは、俺に生きる機会を與へない覺悟なんだな。」と彼は荒々しい敵意を胸に感じながら、思つた。彼はその邊に散らばつてゐる小兒の玩具や女の持物などに絶えず足や手で觸りながら、あちこち歩きはじめた。彼はジュスチヌを呼んだ、そしてこの『瓦落多』を片付けてしまへと囑咐けた。「畏りました、旦那様。」と彼女は顔を繋めて見せながら言つた、そして嫻かに軀を屈げ、一舉一動ラヴレツキに自分は彼を野蠻な田舎者としか考へてゐないことを示しながら、部屋の中を片付けはじめた。彼は彼女の色褪せた、しかしまだひりつとした味のある、嘲笑的な、パリ子風の顔を、彼女の白い手套を、絹のエプロンを、そして軽い帽を嫌惡をもつて眺めた。到頭彼は彼女を追ひやつた、そしてひどく躊躇した後で、(バルバラ・パウロヅナはやはり歸つてこない)ので漸くカレエチナ夫人の家を、訪ねることに決めた。——マリイ・ドミトリエヅナのところへではなく、(彼はどんな事があつても彼女の客間へは、彼の妻のゐる客間へは入る積りはなかつた。)マルタ・チモファイエヅナのところへ。彼は召使共の出入口からの裏梯子が、眞直ぐ彼女の部屋に續いてゐることを思ひ出した、で彼は出掛けた。機會が彼を助けた。彼は

に入口でシュロチュカに會つた、そして彼女が彼をマルタ・チモファイエヅナのところへ連れて行つた。彼は彼女がいつもの習慣とは違つて一人でゐるのを見出した。彼女は帽子も被らずに、前屈みになつて、胸の前に腕を組んで、隅つこに坐つてゐた。

老婦人はラヴレツキを見るとひどく昂奮して、慌しく立ち上つた、そして帽を探してでもゐるやうに、あちらに行きこちらに行きし始めた。

『で、お前さん來られたんだね——こゝへ。』彼女は彼の眼を避けながら、そして一層いら／＼して來ながら、言ひ始めた。『それで、御機嫌はどうだね？ どうしたのたえ？ どうすればいゝのたえ？ お前さん昨日は何處にお居でだつたえ？ あの人が來ましたね。で、とに角……何とかする必要がありませんね。』

ラヴレツキは落ちる様に椅子に掛けた。

『さうだ、掛けなされ、掛けなされ。』老婦人は續けた。『お前さんは眞直ぐに二階へ來なすつたんだね？ さう、それは解ります。どうおしだえ？ お前さんは私を見に來なすつたのたえ？ 有難うよ。』

老婦人は黙つた。ラヴレツキは彼女に何を言つていゝか解らなかつた、しかし彼女は



彼を了解した。

『リーザ……さう、リーザは今し方此處に居ましたよ。』マルタ・チモファイエヴナは彼女の仕事籠の紐を扭つたり、もとに戻したりしながら續けた。『あの娘は氣分がよくないのだよ。シュロシュカ、お前何處に居るのかえ？　こゝへお出でなさい。どうおしだい？　ちつと坐つて居ることが出来ませんかえ？　あゝ、私は頭痛がします。屹度あの歌だの音楽だののお蔭だよ。』

『どうした歌ですか、叔母さん？』

『どうした歌だつて！　お前さん、こゝではもうあの——どう言へばよいのかねえ——あの人達がさ、二重唱をやつたのだよ、みんなイタリヤ語でね、チエーチェだのチャーチャだのつて、まるで片言さねえ。あの人達はまるでたましひから音色をひき出しでもするやうにやり始めますねえ。あのパンシンとお前さんのとがさ。で随分手つ取り早い話さねえ、もうまるで親類か何かのやうに、禮儀も何もないんだからね。しかし大でさへ隠れ場所を探して歩く世の中だ、人間は生きて居らうと思へば、それぞれ自分の便宜を計らないぢやあねえ。』

『それにしてもこれは思ひも寄りませんでした。』ラヴレツキは答へた。『この世ぢや非常な大膽さが要るのですよ。』

『いゝえ、お前さん、これは大膽さぢやありません、みんな考へてしてゐるのです、そして……神様があの人と一緒に居られるやうに！……お前さんはあの人をラヴレークへ遣らうとしてゐるといひますが、本當ですかえ？』

『さうです、私はさうバルバラ・パウロヅナに申しました。』

『あの人はお金を呉れとは言はなかつたかえ？』

『まだ言ひません。』

『それも長い事ではあるまいねえ。でまあ私はかうしてお前さんに會へた譯だが、お前さん身體はいゝかえ？』

『身體はいゝです。』

『シュロチュカ。』マリイ・ドミトリエヅナは突然呼び掛けた。『どうぞ、エリザベス・ミカエロヅナにかう言つておくれ……いや、あの人に訊ねておくれ……あの人は階下に居ますかえ？』



『階下に、奥様。』

『さうかえ、それではね、あの人に私の書物を何處へ置いてくれたか訊ねて来ておくん  
なさい。あの人が知つてゐますから。』

『はい、奥様。』

老婦人はまたもや昂奮して來た、そして書物卓の抽斗を交る代る開けはじめた。ラヴ  
レツキは椅子にぢつと坐つてゐた。

突然軽い足音が階段に聞えた、そしてリーザが部屋に入つて來た。

ラヴレツキは立ち上つて頭をさげた。リーザは入口に近く立ち停つた。

『リーザ、リーゾチュカ。』マルタ・チモファイエヴナは騒々しく言つた。『私の書物は何處  
にありますね？ 何處へお前さんあれを置いてくれましたね？』

『何の御本ですの、叔母様？』

『あゝ、あの書物さ、だけど私はお前さん呼びはしなかつたのだよ。しかし同じ事だ  
ね。お前さん階下で何をしてゐるのだえ？ こゝにテオドル・イヴァニッチが來てゐます。  
お前さんお頭はどんな工合だえ？』

『何でもありませんわ。』

『お前さんはいつでも何でもないつてお言ひだね。あの人は階下で何をしてゐます？  
また音楽かえ？』

『いゝえ、骨牌をしてらつしやいます。』

『さうさ、あの人は何でも出来るのさ。シュロチュカ、お前さんお庭園へ行きたいだら  
う、行つておいでなさい。』

『いゝえ、マルタ・チモファイエヴナ——』

『そんな事を言はんで、何卒。駈けておいでなさい。ナスタシア・カルボヴナが一人で  
庭園に行つてゐます。暫くの間あの人と一緒に居てなさい——お婆さんを尊敬するの  
ですよ。』シュロチュカは部屋を去つた。『さう、で私の帽は何處にありましたつけ？ あ  
れは何處に行つたつけ？』

『私に探させて頂戴。』リーザは口の中で言つた。

『お前さんはお掛けなさい、お掛けなさるがいゝ。私の脚はまだ折れては了ひません。  
あれは屹度私の寢部屋にあるのだらうよ。』そして、眉根の下からラヴレツキに一瞥を投



げながら、マルタ・チモフ・イエヅナは兩人を残して出て行つた。彼女は扉を開け放しておいた、が突然振り返つてそれを閉めた。

リーザは椅子のなかで後ろに凭り掛つた、そして靜かに両手で顔を蔽うた。ラヴレツキは元のところに立つてゐた。

『私達はこんな風にして會はなければならぬ事になりました。』と彼は到頭言つた。

彼女は顔から両手を取つた。

『えゝ。』彼女は低聲で言つた。『私達は直ぐと罰せられましたわ。』

『罰せられた！』ラヴレツキは言つた。『何のためにあなたが罰せられました？』

リーザは眼をラヴレツキに擧げた。その眼は悲嘆をも愕きをも表はしてゐなかつた、が以前よりも小さく、臍ろげになつてゐるやうに見えた。彼女の顔は蒼かつた、そして彼女の微かにあいた唇もより蒼くなつてゐた。

ラヴレツキの心は愛と憐憫とをもつて打ち慄へた。

『あなたは私に「一切が終りました」とお書きになりました。』ラヴレツキは囁いた。『さうです、一切が終りました——まだ始まらないうちに。』

『すつかり忘れて了ふことが必要ですわ。』リーザは言つた。『私あなたがお出で下さつて嬉しうございます。私あなたに手紙を差しあげたいと思つて居りました、けれど、これの方がようございますわ。たゞ、私共は急いでこの時を利用しなくてはなりませんわ。この上は、私共はたゞ私共の義務を果すばかりでございますわ。あなたは、テオドル・イヴァニッチ、奥様と仲直りをなさらなくてはなりません。』

『リーザ！』

『私これをあなたに願ひ申しますわ。一切を……これまでのことを一切拭ひ消すことの出来るのは……これ許りでございますわ。あなたは私が……そして私のこの願ひをお拒みにはなるまいと存じますわ。』

『リーザ、それはあなた……あなたは私に不可能なことを請求されます。私はあなたが私にこれをせよと伝附けられることは何でもしようと思つて居ります。しかし「今」あれと仲直りをするといふのは……私は何事でもお伝附け通りにします。私は一切を忘れました。しかし私は私の心を強ふることは出来ません。可哀さうだと思つて下さい。それはひどいです！』



『私あなたに御要求する譯ではございません……あなたが仰しやつておいでのごことを。あの方と御一緒にお暮しになることが出来なければ、強ひてさうして下さいとは申しません。けれど仲直りなすつて下さいまし。』とリーザは答へた、そして再び片手で眼を抑へた。『小さいお兒さんの事をお考へなさいまし。私のためにさうして下さいまし！』

『ええ。』ラヴレツキは齒のあひだで言つた。『私はさう致しませう。さうすることに私の義務があると考へることに致しませう。で、あなたは？ あなたの義務は何處にあるのですか？』

『それは私存じて居りますわ。』

『あなたはもうパンシンと結婚しようとして居られるのではありませんか？』

ほとんど眼に附かないくらゐの微笑がリーザの唇に觸れた。

『いゝえ。』彼女は呟いた。

『リーザ！リーザ！』ラヴレツキは叫んだ。『どんなにか私どもは幸福に暮したでせうに！』

彼女はふたゝび彼をちらと見た。

『これであなたは、テオドル・イヴニッチ、幸福は私共のせゐではなくて、神様の思召しによるといふ事がお解りでございますか？』

『さうです、それといふのはあなたが——』

隣室の扉が遽だしく開けられた、そしてマルタ・チモファイエヴナが帽を被つて入つて来た。

『やつとの事で見つかりましたよ。』彼女はリーザとラヴレツキとの間に立ちながら、言つた。『私が自分で片付けておいたのです。年を取るとかうなのだよ、まことに厭な目に遭ふ譯さねえ。しかし、厭な目に遭ふのは、若い者だつて同じさねえ。お前さんは奥さんを連れてラヴレックへお出でかえ？』彼女はラヴレツキの方を向いて言ひ足した。

『あれとラヴレックへ？ 私が？ 私は知りません。』と彼はちよつとの間ためらひながら言つた。

『お前さんは階下へお出でかえ？』

『今日ですか——いゝえ。』

『さうかえ、行きたくなければ行かなくていゝがね、しかしリーザ、お前さんは行く必



要があるやうだね。おや、私はあの響めに食物を遣ることを忘れてゐました。さうだ、ちよつと待つておくれ。私は直ぐ……』そしてマルタ・チモファイエヴナは帽を被らずに急いで出て行つた。

ラヴレツキは足早やにリーザに近づいた。

『リーザ。』彼は嘆願するやうな聲で始めた。『私達は永久に別れようとしてゐます。私の胸は張り裂けるばかりです。さやうならを言ふためにあなたのお手を下さい。』

『いゝえ。』と彼女は言つた、そしてもう差し出してゐた手を引つ込めた。『いゝえ、ラヴレツキ。(彼女が彼をさう呼んだのはこれが初めてであつた) 私よしますわ。それが何になりませう? 行つて下さいまし、私お願い致します。私あなたをお愛して居ります。……えゝ、私あなたを愛して居りますわ!』彼女は苦しげに言ひ足した。『ですけれど、いゝえ……いゝえ。』そして彼女は手巾を肩のところに擧げた。

『少くともその手巾を私に下さい。』

扉の軋る音がした。手巾はリーザの足元に落ちて行きつゝあつた、ラヴレツキはそれが床に達しないうちに、それを掴んで、手早く胸の衣囊に突つ込んだ、そして、振り返

ると、マルタ・チモファイエヴナの眼に遭つた。

『リーゾチュカ、お母さんがお前を呼んでゐなさるやうだよ。』と老婦人は呟いた。

リーザは直ぐに立ち上つて出て行つた。

マルタ・チモファイエヴナはふたゝび隅つこのところに席を占めた、そしてラヴレツキは彼女に別れの挨拶を言ひ始めた。

『テオ。』彼女は突然言つた。

『何ですか、叔母さん?』

『お前さんは正直な人かえ?』

『どうしてですか?』

『私はお前さんは正直な人かと訊ねてゐますのぢや。』

『さうでありたいと思つてゐます。』

『ふむ。お前さんは正直な人だといふことを約束して下さい。』

『それはいゝです。しかし何ういふ譯ですか?』

『その譯はね、私は知つとりません。さうです、そしてお前さんも私が育てた兒だ、よく考



へてみなされば——お前さんは頭の鈍い人ではないからね——どういふ譯で私がかういふ事を訊ねるかお解りだらう。それでは、さやうなら、私の大事の兒や。私を訪ねて下さつて有難うよ。お前さんの約束をお忘れでないよ、テオ、そして私に接吻しておくんなさい。私はお前さんの荷がどれ程重いものか知つて居ます、そして誰れにでもそれは軽いものではありません。その爲に私はいつも蠅といふものを美ましく思つたものだ。この世に住んで仕合せなのはあゝいふ生物だらう、と私は考へたものだつたよ。すると或る晩私は一羽の蠅が蜘蛛の爪に捉まつて唸つてゐる聲を聞きました。いゝや、と私は考へました、彼等にも彼等相應の恐怖といふものがあるとな。全體どうすればよいのかねえ、テオ？　だが兎に角お前さんの約束をお忘れでないよ。さあ、おいでなさい！」

ラヴレツキは裏口から出て行つた、そしてもう表の門に近づいたころ、召使の男が彼に追つ附いた。

『マリイ・ドミトリエヴナが、あなた様にお出でを願つて来るように申されました。』と彼はラヴレツキに言つた。

『かう言つて下さい、兄弟、私は今日はお訪ねする譯には参りません……』テオドル・イ

ヴニッチは言ひ始めた。

『是非ともお出でを願ふようにと申すことでございました。』召使の男は續けた。『先達てはまことに失禮致しましたから、今日は是非ともお目に掛りたいと……』

『それでは、お客は歸つたのだね？』ラヴレツキは訊ねた。

『さやうでございます、旦那様。』と男は答へた、そして微笑んだ。

ラヴレツキは肩を揺つた、そして彼の後に従つた。

### 四十三

マリイ・ドミトリエヴナは一人で自分の部屋に、ヴォルテール型の肱掛椅子に掛けて、オー・ド・コロンを嗅いでゐた、そして橙花水のコップが彼女の傍の小さな卓子に立つてゐた。彼女は昂奮してゐた、そして少し怕がつてでもゐる様子だつた。

ラヴレツキは入つて行つた。

『あなたは私にお會ひになりたかつたさうで。』と彼は言ひ乍ら、鯨こぼつて頭をさげた。



『ええ。』マリイ・ドミトリエヴナは答へた、そして少し水を飲んだ。『私あなたが真直ぐ叔母のところへ行かれたことを聞きました、で、私のところへも来て下さるようにお願ひさせましたのです。私あなたにお話したいことがありますね。お掛けなさいまし、何卒。』マリイ・ドミトリエヴナは長い息を吸ひ込んだ。『あなたは御存知ですね、』彼女は續けた。『奥さんが來られたことを。』

『それは私にも知れてゐます。』とラヴレツキは言つた。

『さう、それで——つまり私は奥さんが私のところへ來られてそして私があの方をお迎へしたことを申したいのです。でその譯をあなたに聞いて頂きたいのです、テオドル・イヴァニッチ。神様のお蔭で、私は自分の口から言つちや何ですが、皆さんの尊敬に値してゐます、で、決して間違つたことはしない積りです。あなたには氣持のよくない事だとは思ひましたけれど、私としてはどうしてもあの方をお迎へしない譯にはゆきませんでした、テオドル・イヴァニッチ。あの方はあなたを通して私の親戚ですもの。まあ私の立場に立つて御覽なさい。私にあの方をお入れしないどんな權利がありましたでせう？ あなた、私の申すことを賛成して下さい？』

『あなたは無益に心配して居られますよ、マリイ・ドミトリエヴナ。』ラヴレツキは答へた。『あなたの爲すつたことは、少しも間違つて居りません。私は少しも立腹などして居りません。私はバルバラ・パウロヴナから、彼女の友人を奪ひ取らうなぞいふ考へは毫もありません。私が今日あなたのところへ上らなかつたのは、あれに會ひたくなかつたからです——それつきりです。』

『まあ、それをあなたのお口から伺ふのはどれほど嬉しいこととせう、テオドル・イヴァニッチ！』マリイ・ドミトリエヴナは叫んだ。『ですけれど、私あなたのいつもの高尚なお考へに照してちつとも不思議には思ひませんわ。そして私が昂奮してゐますのも、それも驚くには當りませんわね。私は女だしそれに母親ですもの。そしてあなたの奥さんは……たしかに、私あの方にもお話したのですけれど、私はあなたとあの方との間を裁くことは出来ません。ですけれど、あの方は大層愛想のいゝお方で、決して他人ひとに厭いとな氣持などお與へになることなぞありませんわね。』

ラヴレツキは笑つた、そして自分の帽子をもてあそんでゐた。

『そしてこれも私あなたにお話し致したいのですがね、テオドル・イヴァニッチ。』マリイ・ド



ミトリエヴァは少し彼の方へ軀をにじらせながら、續けた。「もしもあなたがあの方の慎ましやかな、恭々しい御様子を御覽になつたらば——本當にそれは見てゐていぢらしくなるほどでしたよ——そしてあの方がどんな風にあなたの事をお話になつたか、それを聞かれたらば！」「私は良人ヤドに對して凡ゆる點で罪があるのでございます。」とかうあの方は言はれたのですよ。「私はあの人ヤドの美點が、十分に解らなかつたのでございます。」つてね。さう仰しやつた時あの方の御様子は本當に天使でした、人間ぢやありませんでした。本當にさう言はれたのですよ——天使ですよ。あの方はそれ程までに悔い改めてゐらつしやるのです……私あんな心からの悔改めといふものを見た事がありませんわ！」「しかしですね、マリイ・ドミトリエヴァ。」ラヴレツキは言つた。「氣難かしい質問をして御免下さい。バルバラ・パウロヴナは歌を歌つたさうですね。そんなに罪を悔いて居るものが……それとも、どういふのですか？」

『まあ、あなたはそんな事を仰しやつてどうして恥しくありませんの？ あの方はたゞ私を喜ばせる爲にお歌ひになつたんぢやありませんか。私がほとんど命令でもするやうに、執つこく願ひしたからですよ。私あの方の御境遇がどんなに苦しい、どんなに困

難なものだかが解りました。「どうすれば、此方のお苦しみを軽くしておあげする事が出来るようか？」とさう私考へました。それに、私あの方が實に立派なお腕前だといふ事を聞いてゐたものですからね。可哀さうだと思つておあげなさいよ、テオドル・イヴァニッチ。あの方はまつたく打碎かれてゐらつしやるのです——ギデオノヴスキにも訊いて御覽なさい——碎かれたる女ですよ。Font-a-Taille(本當に！)あなた如何です？」

ラヴレツキはたゞ肩を揺つたばかりであつた。

『そしてそればかりでなく、あなたはアダといふあんな可愛い天使をお持ちぢやありませんか！ あの兒はまあ本當にチャーミングな、綺麗な、惻巧な兒ですことねえ！ あの兒のフランス語の話し工合つたら！ そしてロシア語もよく知つてゐて、私のことを叔母ちゃんママなんて言ふんですよ。あの年頃の小兒は、大概はにかむものですが、あの兒だけはちつともそんな所がありませんね。それにあなたによく似てゐること！ テオドル・イヴァニッチ、まつたく吃驚する程ですよ。眼から、眉から——あなたそつくりですわ。私は本當いへば、あゝした小兒は餘り好かない方ですけど、あなたの小兒には譯もなく惚れて了ひましたよ。』



『マリイ・ドミトリエヴナ。』ラヴレツキは唐突に言つた。『失禮ですが、どういふ譯であなたはかういふ事を私に言はれるのですか？』

『どういふ譯で？』——マリイ・ドミトリエヴナはまたもやオー・ド・コロンを嗅いで、水を一杯飲んだ——『かういふ譯ですよ、テオドル・イヴァニッチ、私がお喋りしてゐますのは……私はあなたの親戚です、ね、で、私はあなたに深く興味を持つとります。私はあなたが至極く深切な心を持つておゐるのを知つてゐます。私の言ふことをお聴きなさい。私は何と言つても経験のある女です。私空虛な事は申しません。赦しておあげなさい——赦しておあげなさい、あなたの奥さんを。』マリイ・ドミトリエヴナの眼は突然涙で一ぱいになつた。『考へ直しておあげなさい——若さ、無経験、それに、悪い例を見せられてゐたかも知れませんが——あの方はあの方を正しい道においてあげるやうなお母さんをお持ちぢやなかつたのです。あの方を赦しておあげなさい、テオドル・イヴァニッチ。あの方はもう十分に罰せられてをります。』

涙がマリイ・ドミトリエヴナの頬を滴り落ちてゐた。彼女はそれを乾さなかつた。彼女は泣くことを愛した。

ラヴレツキは針の上に坐つてるやうな氣持であつた。吾が神よ！』彼は考へた。『どうしてこんな苛責を受けなきやならんのか？ 今日はまだ何といふ日だらう？』

『あなたは返事をしませんね。』マリイ・ドミトリエヴナは、また始めた。『どうも私には解りませんよ。どうしてあなたはそんなにあの方に對して厳しくなさるのでせうねえ！ いゝえ、私さう思ひたくありませんわ。私わたしの言葉があなたを説き伏せたやうな氣がします。テオドル・イヴァニッチ、神様があなたの御深切に對してあなたに報いを與へて下さいますよ。私の手からあなたの奥さんをお受取りなさいまし……』

ラヴレツキは思はず椅子から立上つた。マリイ・ドミトリエヴナも立ち上つた、そして急いでスクリーンの蔭に行つて、蒼ざめて、今にも死にさうな様子をした、俯目になつたバルバラ・パウロヴナを連れて歸つて來た。彼女はあだかも彼女自身のあらゆる思念、あらゆる感情を打ち棄て、只管マリイ・ドミトリエヴナの手に自分を打委せてゐるかのやうに見えた。

ラヴレツキは一足後へ退つた。

『お前がこゝに居つたのか！』



『この方を非難なさらないで、』マリイ・ドミトリエヴナは急いで言つた。『この方はどうしても此處に居りたくないと言つたのです、けれど私が御命令したのです。私この方をスクリーンの背後うしろに隠しておきました。この方はそんなことをすればあなたの御立腹が一層増す許りだと言はれました。私は聞き入れませんでした。私はこの方よりあなたのことをよく知つて居ります。あなたの奥さんを私の手からお受取りなさいまし。バルバラ、怕がることはありません。あなたの夫の前にお跪きなさい。』(彼女はバルバラの腕を曳いた。)——『そして私の祝福は……』

『止めて下さい！ マリイ・ドミトリエヴナ。』ラヴレツキは鈍い、しかし昂奮した聲で遮つた。『あなたは、多分、感傷的なお芝居がお好きなんでせう。(ラヴレツキは間違つてゐなかつた。マリイ・ドミトリエヴナは學校時代からこの方今に到るまで、お芝居じみたことに熱情を持つてゐた。)』それはあなたには面白いでせうが、他の人間には餘り適しません。しかし、あなたには何も申すまい、この芝居を仕組んだのはあなたではありません。お前は私から何が欲しいのだね、奥さん？』彼は妻の方を向いて言ひ足した。『私はお前の爲に既に、出来るだけの事をしたぢやないか？ この芝居を仕組んだのはお

前ではないと私に言ふことは止しなさい。私はお前を信じないだらう、またお前も私がお前を信じることの出来ないのを知つてをる。お前は伶俐な女だ、お前のすることには一々何か魂膽があるのだ。お前は私が以前のやうにお前と一緒に暮すことの出来ない状態にあることを知らなくてはならん。それは私がお前に對して立腹して居るからではない、私が別の人間になつたからだ。私はお前が歸つて來た翌日、お前にこの事を話した、そしてお前もその時心の中では私に同意したのだ。だがお前は世間に對してお前自身を飾り立てたいのだ。お前は私の家に住むばかりでは満足出来ない。お前は私と一つ屋根の下に住みたいのだ——さうではないか？』

『私あなたから赦して頂きたいのでございます。』と、バルバラ・パウロヴナは眼を擧げないで言つた。

『この方はあなたから赦して貰ひたいのですよ。』とマリイ・ドミトリエヴナは繰返した。

『そしてそれは私自身のためでなく、アダのためでございます。』とバルバラ・パウロヴナは囁いた。

『この方御自身の爲ではなく——あなたのアダのためですよ。』マリイ・ドミトリエヴナ



は繰返した。

三三六

『成る程。お前はそれを願ふのか？』とラヴレツキはやつとの思ひで言つた。『それならばそれでよろしい。私はそれに同意する。』

バルバラ・パウロヴナは彼にサツと迅い眸を投げた。マリイ・ドミトリエヴナは『神様のお蔭です！』と叫んだ、そしてまたもやバルバラ・パウロヴナの腕を引つ張つた。『この方を私からお受取り下さいまし——』

『お待ちなさい！ あなた方に言つておく事があります。』ラヴレツキは遮つた。『私はお前と一緒に住むことに同意する、バルバラ・パウロヴナ。』と彼は續けた——『といふのは、私はお前と一緒にラヴレークへ行つて、私の力の續くかぎりお前と一緒に暮すことにしよう。それから私は行つて了はう——そしてお前に會ひにも行かう。お前の見る通り、私はお前を騙したくないのだ。でお前も私からこの上何事も要求してくるな。もしも私が吾々の尊敬すべき親戚の希望を容れて、お前を私の胸に抱き締め、もう過去は無かつたと同様だ、仆れた樹には再び花が咲くだらうといふ風な事を言ふならば、お前自身が笑ふに相違ない。だが今になつて私は了解した。服従することが必要なのだ。これは

お前には解るまい——しかし今はそれを言つてゐる時ではない。繰返して言ふが、私はお前と一緒に住むことにしよう……それとも、いや、私はそれを約束することは出来ない。私はお前と仲直りが出来るやうになりたい、私はお前をもう一度私の妻として認めたい。』

『少くともその約束の印として、あなたのお手をこの方にお上げなさいよ。』とマリイ・ドミトリエヴナは低聲で言つた。彼女の涙はもう夙くに乾いてゐた。

『今まで私はバルバラ・パウロヴナを騙したことはありません。』とラヴレツキは答へた。『ですから、彼女は私を信ずるでせう。私は彼女と一緒にラヴレークへ行きますせう。そして忘れてはいけない、バルバラ・パウロヴナ、私達の約束はお前がラヴレークを立去ると同時に破れるのだからね。それでは、これで私は行かして貰ひます。』彼は二人の婦人に頭をさげて、急いで部屋を去つた。

『あなたはこの方を一緒にお連れにならないの？』マリイ・ドミトリエヴナは彼の背後から呼び掛けた。

『行かせなさいよ。』バルバラ・パウロヴナは囁いた、そしてそれと同時に彼女を抱擁し、



彼女に感謝し、彼女の手に接吻し、彼女を自分の救主と呼んだ。

三三八

マリイ・ドミトリエヴナは甘んじて彼女の愛撫を受けてゐた。そして心の底ではラヴレツキにも、バルバラ・パウロヴナにも、彼女の工夫になるこのお芝居にも、不満を感じてゐた。感情の見せられ方があまりに少なかつた。バルバラ・パウロヴナは、彼女の意見によれば、夫の足下に身を投げ伏すべきであつたのだ。

『どうしてあなた私の言つた事がお解りにならなかつたの？』と彼女は論じた。『私あなたにあの人の足元にお倒れなさいつて言つたぢやありませんの？』

『あの方がよかつたのですよ、叔母さん。そんなに昂奮なさらなくて頂戴——すつかりうまく行きましたわ。』とバルバラ・パウロヴナは彼女をなだめた。

『え、そしてあの人は……氷のやうに冷たいのねえ。』マリイ・ドミトリエヴナは言つた。『でもあなたは泣かなかつたのね、私あの人の前で泣きましたよ。あの人はあなたをラヴレックへ閉ぢ籠めておく積りですね。私のところへ来て下さることすら出来ませんわ。男といふものは皆な、感情といふものを持たないんですよ。』彼女は結論としてかう言つた、そして意味ありげに頭を頷かせた。

『それだから、女には深切や高尚な心の価値が解るのですわね。』とバルバラ・パウロヴナは口の中で言つた。そして無言のまゝ靜かにマリイ・ドミトリエヴナの前に跪きながら、彼女は兩腕を彼女の肥つた軀のまはりに廻して、自分の顔を彼女の胸に押しつけた。その顔は狡く微笑つてゐた、そしてマリイ・ドミトリエヴナの頬にはまたもや涙が滴りつゝあつた。

ラヴレツキは家に歸つた、執事の部屋に閉籠つて、長椅子の上に身を投げた、そしてそこに彼は朝まで居た。

#### 四十四

翌日は日曜であつた。ラヴレツキは夜つびて眼を閉ぢなかつた、で早朝の彌撒に呼ぶ鐘の音は彼を眼覺さなかつた。けれども彼はいつかの日曜を、彼がリーザの希望によつて教會に行つたあの日曜を、思ひ出した。彼は急いで起き上つた。ある祕密の聲が彼に、彼は今日またそこで彼女に會ふだらうと囁いた。バルバラ・パウロヴナに——彼女はまだ



眠つてゐた——彼が食事に戻つて来る事を言ふやうに召使の者に伝付けておいて、こつそりと彼は家を出た、そして單調な悲しい響きが彼を招いてゐる處へ向つて、大股に歩いて行つた。

彼が教會に來たのは早かつた。それはほとんど空虚であつた。執事が内陣で祈禱書を讀んでゐた。彼の聲は低まつたり、膨らんだり、そして時々咳でもつて遮られながら、調子よく續いて行つた。

ラヴレツキは入口の近くに立つた。お詣りの人達が一人々々入つて來て、ちよつとの間立ち止つて、十字を切つて、神龕に向つて頭をさげた。彼等の登音は空虚な教會ぢうに、寂黙のうちに鳴り響き、はつきりと穹窿に反響した。ひどく磨りきれた外套を着、頭巾を被つた一人の弱々しい老婆がラヴレツキの傍に跪いて、熱心に禱りを上げてゐた。彼女の齒のない、黄色な、皺だらけの顔は深い感動を言ひ表してゐた、彼女の赤くなつた眼は祭壇の前の帷幕に描かれた聖像をしつかりと振り仰いでゐた、彼女の骨つばい手は幾度も幾度も彼女の外套の下から出て來た、そして彼女は深い、大きな動作でもつて、徐ろに、感情を籠めて十字を切つた。亂れもつれた、濃い鬚髯と悲しげな顔附とをもつ

た一人の百姓が會堂に入つて來た。彼は直ぐさま跪いて、古風な辭儀をしてはその都度頭を後ろに反らして振りながら、十字を切つた。彼の顔も動作も悉く非常に苦しい悲嘆を物語つてゐた、でラヴレツキは到頭彼のところに行つて、何事がそんなに彼を惱ましてゐるのかと訊ねた。農奴はおぶおぶと無様に身を退いて、彼を眺め、それから短く「彼が死にやした。」と言つた、そして又もや頭を下げ十字を切りはじめた。

『彼等にとつては、』とラヴレツキは考へた。『教會に代る慰藉はないのだ。』さうして自分も禱らうとした、けれども彼の心は重苦しく、頑になり、彼の思想は遠くへと彷徨うて行つた。彼はリーザを待つてゐた、けれど彼女は來なかつた。教會には人數が殖えた、それでもやはり彼女は見えなかつた。彌撒は始まつてゐた、執事はもう福音書を讀んでゐた、鐘は儀式の爲に鳴り始めた。ラヴレツキは少し前の方に動いた——すると突然リーザの姿が見えた。彼女は彼よりも先に來てゐたのであつた。彼女は内陣と壁とのあひだの少し空いたところに跪いてゐたので、彼は氣がつかかなかつたのであつた。彼女は見廻さなかつた、身動きもしなかつた。

ラヴレツキは彌撒が済むまで彼女から少しも眼を離さなかつた。彼は彼女に永の訣れ



を告げてゐたのである。人々は立去りはじめた。彼女はラヴレツキの行くことを待つてゐるかのやうであつた。到頭彼女は最後の十字を切つた、そして四邊を見廻しもせず、伴をしてきた女中をつれて立去つた。

ラヴレツキは教會を出て彼女の後に従つた、そして街で追附いた。彼女は頭を垂れ、ヴェールを顔の上にひいて、急いで行つた。

『御機嫌は如何です、エリザベス・ミカエロヴナ？』とラヴレツキは強ひて胸を落着かせながら、聲高に言つた。『私御一緒に行つて構ひませんか？』

リーザは何とも言はなかつた、で彼は彼女の傍を歩いた。

『あなたは、私の致したことに御満足ですか？』彼は聲を低めながら訊ねた。『あなたは昨日の出来事をお聞きになつたでせう？』

『えゝ、えゝ。』彼女は囁くやうに言つた。『あれでようございますわ。』そして彼女は一層速く歩いた。

『あなたは御満足ですか？』

リーザはたゞ頭を頷かせた許りであつた。

『テオドル・イヴァニッチ。』彼女は落着いた、しかしか弱い聲で始めた。『私お願い致しますわ、もう此の上私共のところへお出で下さいませぬように。出来るだけ直ぐお立去り下さいまし。私達は後になつてお會ひ出来ませうでせう——いつか、一年も経つて。ですけど只今はあなた私の爲にこれをなすつて下さいまし。神様の爲にこのお願いを聴き入れて下さいまし。』

『私は何事でもあなたのお吩咐通りに致します、エリザベス・ミカエロヴナ。しかし私達がこんな風にお別れするといふ事があり得ませうか、あなたから一言も言つて頂けないといふ事があり得ませうか？』

『テオドル・イヴァニッチ、あなたは只今こゝに、私の傍に居られます、けれどももうあなたは私から遠く離れてゐらつしやるのです、そしてあなた許りでなく——』  
『言つて下さい、お願いです。』ラヴレツキは叫んだ。『あなたは何を言ふお積りだつたのです？』

『あなたはお聞きになるでせう、私は……ですけれど、どういふ事になりましたも、忘れて……いゝえ、私をお忘れ下さいませぬように、あなたの御記憶のなかに私をお置き



下さいまし。』

『私が、あなたを忘れる？……』

『もうようございます、さやうなら。この上私と一緒ににお出で下すつてはいけません。』

『リーザ……』ラヴレツキは言ひ始めた。

『さやうなら、さやうなら。』彼女はヴェールを一層低くひき下しながら繰返した、そして殆んど駈けるやうにして、先へ急いだ。

ラヴレツキは眼でもつて彼女を見送つた、それから頭を垂れて街を引返した、そしてすんでの事にレムに衝き當らうとした。レムも帽子を鼻の上まで引き下して、足下を見詰めて歩いて來たのであつた。

彼等は黙つて顔を見合せた。

『それで、あなたは何と言はれますか？』とラヴレツキは到頭呟いた。

『私が何と言ひますか？』レムは、悲しげに答へた。『私は何も言ひません。一切が死にました、そして私共も死にました。君は右の方へ行かれますか？』

『右の方へ行きます。』

『私は左の方です。さやうなら。』

翌日、ラヴレツキは妻と共にラヴレークへ向つて出發した。彼女はさきへアダとジュスチーナと一緒に馬車で行つた。彼は後からタランタスで行つた。旅行の間すつと可愛い少女は馬車の窓に離れなかつた。あらゆる物が彼女にとつて驚異に充ちてゐた——農奴共も年寄つた女共も井戸も、馬に附けられた小さな鈴のついた丈の高いアーチ形の轡も、數限りない大鴉の群も。そしてデュスチーナも彼女の驚きを頷つた。バルバラ・パウロヅナは兩人の言ふ事や驚きの叫びを聞いて笑つた。彼女は元氣であつた。〇町を去る前に彼女は夫の辯明を聞いた。『私、あなたのお心持が解つて居りますわ。』と彼女は言つたのであつた、そして彼女の聰明な眼に表れた表情によつて、彼は彼女は一切を了解してゐるのだと云ふ結論を下すことが出來た。『ですけど、私が樂に暮せるだけの事は私に許して下さいまし。私あなたを縛り付けておかうとか、あなたの爲さる事に干渉しようとかいふ考へはありませんわ。私アダの未來を確かにしておきたいのです——それ以上の事は何も要求しませんわ。』

『それでお前はお前の目的を達した。』とテオドルは言つた。



『私只今はもう唯一つのことを夢みる許りですわ——それは田舎の奥に自分を閉ぢ籠めて了ふことです。私いつまでもあなたのお情けを忘れは致しません——』  
『澤山だ。』ラヴレツキは遮つた。

『そのうちに私はあなたの獨立とあなたの平和とを尊敬する道が解りますわ。』と彼女は言ひ足した。この文句は前以て準備されてあつたのである。

ラヴレツキは彼女に深く頭をさげた、そしてバルバラ・パウロヴナは彼が心の底で自分に感謝してゐることを了解した。

二日目の夕刻に、彼等はラヴレークに着いた。一週間経つてラヴレツキは、妻の費用として五千留を遺しておいて、モスコオに發つた。

さうしてラヴレツキが發つた翌日、パンシンが現れた。彼にバルバラ・パウロヴナは孤獨な自分を忘れてくれないようにと頼んでおいたのである。彼女が彼に與へたほどの歡迎を受けた者は嘗てあるまい、そしてその夜おそくまで、家の高い部屋々々や庭園そのものまでも、唄やピアノの音や華かなフランス語の話聲でもつて鳴り響いた。  
パンシンは三日の間バルバラ・パウロヴナの客になつてゐた。そして彼女に別れを告げ

た時、彼は熱烈に彼女の兩手を握つて、直きまたラヴレークへ歸つてくることを約束した——そして彼はその約束を果した。

#### 四十五

リーザの部屋は二階のあまり大きくない部屋で、小さな白い寢臺や書物卓を以て、隅々と窓の前とに置いた草花の鉢植えや、書物や、それから壁上の十字架を以て、白く明るかつた。この部屋は小兒部屋と呼ばれてゐた、そしてリーザはこゝで生れたのであつた。

彼女は教會から歸ると、部屋ぢうをいつもより一層注意深く整理し、あらゆるものに塵拂きをかけ、手帖類や友達から來た手紙を残らず吟味して、リボンでもつて縛り、抽斗を残らず閉め、そして草花の一つ一つにさも可愛げに觸つてみては、水をやつた。彼女は急ぎもせず、音も立てず、やさしいそして穩かな不安を顔に湛へながら、これ等すべてをした。到頭彼女は部屋の眞中に立つて、徐ろに四邊を見廻した、そして上の壁に十字架の懸つてゐる卓子のところへ行つて、彼女は靜かに跪き、組み合せた手の上に頭



を載せて、ちつとしてゐた。

マルタ・チモフ、イエヅナが入つて来て彼女のこの様子を見た。リーザは彼女の入つて来たのに気がつかなかつた。老婦人は爪先立ちで出て行つて、扉の外で五六度聲高に咳拂ひをした。リーザは急いで立上つて、流れざる涙が明るく輝いてゐる眼を拭いた。

『お前さんはまたぞろお前さんの巢を片づけましたね。』マルタ・チモフ、イエヅナは一本の若い薔薇の上に屈み込みながら呟いた。『これは本當に良い香りだことねえ。』

リーザは考へ深い眼附で叔母を眺めた。

『何でございますの、あなたの仰しやつた事は？』と彼女は囁いた。

『何でございます？ どちらが？』老婦人は峻しい聲で言つた。『お前さんは何を言ひたいのだえ？ これは怖ろしい事だよ！』彼女は帽を投げ出してリーザの臥床に腰を下しながら叫んだ。『私はどうしても辛抱がなりません。私はもう四日といふもの大鍋のなかで煮られてゐるやうな気がします。私はもう何も気がつかないふりをしてゐる譯にはゆきません。私はお前さんが段々蒼くなつて、軀が縮こまつて、泣いてゐるのを見てゐる譯には行きません——どうしても出来ません。』

『どうしましたの、私の大きな叔母さん？』とリーザは言つた。『何にも——』

『何にも！』マルタ・チモフ、イエヅナは叫んだ。『さういふ事は他の人に言ひなさい、私に言つても駄目です。何が「何にも」です？ 今十字架の前に膝をついてゐたのは誰ですか？ 睫が未だに涙でもつて光つてゐるのは誰ですか？ 何にもだつて！ さう、お前さん自身を見て御覽！ お前さんは自分の顔に何をしたのだえ？ お前さんの眼は何處へ引つこんで了つたのだえ？ 「何にも！」私が残らず知つてゐないといふ譯がありますかえ？』

『そのうちによくなりますわ、叔母さん。たゞ時間をお與へ下さいまし。』

『そのうちによくなります？ 何時になればね？ お、神よ、わが主よ！ お前さんはまああの男をそれほど愛してをるのかねえ、あの年寄りを？ リーゾチュカ？ しかしあの男が善い人間で、人を噛まないといふ事は、それは私もさう思ひます。しかしそれが何ですか？ 私達はみな善い人間です。世界は廣くつてどういふ事でもありません、そしてさうした善良さといふものも澤山にあるのです。』

『みんな過ぎて了ひますよ、叔母さん——みんなもう過ぎて了ひましたわ。』



『お聴き、リーゾチュカ、私お前さんに話があります。』マルタ・チモファイエヴナは突然言つて、リーザを寢床の上に、自分の傍に坐らせた、そして彼女の髪や、衿卷の工合を直しながら、『お前さんは、お前さんの悲みから逃れ出るのは到底出来ないことだと思つて居るやうだけれどね、逃れる道のないのはたゞ死といふもの許りだよ。たゞお前さん自身に向つて、「私は決して負けやしない」と言つて御覽、さうすれば、お前さんは後になつて、それが譯もなく何處へか行つて了つたことに吃驚するだらうよ。たゞ辛抱が肝腎だよ。』

『叔母さん。』リーザは答へた。『それはもう過ぎて了つたのですよ——すつかり過ぎて了つたのですよ。』

『過ぎて了つた？ どうして過ぎて了つた？ 現にお前さんの小さな鼻は尖つて來てゐるぢやないかね、それでもお前さんはそれは過ぎて了つたとお言ひなんだね！』

『え、過ぎて了りましたのよ、叔母さん、もしもあなたが私を助けて下さるならば。』とリーザは、マルタ・チモファイエヴナの頸の周圍に兩腕を置きながら、突然の興奮をもつて言つた。『叔母さん、私のお友達になつて頂戴、私を助けて頂戴。御立腹なさらないで

——私を解つて頂戴。』

『それはどういふ事なんだね？ え、どういふ事なんだね、お前さん？ 私を怕がらせないでおくれ、どうぞお願いだから。氣をおつけでないと、私喚き出しますよ！ そんなに私を見ないでさ！ 早く言つておくれ、どういふ事なんだえ？』

『私——私あの……』——リーザはマルタ・チモファイエヴナの胸に顔をかくした。——『私修道院へ行きたいのです。』と彼女は低聲で言つた。

老婦人は弾かれたやうに寢臺から跳び上つた。

『お前さん、十字をお切りなさい、リーゾチュカ！ お前さんは自分を知らないのだよ。どうしたのかえ、一體？……神様がお前と一緒に居て下さるやうに！』彼女は到頭噎れた聲でかう言つた。『横におなり、お前。少し眠るといゝ。眠りの足りないせゐだよ、私の可愛い娘や。』

リーザは頭を擧げた。彼女の頬は燃えてゐた。

『いゝえ、叔母さん。』彼女は言つた。『そんな風に仰しやらないで、何卒。私覺悟をきめました、私お禱りしました、私神様に御相談致しました。一切がお終ひになりました、



私があなたと御一緒に暮すことはもうお了ひですわ。かういふ教訓は偶然の出来事ではありませぬわ。かういふ事を考へますのは私初めてではありませんの。幸福は私に來ませんでした。私が幸福の希望を持ちました時も、私の心は後退り致しました。私すべてを知つて居ります、私自身の罪や、私の外にある罪や、またどんなに私の父が富を蓄へたかといふ事を、私一切を知つて居りますわ。これをすつかり償ふためには、お禱りが必要ですわ。あなたにお別れして行きますのは、母やレナにお別れして行きますのは、私苦痛ですけれど、外に仕様がなないので。私わたしの生活は此處にはないやうな氣が致します。私もうすべての物に別れの挨拶を致しました、家ぢうのすべてのものに最後の挨拶を致しました。何物かが私を他處へ呼ぶのでございます。私それに疲れて了ひましたの、私他處へ行つて永久に自分を閉ち籠めて了ひたいと思ひますの。私を止めないで頂戴、私を説き伏せようとなさらないで頂戴。私を助けて頂戴、さうでなければ私一人で行かなくてはなりませんわ。』

マルタ・チモファイエヅナは、畏怖をもつて姪の言ふことを聞いた。『この娘は病氣なんだ、この娘は謙言を言つてゐるのだ。』と彼女は考へた。『醫者を呼びにやらなけりやあな

るまい。どの醫者を呼ぼう？ ギデオノヴスキが最近誰れかを褒めて居たつけ。あの人はいつでも嘘を吐くけれど、今度は多分本當かも知れない。』

しかし彼女がリーザは病氣でもなく、謙言を言つてゐるのでもないとしつかり解つた時——あらゆる彼女の抗議に對して、リーザが絶えず同じ返事でもつて答へた時——マルタ・チモファイエヅナは心の底から驚き悲しんだ。『だがお前は知らないのだよ。』彼女はリーザを説得しようとした。『修道院の生活といふものはどういふものだか、お前は解りぢやないのだ。修道院ではお前、お前の宛てがはれる食物といへば緑色の麻油で、着る物といへば此上もない粗末な木綿着物なのだよ。そして寒中に戶外へ追ひ出されるのだよ。さういふことは到底もお前に辛抱の出来る事ではないよ、リーゾチュカ。お前さんのなかにはアガフアの影響が残つてゐるのだねえ、お前さんの心をひつくら返したのはあの女さ。だがね、あの女は最初十分に生きたのさ、あの女は自分の樂みのために生きました。お前さんも生きなさい。少くとも私を平和に死なしておくれ、それからお前さんの好きなことをしておくれ。だけどまあ滅多に聞かれない事だねえ、かうした理由で——あんな山羊髯どんの爲に——尼寺に入るなどと言ふのは。だが生きてゐるのが厭な



らば、氣を取り直して、聖者様達に御祈禱をするなり、謝恩讃歌テリヂイウムを唱はせるなりなさが  
がい、たゞ黒の縁無し帽ボンネットを頭に載せることだけは、止めておくんなさい。』そしてマル  
タ・チモファイエヴナはひどく泣いた。

リーザは彼女を慰撫なだめ、彼女の涙を拭き取つた。そして自分も泣いたけれど、考へは  
依然として揺がなかつた。必死となつたマルタ・チモファイエヴナは、母親に残らず言つ  
て了ふと威嚇してみたが、これも利き目がなかつた。たゞ老婦人の退引のりひきならぬ哀訴の  
結果、リーザは六ヶ月間彼女の決心を實行することを延期した。そしてその代りに、マ  
ルタ・チモファイエヴナは、もしもこの六ヶ月のうちにリーザがその計畫を棄てなかつた  
ならば、彼女の方から進んでマリイ・ドミトリエヴナの承諾を得ることについてリーザを  
助けるといふ約束をさせられた。

\*

\*

\*

\*

\*

冬の最初の徴候と共にバルバラ・パウロヴナは、田舎の奥に埋もれて暮すといふ約束を  
無視して、相應の金を準備してペテルブルグに出た、そして其處に慎つゝしやかな、けれど  
綺麗な住居を借りた。それはパンシンが彼女のために見つけたもので、彼はその時分、

もう〇町の官廳を去つてゐた。彼が〇町に住んだ後半期のあひだに、彼はすっかりマリ  
イ・ドミトリエヴナの御機嫌を損じてしまつた、彼は突然彼女を訪ねることを止めた、そ  
してほとんどもうラヴレークを去らなかつた。バルバラ・パウロヴナは彼を奴隸にして丁  
つた——適確に奴隸にして丁つた——彼に對する彼女の無際涯の、動かし難き、絶對の  
權力を言ひ現すべくどんな他の言葉を以てするも不可能である。  
ラヴレツキはモスコオで冬を過した、そして翌年の春、リーザがロシアの最も遠い國  
境の一つに近い修道院に入つたといふ報知が彼の下に達した。

## エピソード

八年過ぎた。ふたゝび春が近づきつゝあつた。しかし、吾等はまづミカエライヴィチ  
の、パンシンの、ラヴレツカ夫人の運命について少し言つて、そして彼等に別れること  
にしよう。

ミカエライヴィチは、長い放浪の後に、やうやう彼の眞の地位にありついた。彼はあ



る縣の實習學校の上級監督官に任命せられた。彼は自分の運命にひどく満足した。そして生徒達は彼を戯弄つたけれども、また崇拜もした。

パンシンは一步一步、目覺しい速さで昇進した、そしてもう一長官の地位を占めてゐる。彼はやゝ前屈みになつて歩く、多分それは彼の頸の周圍にかゝつてゐるヴラジミル十字章の重みのためであらう。彼の中のお役人が決定的に藝術家の方を壓倒した。彼の未だに若々しく見える顔は黄色くなつた、彼の頭髮は淡くなつた、そして彼はもう歌やスケッチはやらない。がこつそり彼は文學に身を入れてゐる。彼は「諺草」といつた風の小喜劇を書いた。——そして當今文筆道樂の連中が誰かしらを捉まへてその棚下しをするやうに、彼もそのなかで或る男溺しの女のことを書いた、そしてそれを彼に好意を寄せてゐる二三の婦人に讀んで聞かせた。不思議なことには、多くの好い機會があつたにかかはらず、彼は決して結婚しなかつた。これにはバルバラ・パウロヴナに罪がある。

この婦人は、以前のやうに、絶えずパリに住んでゐる。テオドル・イヴァニッチは巨額の手形を彼女に與へて、又もや不意に彼女から襲はれないやうに用心をした。彼女は年が寄つて一層がつしりして來たが、依然として綺麗で嫺雅かなところがある。人として自

分の理想のない者はない。バルバラ・パウロヴナは彼女の理想を小デュマの戯曲のうちに見出した。彼女は精出して劇場に通ふ——肺病やみの、感傷的な椿姫が上演される劇場に。そしてドッシュ夫人であることが彼女には人間的幸福の絶頂であるやうに思はれてゐる。彼女は一度、彼女の娘のためにこれ以上の運命を希はないと言つた。人は運命がアダ嬢をさうした幸福から救ふであらうことを希望しなくてはならない。薔薇色の頬をした、むつくり肥えた小兒であつたアダは、胸の弱い、蒼白い、今からもう神経のだれた娘になつてゐる。

バルバラ・パウロヴナの崇拜者の數は減つた、が絶無にはなつてゐない。彼女はおそらく生涯の終りまで二三人を取止めるであらう。現在の崇拜者のうち最も熱心なのはザクールダロッシュルーピリンコフといふ並外れて立派な體格をした、三十八歳の退役士官である。ラヴレツカ夫人の客間に集るフランス人達は彼のことを「ウクラニアの大牛」と呼んだ。バルバラ・パウロヴナは決して彼を自分の公けの夜會に招待することをしない、が彼は彼女の好意を十分に喜んでゐる。

で斯ういふ工合で八年といふ月日が経つた。ふたゝび春の朗かな幸福が天上から息づ



かれた、ふたゝび彼女は大地に向つて、人々に向つて微笑みかけた、ふたゝび彼女の愛撫の下であらゆるものが花咲き、愛し、唱ひはじめた。

〇町はこの八年の間に少しく變つた。けれどマリイ・ドミトリエヴナの家はより、若やいだやうに見えた。近頃塗り更へられたその壁の白さは人を誘ふやうであつた、そして開け放した窓々の硝子は夕日の下に明らみ、煌々と輝いた。これ等の窓を通して、若やしい聲や絶間ない笑ひ聲の軽い嬉しさうな響が街へ傳はつた。家ぢうが生命をもつて泡立ち、陽氣さが外まで溢れ出るかのやうに見えた。この家の女主人は夙の昔に墓の下に入つて了つた。リーザが尼寺に入つてから二年もせぬうちに、彼女は死んだのであつた。マルタ・チモフ・アイエヴナも姪の死後長く生き延びなかつた——彼等は町の墓地に並んで休息つてゐる。ナスタシア・カルボヅナも死んで了つた。忠實な老婦人は、數年のあひだ毎週缺かさず彼女の友人達の屍灰の上に禱りに行つた。遂に彼女の骨も濕つた土のなかに横はる時が來た。

しかしマリイ・ドミトリエヴナの家は他人の手に渡らなかつた。家族の巢は破壊されなかつた。レナは體格の良い、美しい婦人になつた、そして彼女の許嫁は明色の髪をした

若い驃騎兵の士官であつた。マリイ・ドミトリエヴナの息子は最近ペテルブルグで結婚したばかりであつた、そして若い細君を連れて〇町で春を過すために來てゐた。彼の細君の妹で、頬の紅い、眼のはつきりした十六になる女學生も來てゐた。シュロチュ・カも大きくなり、綺麗になつた。——これ等がカレエチン家の邸の壁を話聲や笑ひ聲でもつて鳴り響かせてゐる若い人達であつた。そのなかのあらゆる物が變つてゐた、あらゆる物が新しい住人達に適するやうになつてゐた。洒落や悪戯に充ちた、無髯の、土の小兒等が、生眞面目な老僕共の代りになつてゐた。嘗て肥つたロスキがあちこち勿體振つて歩いてゐた處に、今は二頭のセッタ種が氣狂ひじみた巫山戯かたをして、長椅子の上にまで跳ね上つてゐた。厩には、瘠せた競走馬や、鬣を編んだ元氣のはち切れさうな馬車用の馬や、ドンの曠原から出た乗馬用の駒が段々數を増しつゝあつた。お八つやチンナアや晚餐の時刻が滅茶々々になつた。一切萬事近所の人達の言ひ方に従へば、「聞いたこともないやうな亂雑な」調子であつた。

今吾々の話の上つてゐるこの夕方、カレエチン家の住民達（そのうちの一番の年長者であるレナの許婚者はやつと二十一歳であつた）は複雑なものではないが、親しげな絶



え間のない笑聲から判断すれば非常に面白さうな、何かの遊戯をやつてゐた。彼等は互ひに捕まへ合つて部屋ぢうを駆け廻つてゐた。犬共も走り廻り吠え廻つてゐた、そしてカナリヤ共は窓の前に吊された籠のなかで、羨ましげに咽喉を鳴して轉り、性急な甲高な歌でもつて、家の中の騒動に氣勢を添へてゐた。

この耳を聳するやうな娯樂の眞最中に、泥つぼけになつたタランタスが一臺門口に乗りつけた、そして旅人の服装をした四十五の男がそれから降りて、驚いてそこに立ち止つた。彼は家の様子を熱心に見詰めながら、暫く身動きもせず立つてゐた。それから門口を通つて前庭に入り、ゆつくり石段を上つた。誰も表で彼を見た者はなかつた、が應接間の扉が手早く開けられて、そこから、運動のために眞紅になつたシュロチュカが跳び出した。かと思ふと忽ち彼女を追つて、わつといふ笑ひ聲と共に、若い連中が残らず出て來た。彼女は見慣れない男の姿に、突然、無言のまゝ立ち止つた、けれど彼女の明るい眼は熱心に彼の上に注がれた、そしてそれは以前と同じやうに深切さうに見えた。生々した若い顔共は笑ひをやめなかつた、そしてマリイ・ドミトリエヴナの息子は客人に近づいて何の御用ですかと訊ねた。

『私はラヴレツキです。』と客人は答へた。

親しげな多くの叫びがその返事として彼に注がれた。それは是等の若い人達がみんな遠い、ほとんど忘れられた親戚の到着をひどく悦んだからではなくて、彼等は都合の好い場合があることにわつと騒いで悦びたかつたからである。彼等は直ぐ様ラヴレツキを取り巻いた。レナは、彼の一番古い知合ひとして、自分の名を名乗つた、そしてもう少しすれば自分は確かに彼が誰だか思ひ出したに違ひないと斷言した。そして彼女は仲間の連中を、誰れも彼れも、自分の許婚者さへもを、彼等の一番略した呼び方で呼んで、彼に紹介した、そして一同は食堂を通つて客間へ行つた。この二つの部屋の壁紙は變つてゐた、が家具類はその儘に置かれてあつた。ラヴレツキはあのピアノを認めた、そして窓側の刺繡の框さへ同じ位置に立つてゐた、そしておそらく八年以前の刺しかけの仕事がまだその儘になつてゐたのかも知れない。みんなは彼をマリイ・ドミトリエヴナの椅子に坐らせ、そして自分達は靜かに彼の周圍に座を占めた、そして質問や感嘆の聲や説明が四方八方から起つた。

『随分長いあひだお目に懸りませんでしたわね。』と、レナは素朴に言つた。『そしてバル



バラ・パウロヅナにも私達はお目に懸りませんわ。」

『そりやあ當り前さ!』と急いで彼女の兄は言ひ添へた。『僕はお前をベテルブルグへ連れてつたし、テオドル・イヴァニッチは田舎に居られたんだもの。』

『ええ。あの時分もう母は亡なくなつてましたわ。』

『そしてマルタ・チモファイエヅナも。』とシュロチュカは言つた。

『そしてナスタシア・カルボヅナも。』とレナは應じた。『そしてレムさんも。』

『何! レムも亡なくなつたですか?』とラヴレツキは訊ねた。

『ええ。』若いカレエチンは答へた。『あの方はこゝからオデッサへ行かれました、誰れか

があすこへあの方を煮き附けたものと見えます、そしてあすこで亡なくなられました。』

『あの人の音楽がどれか残つて居ないでせうか、あなたは御承知ないでせうかね?』

『存じません、しかし多分残つて居るまいと思ひますが。』

みんなは黙つた、そして顔を見合せた。悲みの影が若々しい顔のすべてを撫でた。

『「水夫」は生きてゐます。』とレナは突然言つた。

『そしてギデオノヴスキも。』と彼の兄は言ひ添へた。

さうしてギデオノヴスキの名と共に友情的な笑ひが一時に爆發した。

『ええ、あの人は生きて居ります、そして昔に變らず嘘を吐いてゐます。』とマリイ・ドミトリエヅナの息子は續けた。『そして、考へて御覽なさい、このお轉婆が(彼は妻の妹の女學生を指した)昨日あの人のお煙草の筥に胡椒を撒いたのです。』

『どんなにあの人つたら嘘をしたでせうねえ!』とレナは叫んだ、そして拘束なき笑が新しく鳴り響いた。

『あまり以前のことではなくリーザの消息がありました。』と彼女の兄が言つた、そしてふたゝび沈黙が一座の上に落ちた。『あれは、幸福に暮してゐるさうです。健康の工合ももうよくなり初めたさうです。』

『あの方は、やはり同じ修道院に居られるのですね?』とラヴレツキは訊ねた。それは努力なくしてではなかつた。

『ずつと同じところす。』

『あの方はあなた方に手紙を寄越されますか?』

『いえ、決して寄越しません。あれの消息は他の方面から來るのです。』



突然の沈黙が、ふたゝび皆の上に落ちた。「沈黙の天使のお通りなのだ。」と彼等は思つた。

三六四

『あなたは庭園へ行つて御覧になりませんか?』と、カレエチンはラヴレッキの方を向いて言つた。「今大層いゝですよ、たゞし、私達が少し踏み荒しましたけれど。」

ラヴレッキは庭園へ出て行つた、そして眞先きに彼の眼に留つたものは、彼が嘗てあの幸福な、二度と繰返されなかつた數分をリーザと共に過したところのあの腰掛であつた。それは暗くなり、かつ歪んでゐた、けれど彼はそれを認めた、そして甘美さと悲哀とにおいて儔ふべきもののないあの感情が彼のたましひに満ち溢れた——嘗て彼のものであつた幸福の、そして彼の消え去りし青春の、思ひ出が。

若い人達と一緒に彼は並樹道を歩いて行つた。楡の並樹はこの八年のあひだに少しく年古り、大きくなつて、その蔭も深くなつてゐた。あらゆる叢林はより、高くなつてゐた、そして覆盆子が盛んに育ちつゝあつた。山毛櫨や榛の叢林も一層密生して來てゐた、そして四方から新しい苔や樹木や、新しく刈られた草や、またライラックの香が襲つた。「此處で四隅遊びをすればどんなに好いでせうねえ!」レナが楡の樹に囲まれた小さな

緑の芝生に近づきながら、突然叫んだ。「そして私達は丁度五人居るわ。」

『でお前はテオドル・イヴァニッチを忘れてゐるね。』と彼女の兄は言つた。「それともお前自身を勘定に入れなかつたのかい?」

レナはいさゝか顔を赧らめた。

『だけどテオドル・イヴァニッチがあのお年頃で——』と彼女は言ひ始めた。

『どうか、その遊戯をやつて下さい。』とラヴレッキは急いで口を挾んだ。「私に氣兼ねなぞなさらんで。私は、自分が、あなた方のお邪魔をしてゐないといふことが分れば嬉しいです。私に氣を置かないで下さい。老人には、あなた方のまだお氣がつかれない仕事があるのです、どんな楽しみでも、その代りにはなることは出来ません。それは思ひ出といふものです。』

若い人達は丁寧な、けれどほとんど面白がるやうな氣持の混つた尊敬をもつて、ラヴレッキのいふ事を聽いてゐた、あだかも教師から教へでも受けてゐるかのやうに。それから突然彼等は芝生の上に散らばつた、そして彼は一人で残された。四人の若い人達が四本の樹の傍に立ち、一人が眞中に立つた、そして遊戯が始まつた。



ラヴレツキはそろそろ家に歸つて、食堂に入り、ピアノのところへ行つて鍵の一つに觸れた。それは弱い、けれどはつきりした音を立てた、そして彼の心は慄へた。それはあの神興の籠つたメロヂイの、ずつと以前、あの同じ幸福の夜に、今は亡つたレムによつて彈奏されて、ひどくラヴレツキを有頂天にならせたあのメロヂイの、最初の音色であつた。

その後ラヴレツキは客間に入つて行つて、そこに長いあひだ留つてゐた。彼があんなに屢々リーザに會つたことのあるこの部屋では、彼女の姿は一層はつきりと彼の前に浮び上つた。彼は自分の周圍に彼女の存在の痕跡を感ずることが出来るやうな氣がした、けれどこの感情のなかの悲哀は重く、彼を壓倒せむばかりであつた。死が齎す平和はその中にはなかつた。リーザはやはり何處にか生きてゐた、漠然と、遠いところに、彼は生ける者として彼女のことを考へた。けれども彼は尼さんの服裝をして、立ち昇る香の煙の波に取りまかれた朧ろげな、蒼ざめた影のうちに、彼が嘗て愛した婦人の面影は認められなかつた。もしも彼が、彼の考へのうちにリーザを眺めたやうに、彼自身を眺めることが出来たならば、彼は自分自身を認めなかつたであらう。この八年の歲月の間に、

彼の生命のうちに深い轉向が行はれた——多くの者の經驗しない、またそれがなくては人は最後まで自尊心のある人間では居られない深い轉向が。彼は彼自身の幸福について彼自身の利益になる様々の目的について考へる事を止めてゐた。彼は平和を見出してゐた。そして——何の眞實を匿す必要があらうか？——顔や肉體においてのみならず、たましひにおいても年老いてゐた。時々人が言ふやうに、老年まで若い心を保つてゐるといふ事は困難であり、またほとんど可笑しくさへもある。心意の着實さを、立上つて何事かを爲さうとする慾望を、善良といふ事の信仰を、失はなかつた者は、まつたく満足を感じて居られるかも知れぬ。ラヴレツキは満足してゐることの權利を持つてゐた。彼は眞實彼自身を善き師となしてゐた、彼は眞實彼自身に土地を耕すことを教へてゐた、そして彼はひとり彼自身のために勞働した許りでなかつた——彼は、彼の力の及ぶかぎり、彼自身の農奴共の生活を確實にし、力強くした。

ラヴレツキは家から庭園へ出て來て、あのよく知られた腰掛に座を占めた。そしてあの家の前で、あの愛せらるゝところで——彼が黄金色の歡樂の酒が波立ち、舞踏する聖なる盃に向つて無益にそして最後に手を差し延べたあの場所で——孤獨な、家なき放浪



者は、もはや彼の地位に取つて代りつゝある若き時代から彼のところに聞えて来る慌しい叫びに合せて、彼自身の生涯を振り返つた。彼の心は悲しくなつた、けれど重くもならず不満足をも感じなかつた。何の悔恨すべきことがあつたか？ 何の恥づべき事があつたか？ 何もないのである。

『遊び戯れるがよい、若き力よ、陽氣にやるがいゝ、強く、飽くまでも成長せよ。』と彼は考へた、そして彼の心には何等の苦<sup>にが</sup>さもなかつた。『君達の生涯は君達の前にある、そしてそれは吾々のに比べて容易であらう。君達は、吾々のやうに、君達自身の道を求めて、苦闘し、陥没し、そしてまた暗黒のなかに立ち上る必要はあるまい。吾々は吾々の目的を達するために刻苦し労働した、そして吾々のうち何物をも贏ち得ずして止んだ者はどれ程あるか？——しかし君達は何事かを爲す必要はあらう、君達は働かなくてはならない——そして君達の兄弟であるこの老人の祝福は君達と共にあるだらう。そして今日以後、かうした情緒を味つた後は、私に残つてゐるのはたゞ君達に私の最後の挨拶をすることだけだ。悲しみもなく、また美望もなく、何等暗い感情もなくであるけれども。そして、究極を望みつゝ、吾等を待てる神を望みつゝ、かう言ふだけだ。』よく來て呉

れた、孤獨なる老年よ。得る處なかりし生よ、燃え盡きよ、』と。

ラヴレツキは靜かに立ち上つて無言のまゝ行つてしまつた。誰れも彼を引き止めようとするものはなかつた、誰れも彼に氣づかなかつた。前よりも一層聲高に慌しい叫聲は丈の高い楡の樹立の濃厚な緑色の壁のむかうから響き渡つた。彼はタランクスの中に座を占めて、鞭音をさせずに駈け去るやう馭者に吩咐けた。

さうして結局どうなつたか？ おそらく、満足されない讀者諸君は訊かれるかも知れぬ。さうしてその後ラヴレツキは何うなつたか？ リーザは？ しかし、生きてゐる間からあらゆる世間的の事柄を棄却した人達について、何事が言へるだらう？ 人の噂によればラヴレツキはリーザが世を逃れたあの遠くの修道院を訪ねた。そして彼は彼女に會うたといふ事である。會堂から會堂へ廻つて行くとき、彼女は彼が立つてゐるところの傍を通りかゝつた。彼女は彼を眺めずに、迂るやうな、迅いしかし靜かな、尾さんの足取りで通り過ぎた。けれども彼女の眼の睫毛は軽く顫へた、蒼白の顔はも少し低く俯向



いた、そして珠數を纏ふと、握り合せた両手の指は、一層しつかりとお互ひに掴み合うた。

何を彼等は考へたか？ 何を彼等は感じたか？ 誰が知ることが出来よう？ 誰が言ふであらう？ この世にはさうした瞬間が、さうした感情がある……たゞ指さししたばかりで通り過ぎなくてはならない様なさうした瞬間、さうした感情が。

—(了)—

大正十一年六月二十日印刷  
大正十一年六月廿五日發行

(定價壹圓參拾錢)

◀ 家 の 族 貴 ▶

翻譯者

布施 延 雄

發行者

佐藤 義 亮

東京市牛込區矢來町三番地

發行所

新 潮 社

電話番町  
八八八  
〇〇〇  
九八七  
番番番

番二四七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川區西江戸川町  
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木 俊一



## 集全フネエゲルツ

(1)	■ 獵人日記	生田長江氏譯	▼定價貳圓 ▼送料拾貳錢
(2)	■ ルーヂン	田中純氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(3)	■ 初恋	生田春月氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(4)	■ その前夜	田中純氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(5)	■ 煙	大貫晶川氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(6)	■ 父と子	谷崎精二氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(7)	■ プーニンとバフリン	布施延雄氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料八錢
(8)	■ 處女地	田中純氏譯	▼定價貳圓 ▼送料拾貳錢
(9)	■ 春の波	生田春月氏譯	▼定價壹圓卅錢 ▼送料拾貳錢

## 集全イキスフエトスド

(1)	■ カラマーゾフの兄弟	米川正夫氏譯	冊三 各壹圓八拾錢 送料各拾貳錢
(2)	■ 虐げられし人々	昇曙夢氏譯	定價貳圓 送料拾貳錢
(3)	■ 罪と罰	中村白葉氏譯	冊二 各壹圓八拾錢 送料各拾錢
(4)	■ 白痴	米川正夫氏譯	冊二 定價各貳圓 送料各拾貳錢
(5)	■ 賭博者	原白光氏譯	價壹圓七拾錢 送料拾錢
(6)	■ 惡靈	米川正夫氏譯	冊二 定價各貳圓 送料各拾貳錢
(7)	■ 永遠の良人	原白光氏譯	定價貳圓 送料拾貳錢
(8)	■ 二重人格	永島直昭氏譯	價壹圓七拾錢 送料拾錢
(9)	■ 短篇集	永島直昭氏譯	定價貳圓 送料拾貳錢
(1)	■ 青年	米川正夫氏譯	冊二 定價各貳圓 送料各拾貳錢







ゾラ原著 宇高伸一氏譯

■全ナ

ナ■

世界文藝全集 (7)

四六判六百卅頁  
總洋布天命特製  
定價貳圓五拾錢  
郵送料 拾貳錢

『ナナ』！『ナナ』！曾て永井荷風氏の抄譯出でて忽ち發賣を禁止せられ次いで本間久氏の全譯また同じき厄に會ひ、此の稀世の大名著は到底我讀書界に復活するの機なかる可きを想はしめしが、時運際會こゝに其の全譯——一字を略することなく一句を略することなき全譯を公にするを得るに至れり。

出版界稀有の盛況を看よ。  
一舉に**二十四版**に達せり

▼ナナ、この美しく痛ましい女の淫蕩を極めた生涯は、極めて大膽に、極めて露骨に描かれてゐる。今はじめて此の名篇の完譯を得たことは我文壇の大なる喜びであらねばならぬ……(萬朝報評)  
▼今迄完譯のなかつた此書が今度移植された事は喜ばしい事と思ふ。一部の人から誹淫の書と言はれる作ではあるが、作者の寫實的筆致は、殆んど其の頂點に達してゐる。……(大阪毎日新聞評)  
▼男女の肉慾描寫の大膽は、眞に驚く可きものである。姦通もある、同性の愛もある。不倫な戀もある。而も一卷を通じて女性の豐滿なる肉の魅力を強調し、嘆美せるものとも見る可く、誠に稀有の傑作と云ふことを得よう。……(國民新聞評)



396  
335



終

